松島町文化財調査報告書 第３集

西の浜貝塚 R・Sトレンチ(昭和34・35年)

2008年（平成20年）3月

松島町教育委員会

序　　文

西の浜貝塚は縄文時代から平安時代の人々の生活を知ることの出来る遺跡です。

こうした埋蔵文化財は、わたしたちの郷土の歴史と文化を紐解く歴史遺産であると共にこれからの歴史を知ることや文化財の保護と活用に大きく寄与するものであります。

さて、松島町ではこれまで発掘調査が行われて、未整理であった遺物や資料を当時発掘をおこなった後藤勝彦氏に平成２年より時間をかけて遺物の修復や資料の整理を依頼し調査報告書として取りまとめたものを順次発行しております。

本書は昭和３４年と昭和３５年に発掘調査が行われた国史跡、西の浜貝塚のＲトレンチとＳトレンチの報告書です。

本書が広く町民や県民の皆様、また各地の研究者の方々に活用され、地域の歴史資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりますが、遺跡の保存にご理解、ご支援いただいた方々と発掘調査に携わった関係機関の皆様に対し厚く御礼申し上げます。

平成２０年３月３１日

松島町教育委員会

教育長　米川　稔

目　　次

西の浜貝塚.Rトレンチの調査(昭和34年)

〔1〕　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

〔2〕　調査区と堆積・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

〔3〕　出土遺物について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

〔4〕　出土遺物の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

〔5〕　終わりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

西の浜貝塚.Sトレンチの調査(昭和35年)・・・・・・・・・・・・・ 27

〔Ⅰ〕　まえがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

〔Ⅱ〕　貝層の堆積について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

〔Ⅲ〕　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

〔Ⅳ〕　出土遺物の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55

〔Ⅴ〕　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66

西の浜貝塚Ｒトレンチの調査(昭和34年)

[1] はじめに

昭和３４年の西の浜貝塚の調査は、塩釜市史編纂委員会が松島湾岸の古代遺跡の調査を進め、縄文文化中期末から後期の編年学的研究を更に、推進するために実施された。

調査は昭和３４年(1959) ７月２９日から８月３日まで実施され、調査地点３地点でＲトレンチ（第３地区）は、斎藤良治氏の担当である。種々の事情があり遺物整理が一番遅れた調査区である。担当者によって調査の成果が報告されている(齋藤 1968･1971)。

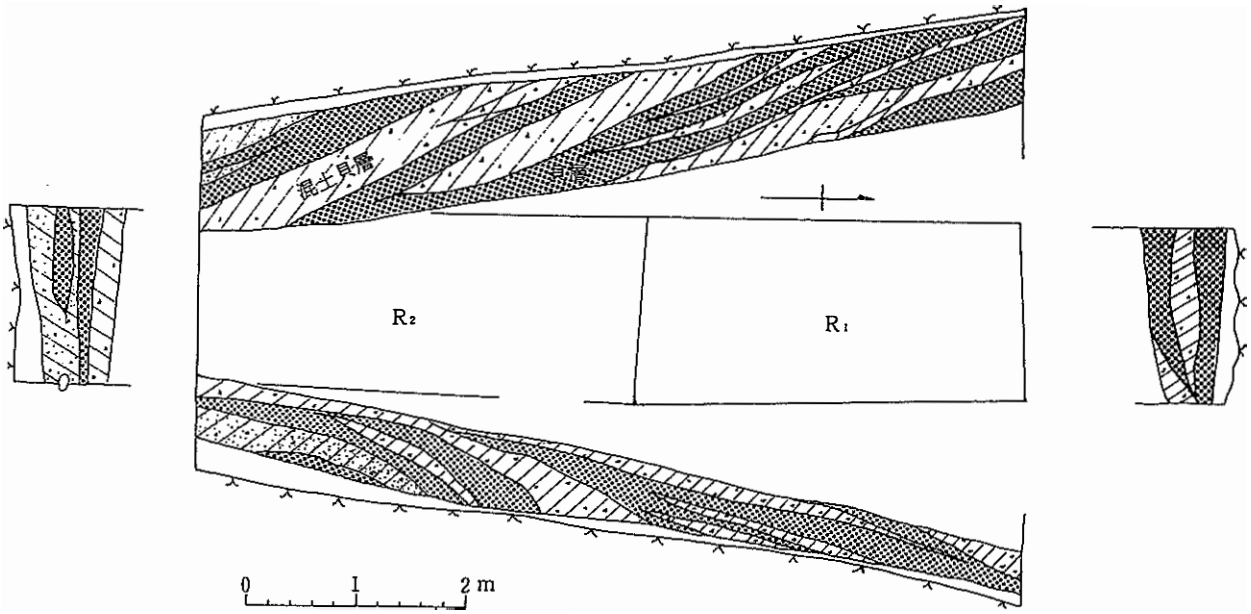
『松島町史資料編』の編纂で困惑し、結局層位的な記載出来ず、当時の土器編年の特徴を持つ各時期の型式で、羅列的に第１類土器から第１１土器に記載に止まり、Ｎ・Ｓトレンチも同様な記載となったのである。

[2] 調査区と堆積　（第１図）

調査区は西の浜貝塚の西側斜面の台地のほぼ中央、台地上に通ずる小径の西側、緩やかな斜面に沿って、南北に２×８ｍの調査区である。

壁面図(第1図）から、約１ｍの貝層堆積があり、混土貝層、貝層と互層となり、大きく４つの貝層堆積であり、しかも大きく層位は４層である。貝層は南に傾斜し、東壁が堆積層が厚い。遺物の保存状態も良好であり、主たる時期は宮戸Ⅲａ・ｂ式で後期末葉にあたる。壁面図に記載した層位名は、混貝土層（１混）と貝層のみである。実際、著者が遺物を整理して、ほとんどの遺物に記名が無く、整理に困惑した。幸いリンゴ箱に記載された層位がある。
１貝と１混だけである。斎藤良治氏の「陸前地方縄文文化後半の土器編年について」(1968)の報文の、出土土器の類型を示した層位図記載の「第２混土」・「土層」の出土資料は検出出来なかった。１貝も１混も壁面図を見る限り、数層の堆積層があり、層位の細分が可能であったが、現在は不可能である。整理の過程で疑問点を斎藤氏に問いたところ、「土器型式を分類するために層を大きく分類した」「報告のＰ５６の層位模式図は、土器型式を主点に考えたので、層のくわしい観察は十分でなかった」とのことであった。１混はシリット施文の土器群、１貝は小突起施文の土器群、２混土（第３層）は、１貝の小突起施文に近い土器群の様であるが明らかでない。土層（第４層）は繊維土器、大木１０式、堀ノ内式、加曾利Ｂ式が混在するという。１混と１貝は土器型式で区分し、２混土と土層は堆積で区分している。ある意味では非常に単純明快で分かりやすい提示である。

残念ながら資料の出土状態は単純なものではない。報告に提示された第２類・第３類土器内部の新旧差、精製・粗製土器の新旧差が明らかにできない。同時３地点の調査のためＮトレ担当の著者は、Ｒトレの調査にはほとんど観察する機会がなかった。



第１図　西の浜貝塚　Ｒトレンチ壁面図

[3] 出土遺物について

松島町史に記載してある通り、土器が主であり特記は土版の出土であり、骨角製品と彩色された角偶があり、貝製品の出土がある。自然遺物も多少存在する。

（1） 出土土器

ほとんどが記名がなかったが、リンゴ箱に層位が記載された遺物がある。それも１混・１貝である。その内容は(第2･第5~13図)

1混

① 繊維土器(第5図1)　② 中期大木９式併行の土器(第5図2)　③ 大木１０式併行の土器(第5図3-9)　④ 宮戸Ⅱ式(加曾利B式)併行の土器(第5図10-12)　⑤ 西の浜式併行の土器(第5図13-23)　⑥ 宮戸Ⅲａ式併行の土器(第5図24-43)　⑦ 宮戸Ⅲｂ式併行の土器(第5図44-45)　⑧ 羽状・斜行縄文施文の土器(第6図1-12)　⑨ 無文土器(第6図13-21)　⑩ 擦痕土器(22-34)　底部については、無文が多く、網代文が続き、葉文は僅かである(第6図35-40･第7図)。 注口部。　　1貝の図版 (第2･8~9図)

1貝

② 中期大木９式併行の土器(第8図11)　③ 大木１０式併行の土器(1-10･12-15)　④ 宮戸Ⅱ式併行の土器(16-20)　⑤ 西の浜式併行の土器(21-26)　⑥ 宮戸Ⅲａ式併行の土器(27-31)　⑧ 羽状・斜行縄文施文の土器(32-47･第9図1)　⑨ 無文土器(第9図2-6)　⑩ 擦痕土器(7-12)　底部も無文が多数で網代文が続き、葉文は僅かである(第9図12)。

1貝？・不

１貝かどうか不明の遺物である。(第10~12図)

③ 大木１０式併行の土器(第10図1-10)　④ 宮戸Ⅱ式併行の土器(12~13)　⑤ 西の浜式併行の土器(14-21)　⑥ 宮戸Ⅲａ式併行の土器

(22-48・第11図1-4)　⑧ 羽状・斜行縄文施文の土器(第11図5-19)　⑨ 無文土器(20-27) ⑩ 擦痕 土器(28-43)　底部は無文で上底風のもの、台付も存在する。網代文も多少存在、葉文もあるが僅かである(第12図)。

１混も１貝も出土土器に、たいした変化はない。１混に第５図４４ー４５の宮戸Ⅲｂ式の遺物が存在することだけである。

また、松島町史資料編に記載してあるＲトレンチは、出土層位が不明であったが、１混・１貝の層位が明になった土器が小量出現した第１３図である。

１混　① 繊維土器(第13図6)　③ 大木１０式併行の土器(7-10・15)　⑥ 宮戸Ⅲａ式併行の土器(11-21)　⑦ 宮戸Ⅲｂ式併行の土器(22-28)　底部は網代文(29)である。

１貝　① 繊維土器(第13図1)　③ 大木１０式併行の土器(2-3)　⑧ 斜行縄文施文の土器(4)　底部は網代文(5)である。

この場合も１混に宮戸Ⅲｂ式土器が多い。

最後に層位の不明な土器を松島町史と同様に、層位で分類できないので、当時の型式に特徴を持つもので分類することにした。　(第3図・4、14~20図)

①　繊維土器(第14図1-3)　③　大木１０式併行の土器(4-7)　④　宮戸Ⅱ式併行の土器(8-17)　⑤　西の浜式併行の土器(18-29)　⑥　宮戸Ⅲａ式併行の土器(第15~16図)

⑦　宮戸Ⅲｂ式併行の土器(第17図1-27)特に(第17図22-27)は篦刻目文である。　⑧　羽状・斜行縄文施文の土器(第19図)　⑩　擦痕土器(第18図)　⑪　晩期玉抱入組文の土器(第17図28)

⑨　無文土器等に分類される。

（２）　土製品として土版がある。１貝層の出土である。現存長１２.２㎝、推定長１６.０㎝と考えられる。下部幅９.６㎝、厚さ３.２㎝である。出土状態は４個に割れて、同一貝層中１～２ｍぐらいの範囲で、発見されている。時期は宮戸Ⅲａ式の張瘤施文土器群に伴って出土。(第20図上段)

また、土器片製円盤が５点の出土がある。

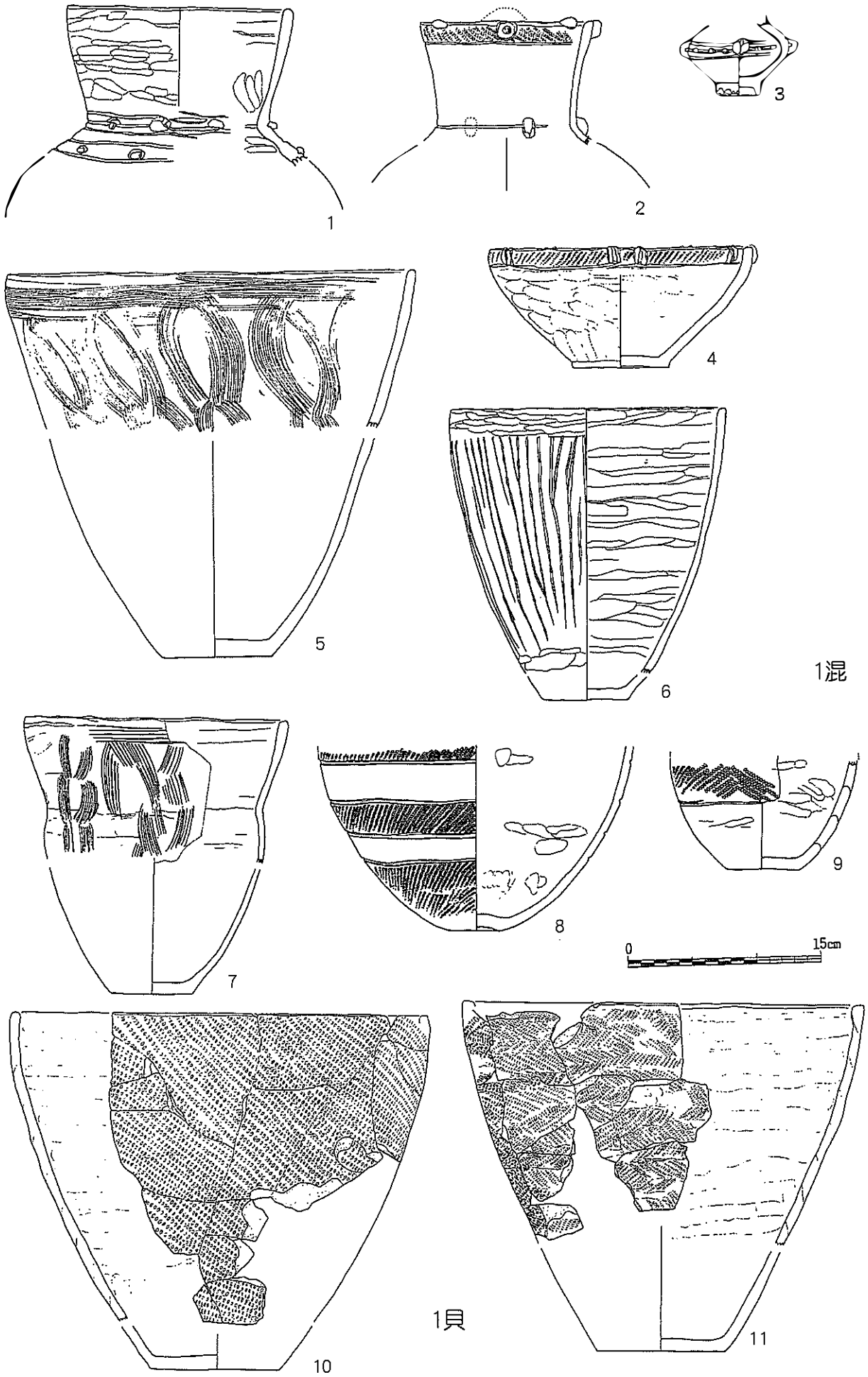
（３）　骨角製品　骨角器の出土が多い。　(第19図下段)

①　刺突具　固定銛が多い。また、アカエイの尾刺を利用したもの(3)も存在する。
中手骨・中足骨を利用した骨匕、細い刺突具もある。

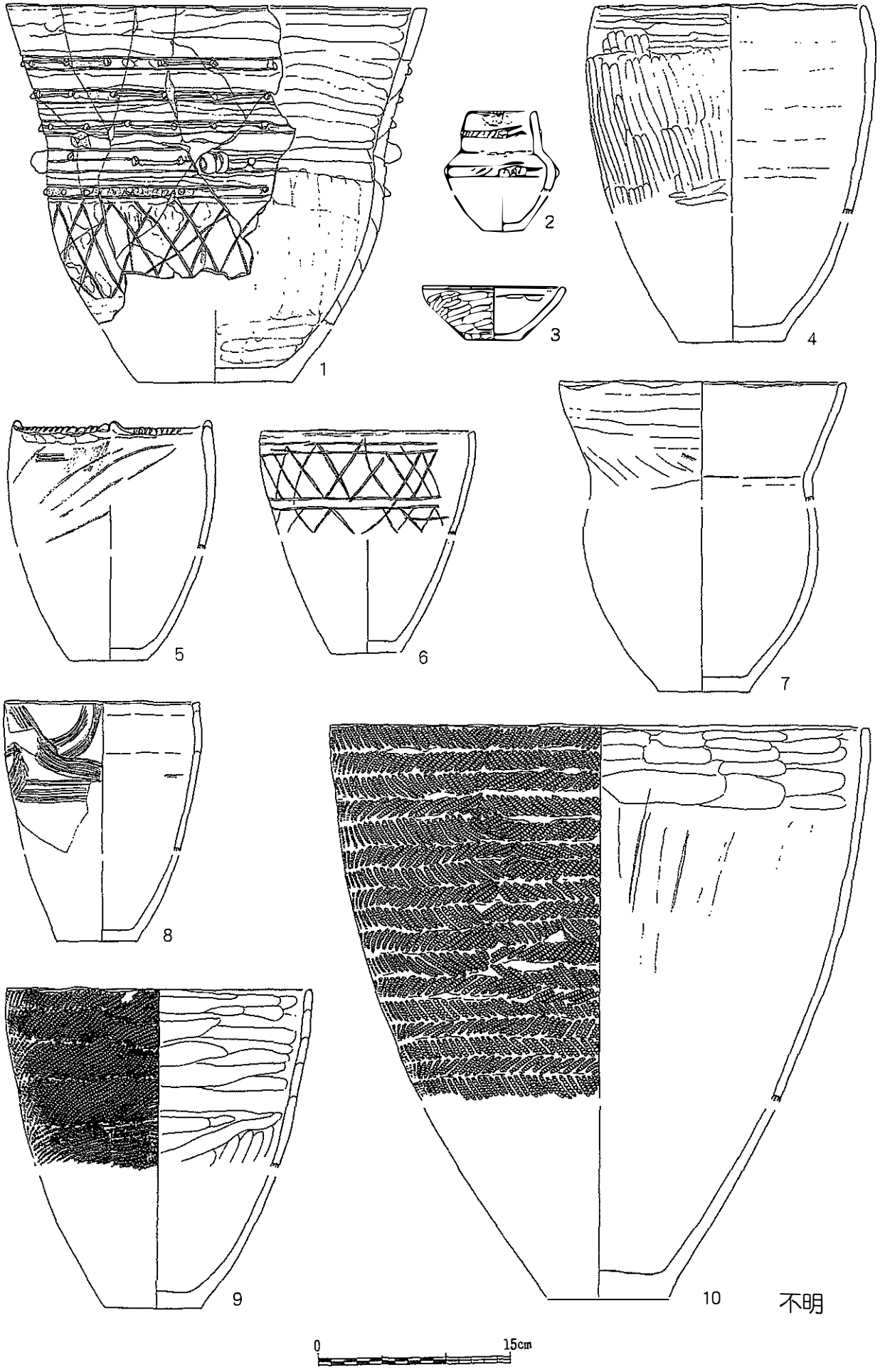
②　装身具　髪飾り、赤彩した飾りが出土している。

③　釣針　出土が少ないが１点あり、形態から組合せと考えられる。

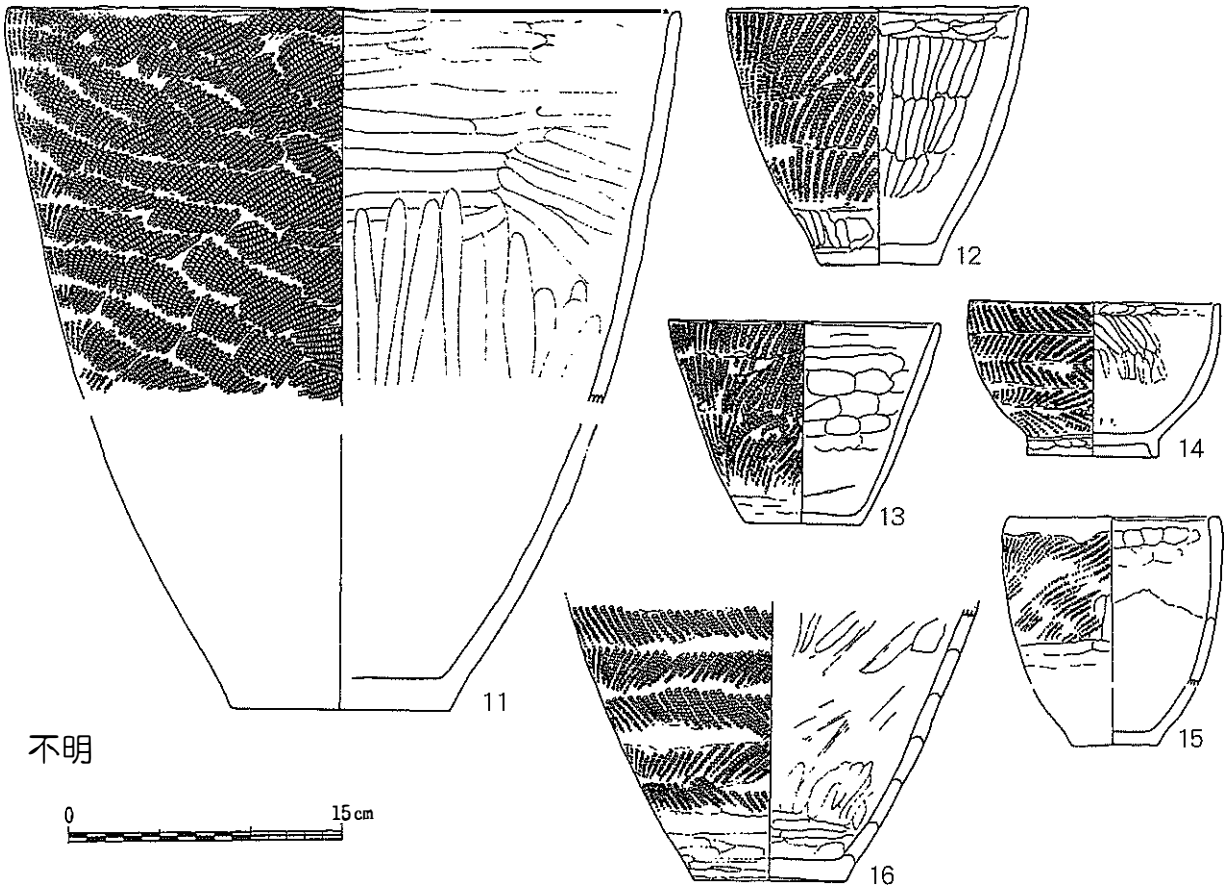
④　角偶　朱漆を塗り、眉、目、鼻、口を表現し、口の下顎には文身状のものも見られる。幅２.７㎝である。残念なことに保存悪く、朱漆がはげて調査時の様相はない。僅かに、眉、目、鼻の位置が判断される状態である。(第20図中・下段)



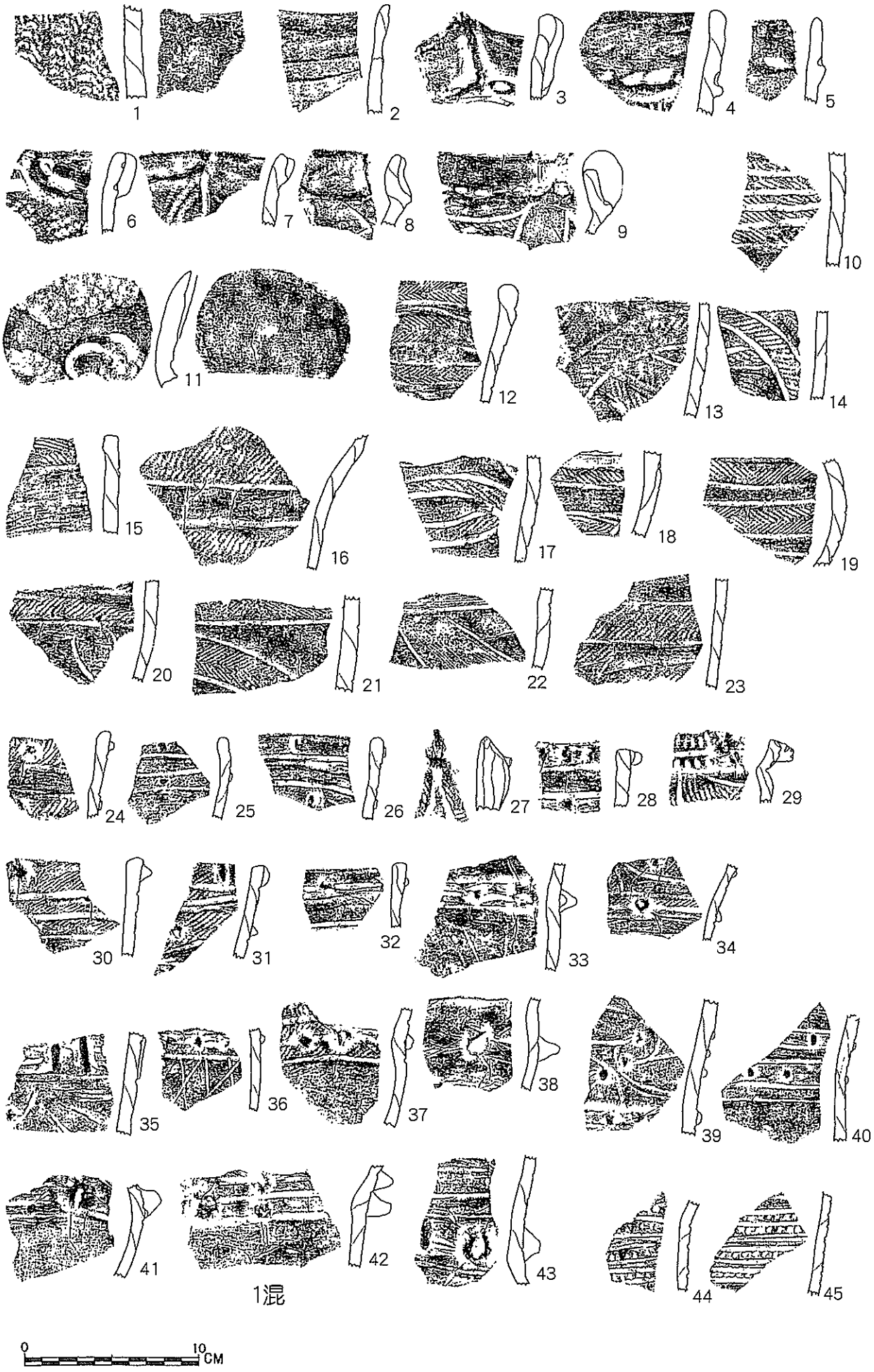
第2図



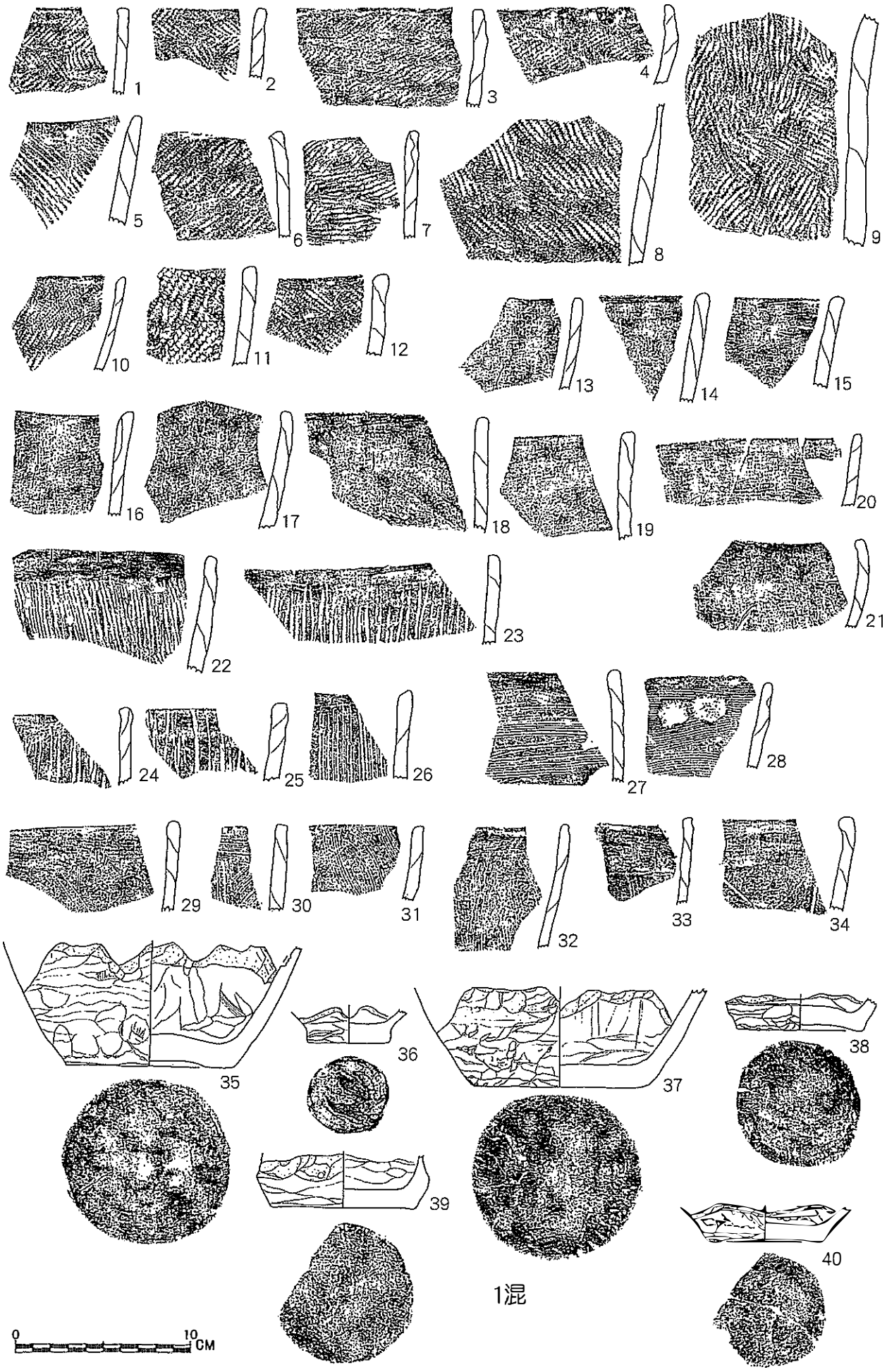
第3図



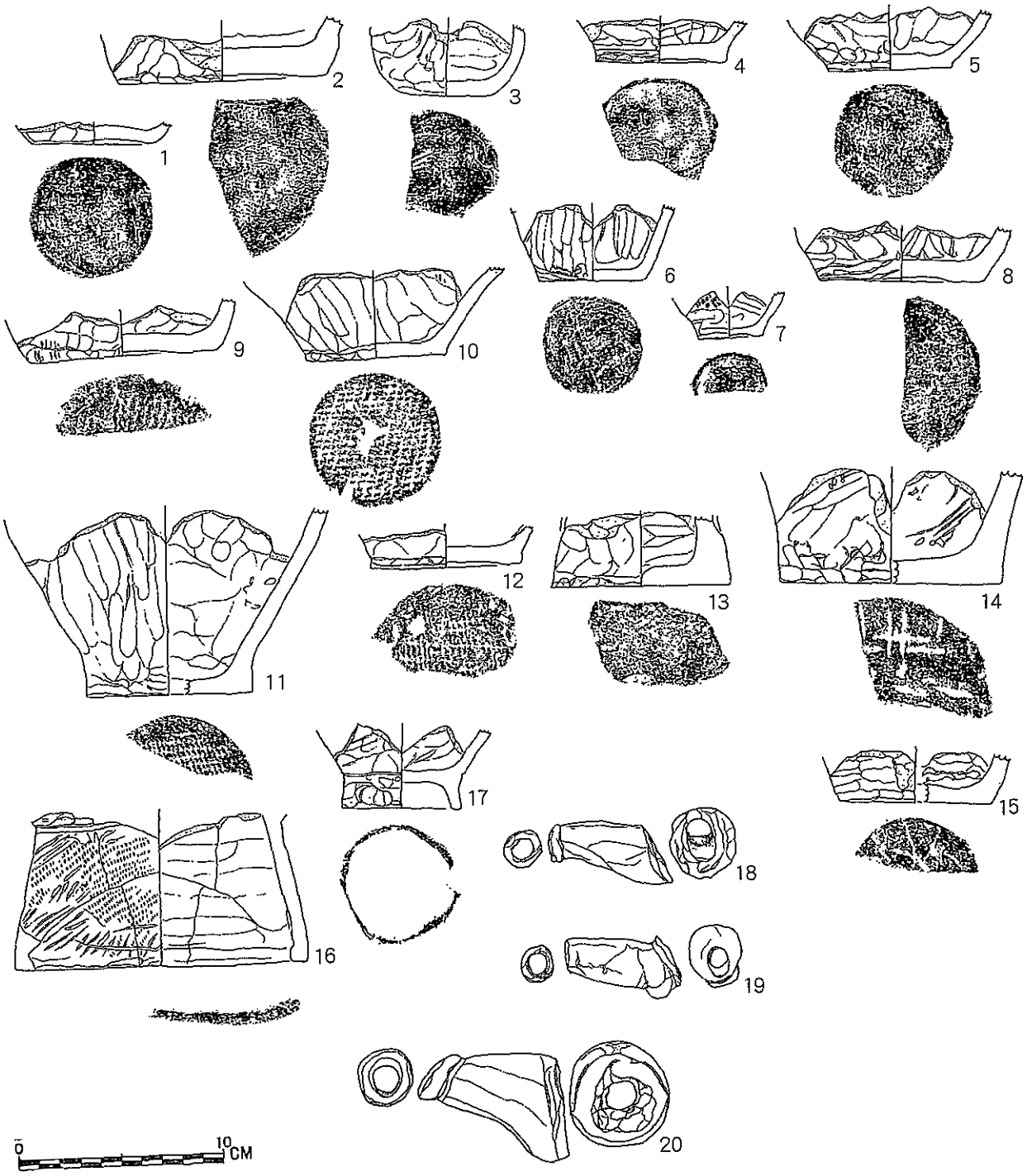
第4図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
1混
0
10
CM

第5図　　R1混　②

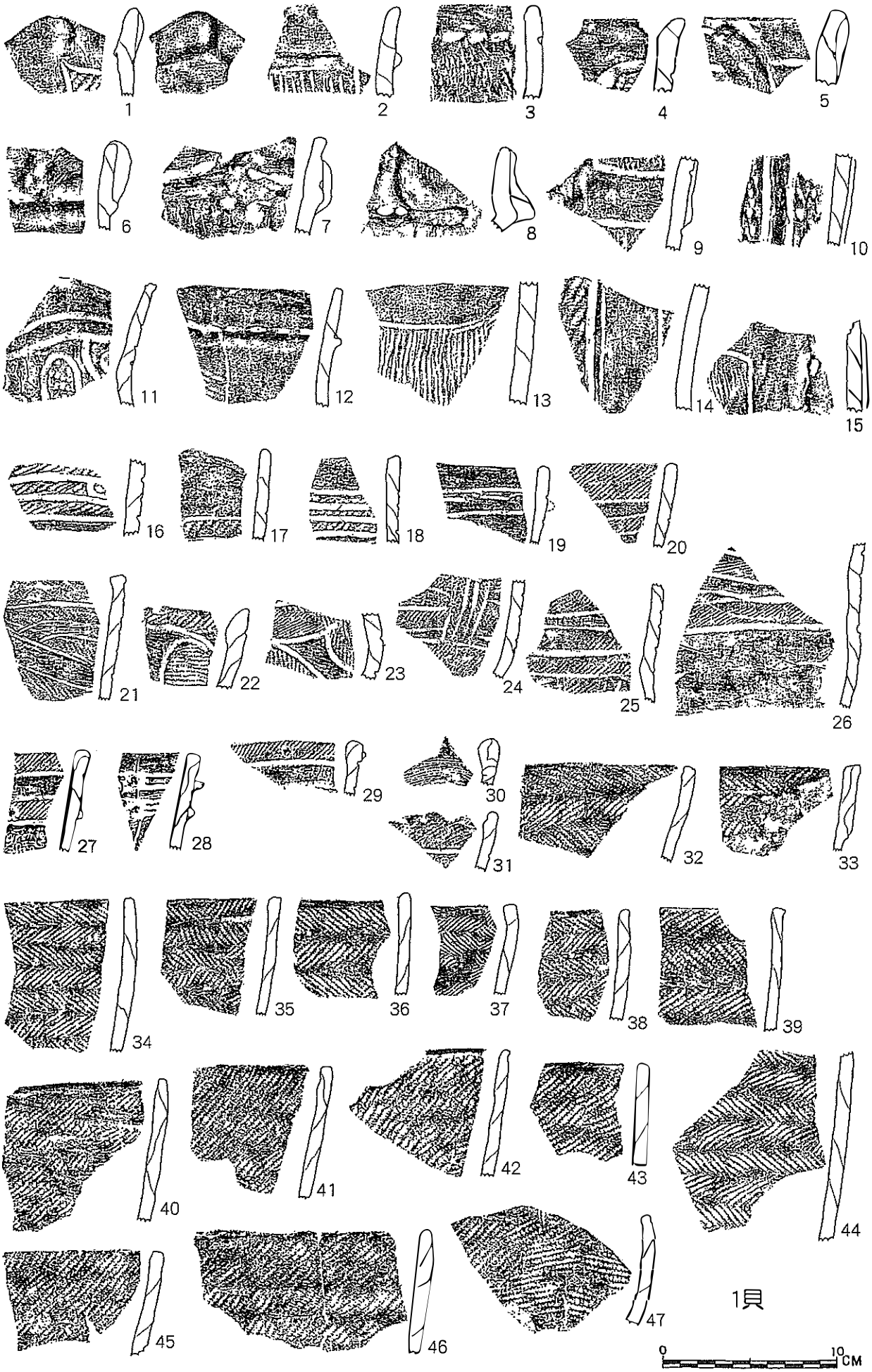

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
1混
0
10
CM

第6図　　R1混　③

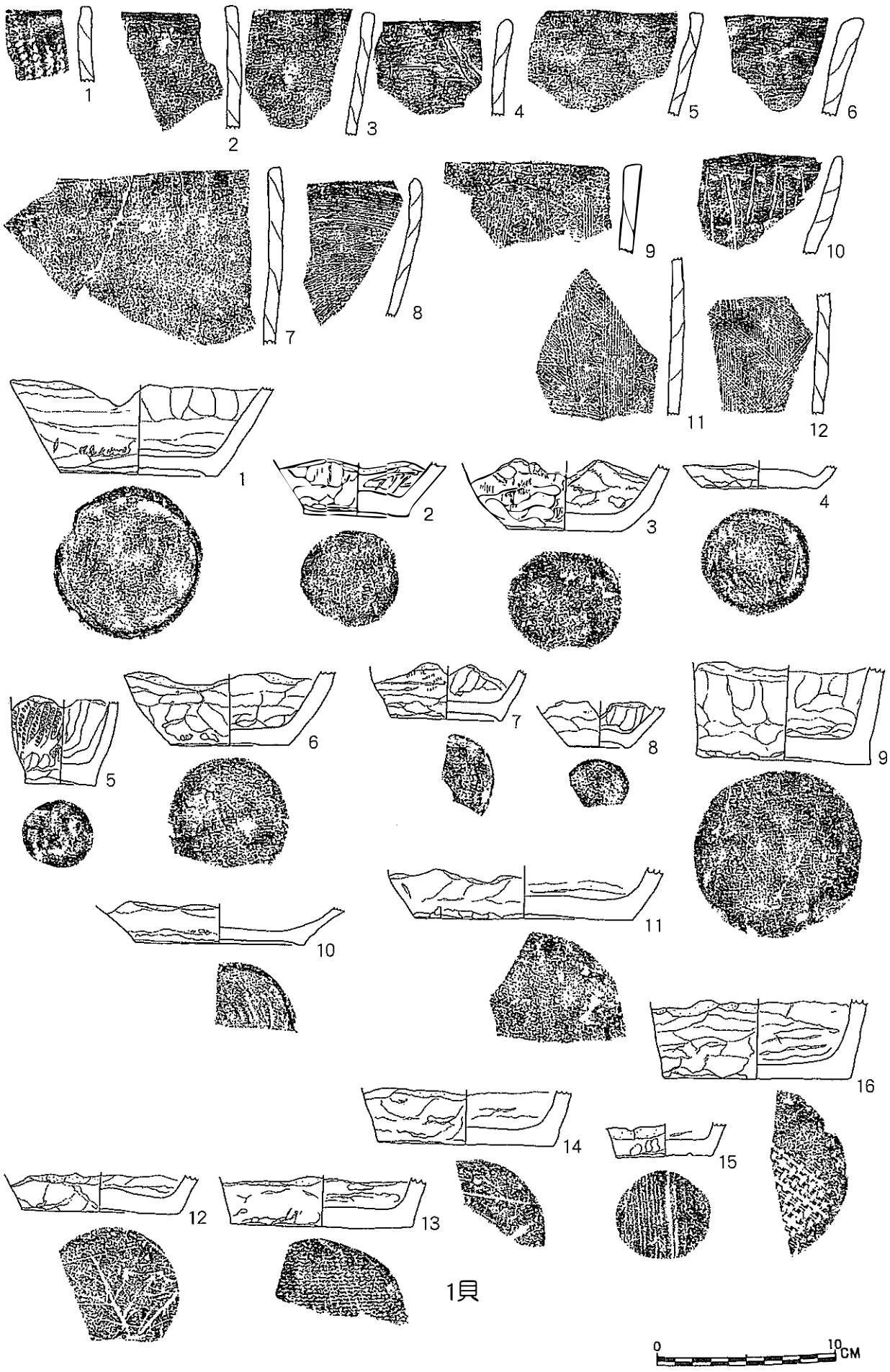


第7図

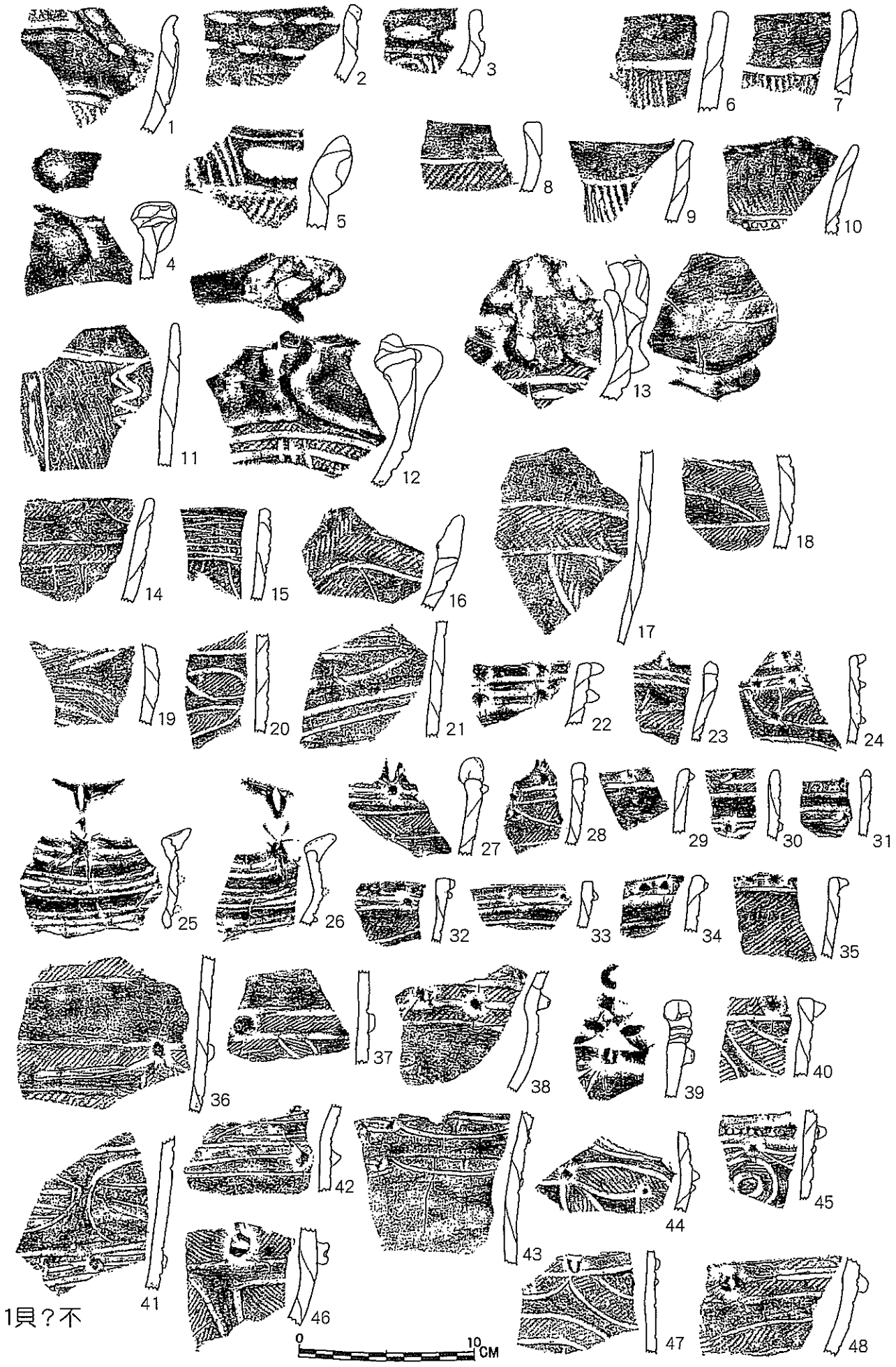
R1混　④


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
1貝
0
10
CM

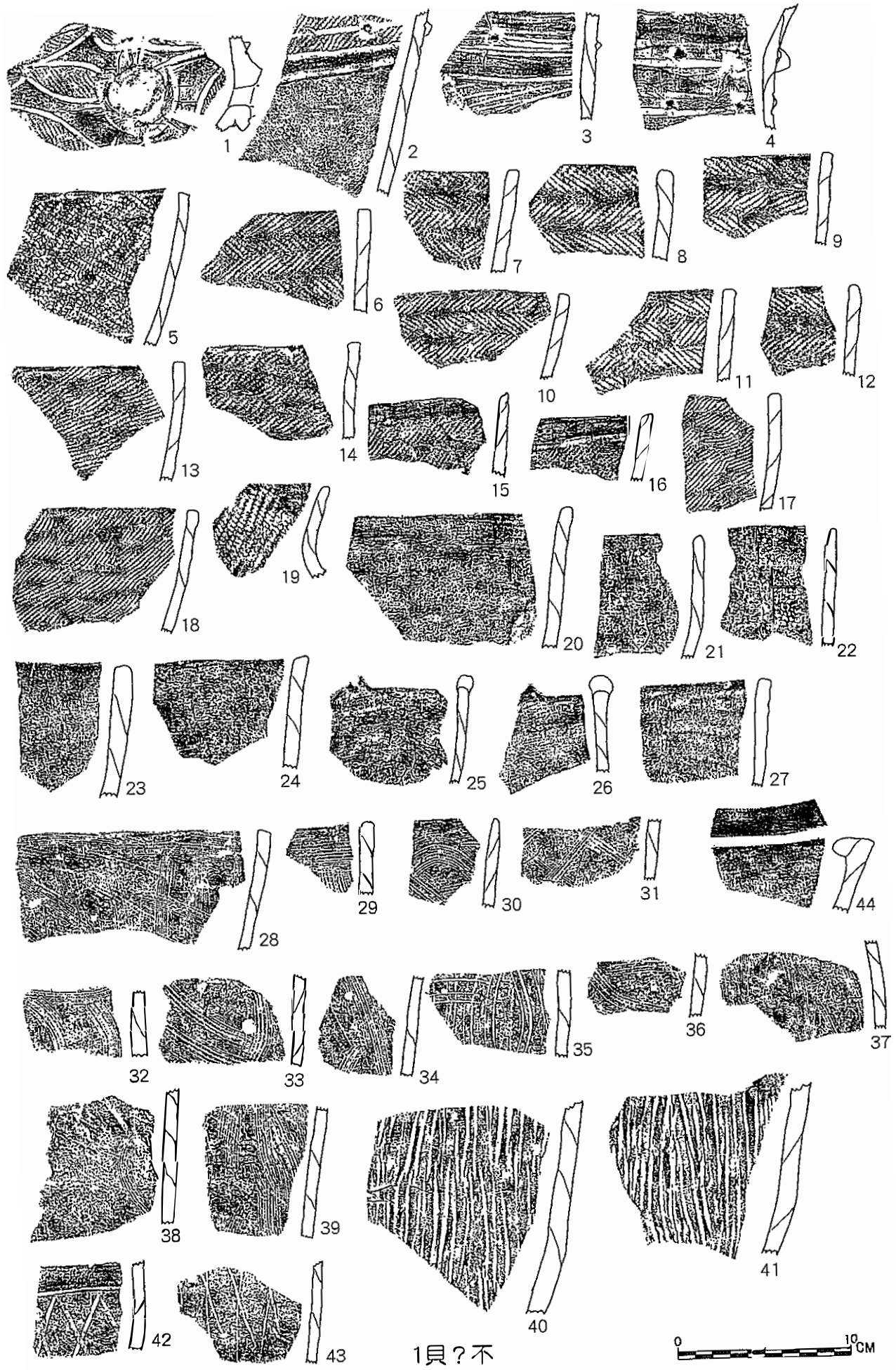
第8図　　R1貝　⑤



第9図　　R1貝　⑥

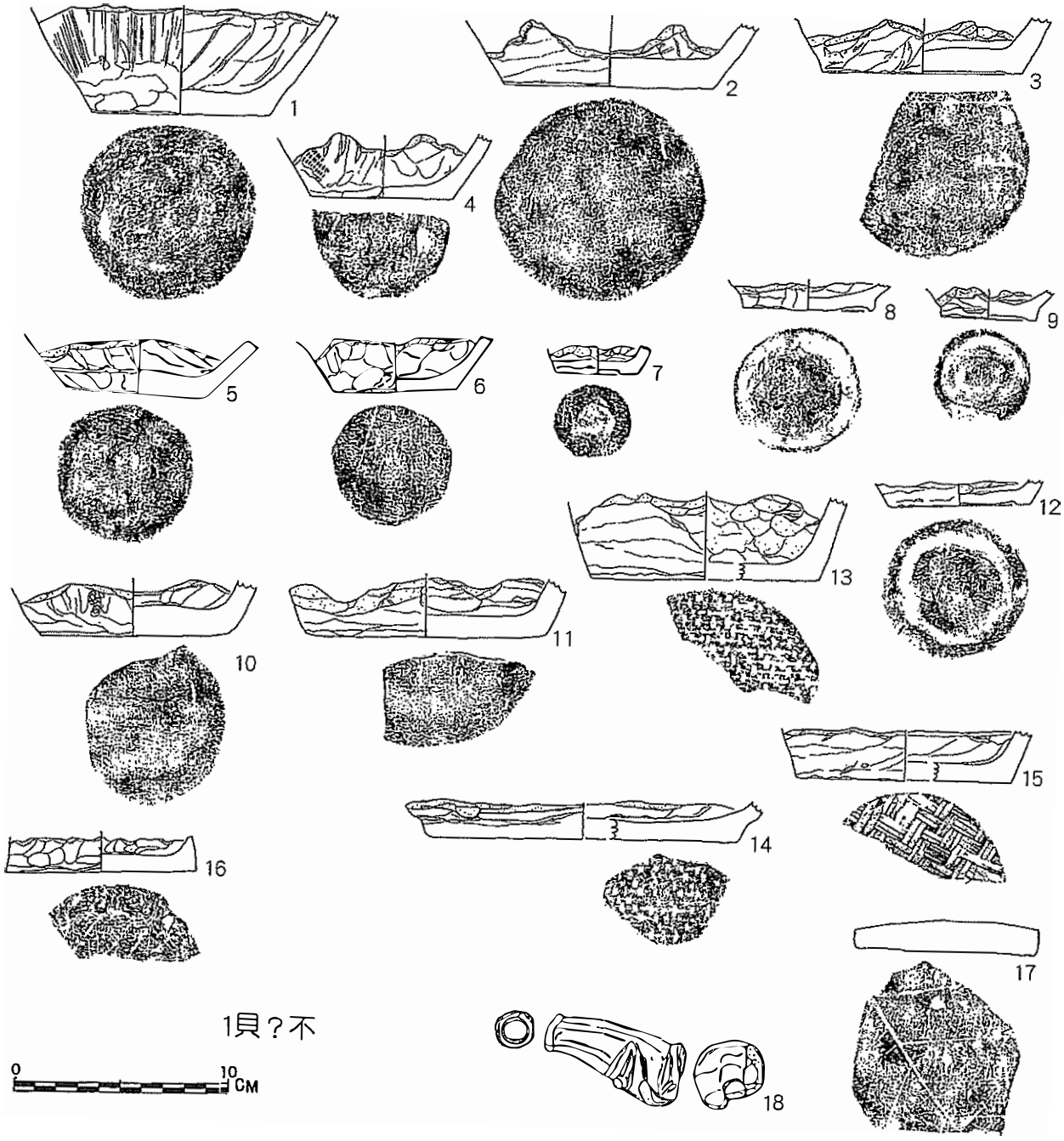

1
2
3
6
7
8
5
9
10
4
13
11
12
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
27
28
29
30
31
25
26
32
33
34
35
36
37
38
39
40
42
45
44
43
41
46
47
48
1貝？不
0
10CM

第10図　　R1貝？　⑦


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
44
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
1貝？不
0
10CM

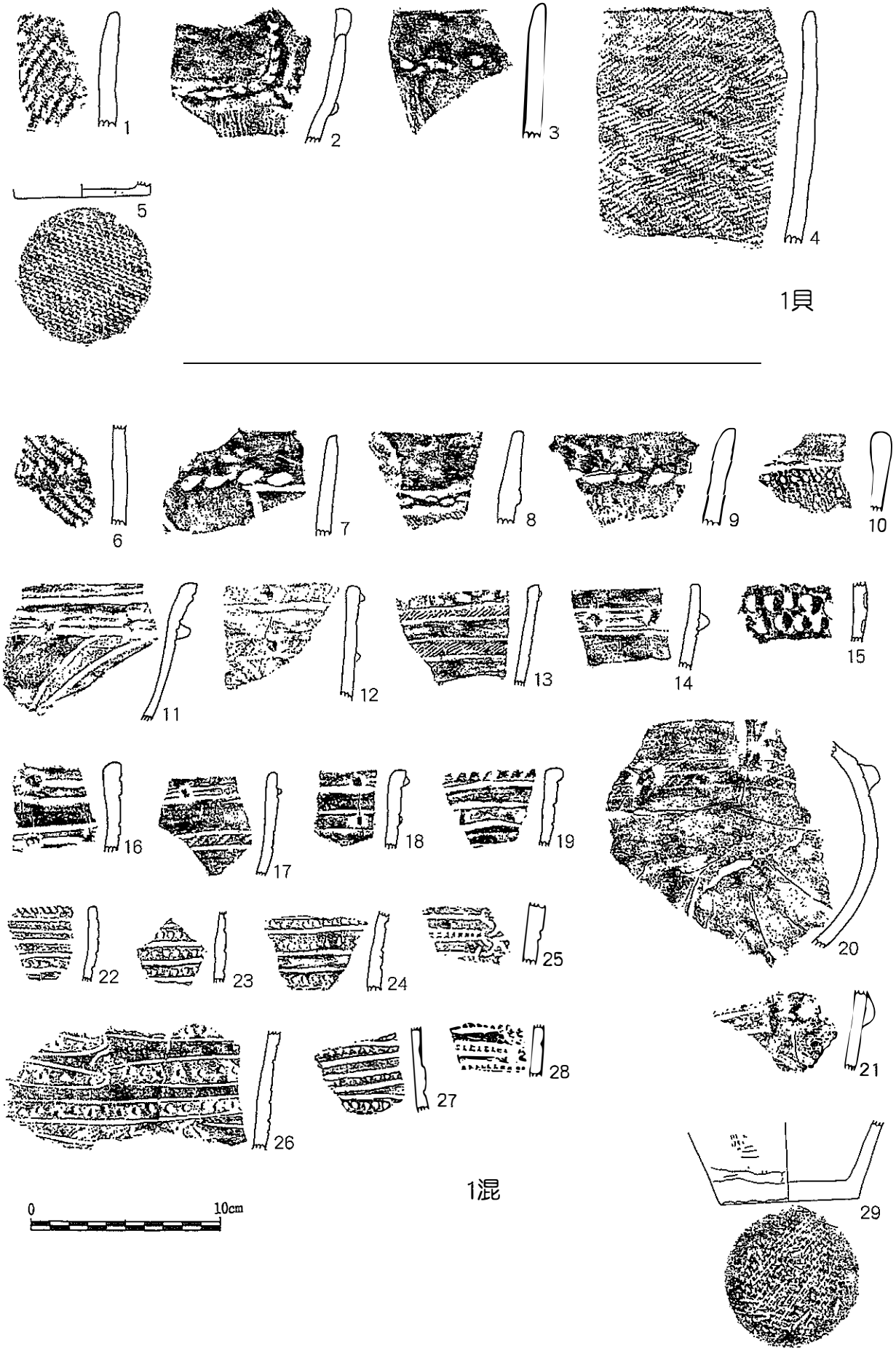
R1貝？不 ⑧

第11図



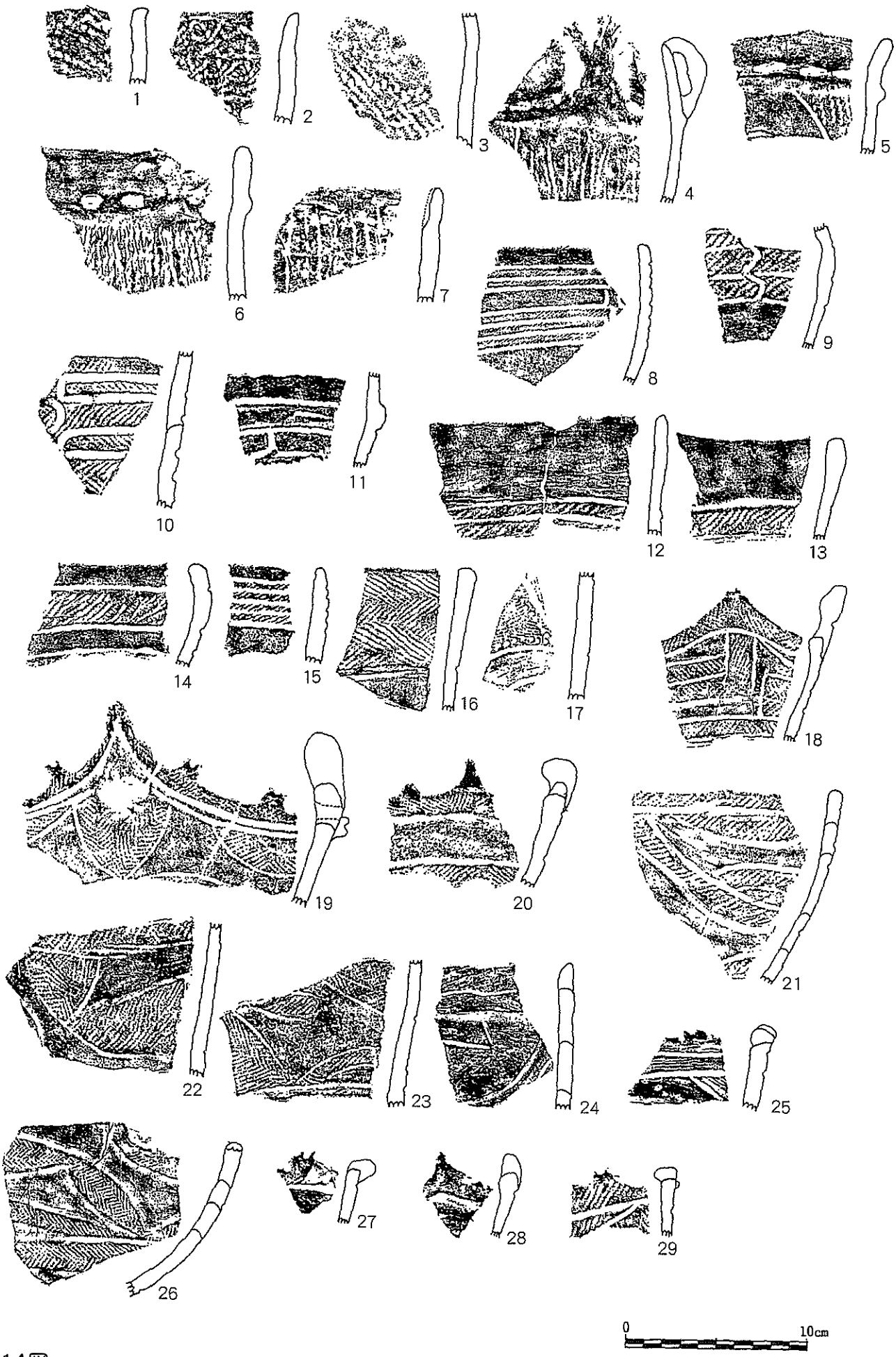
第12図

R1貝？不　⑨


1
2
3
4
5
1貝
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
1混
0
10cm

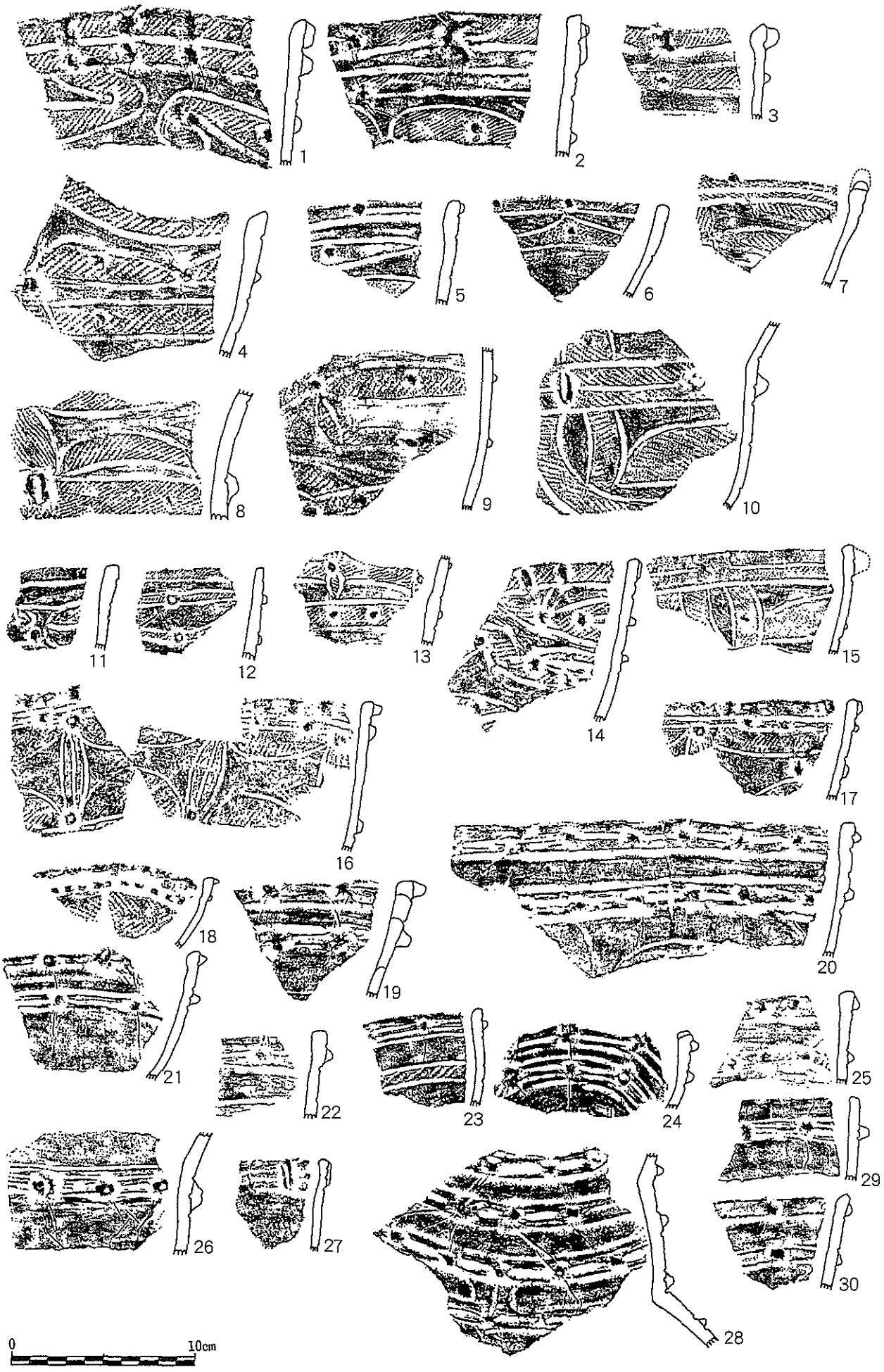
第13図

⑩


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
10cm

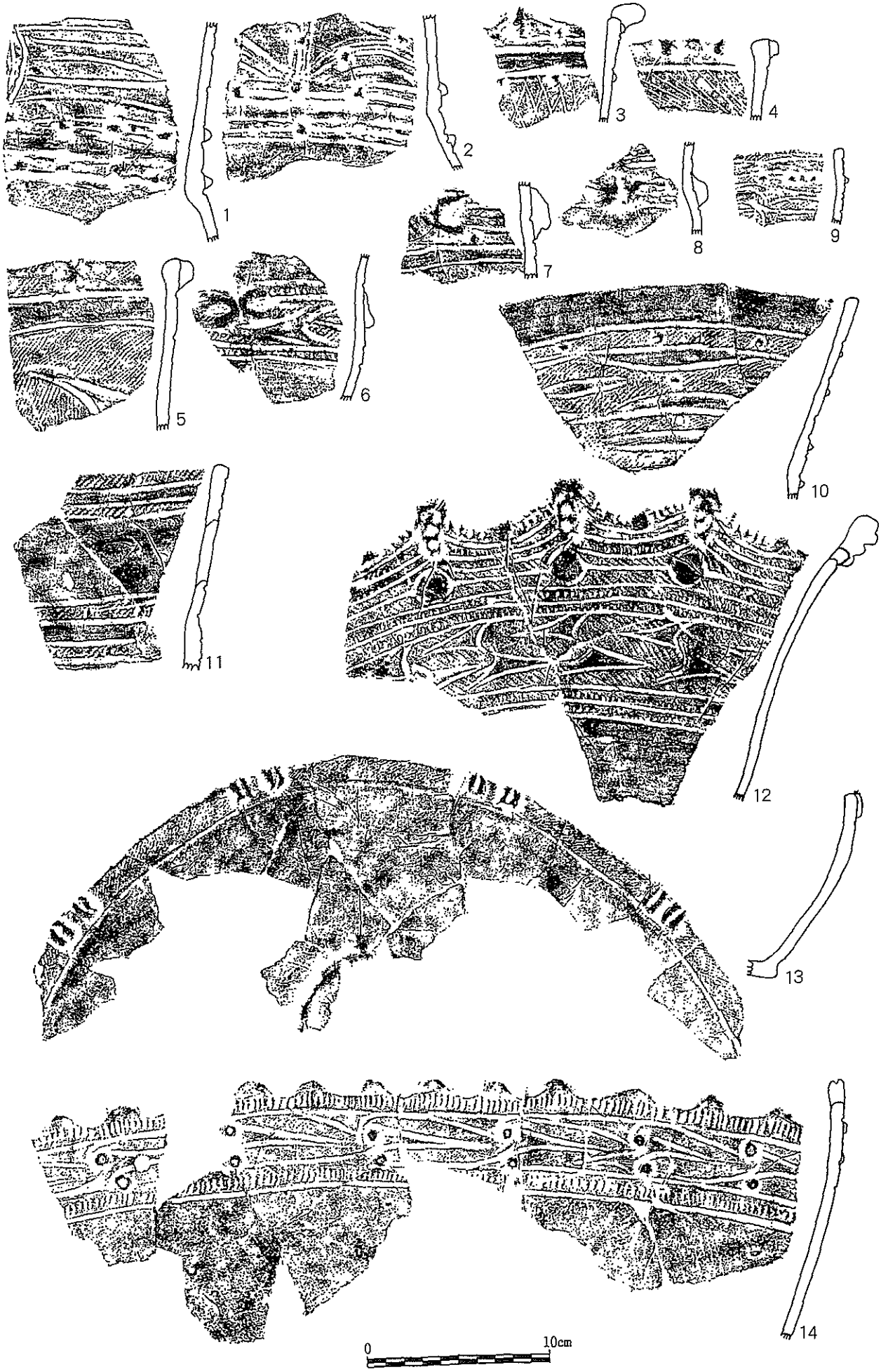
第14図

R ⑪


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
0
10cm

第15図

R ⑫



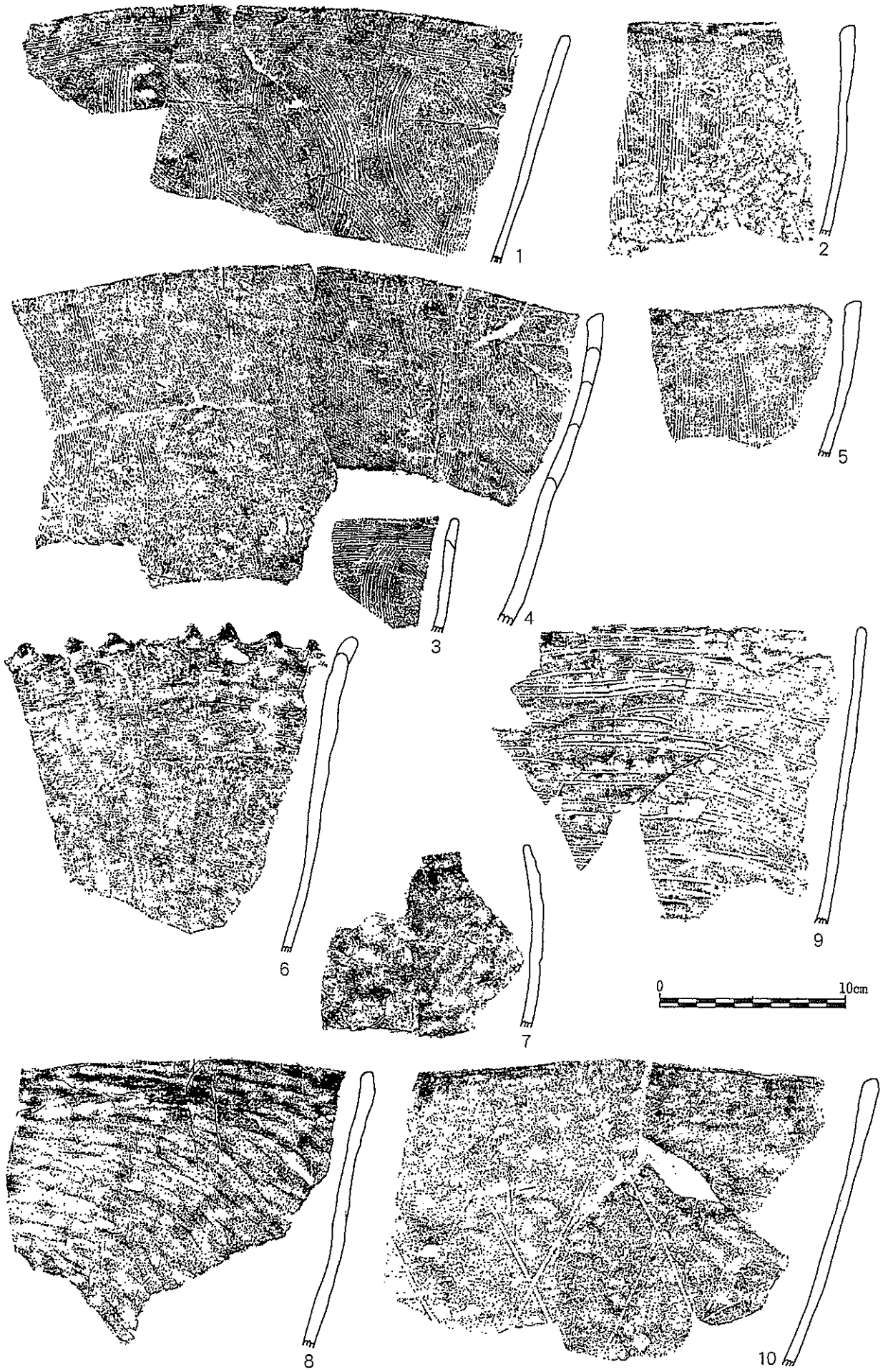
R ⑬

第16図

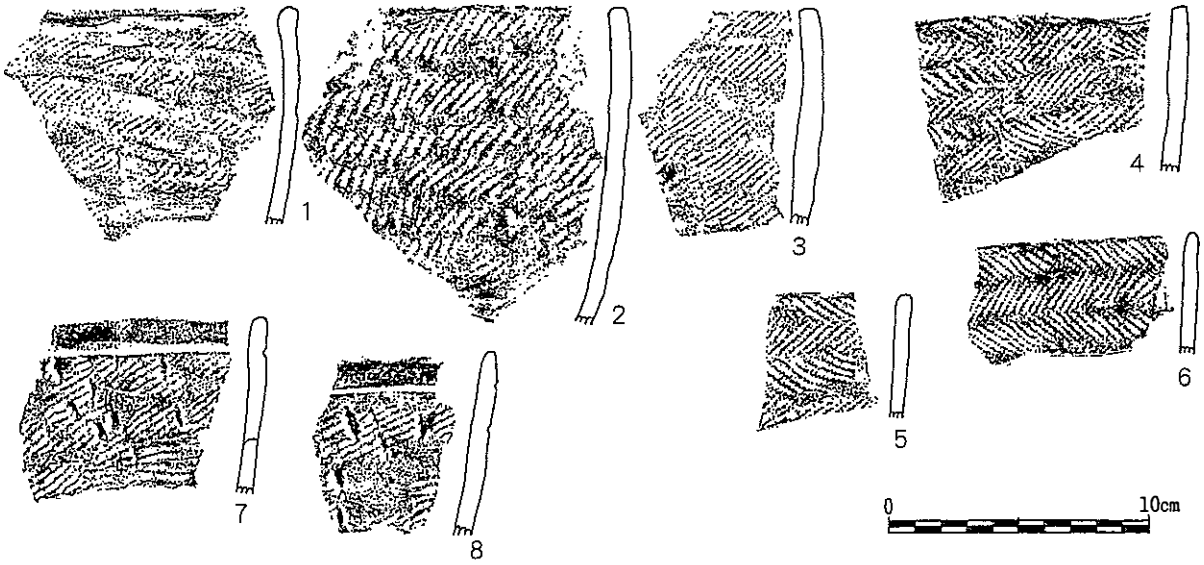
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
21
22
23
24
25
26
27
28
0
10cm

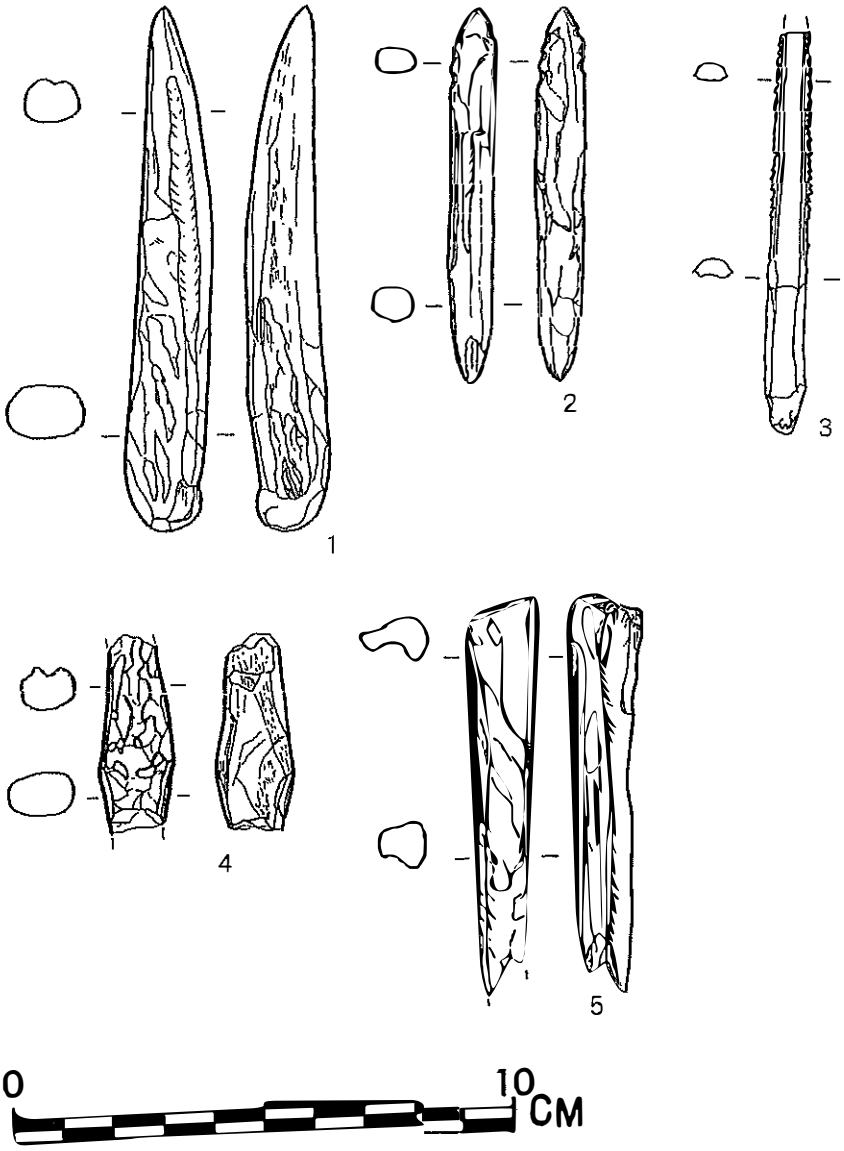
第17図

R ⑭



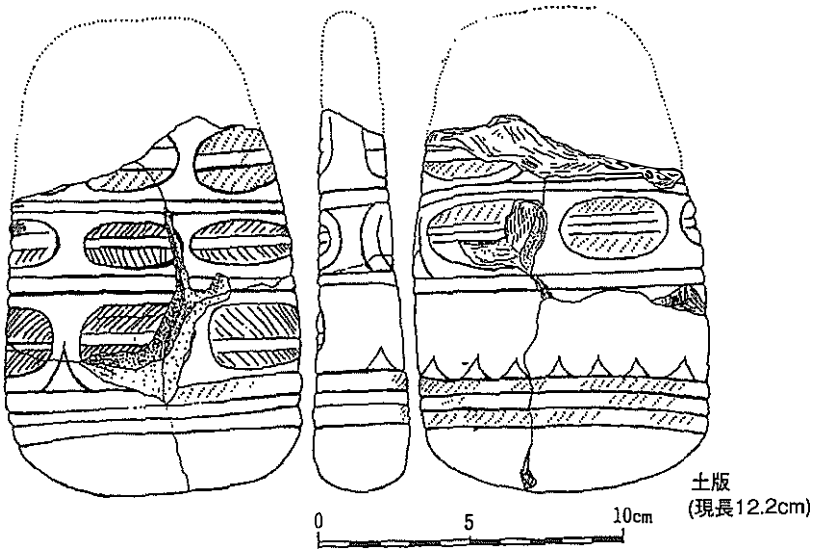
第18図　　R ⑮



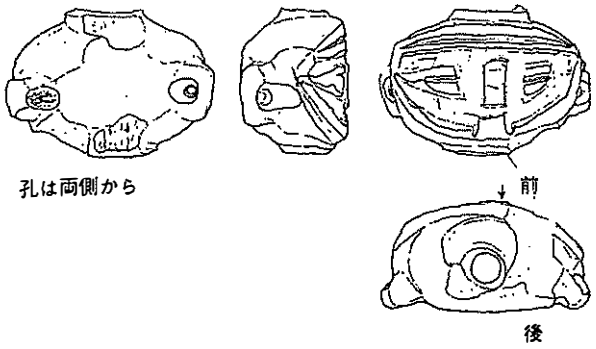


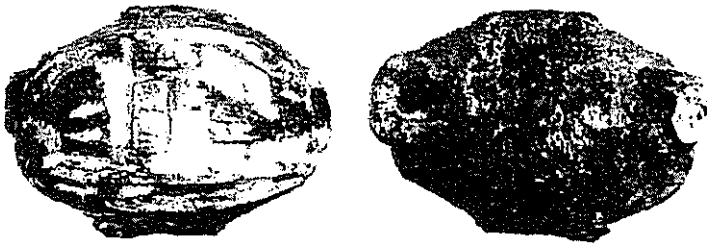
第19図

R ⑯

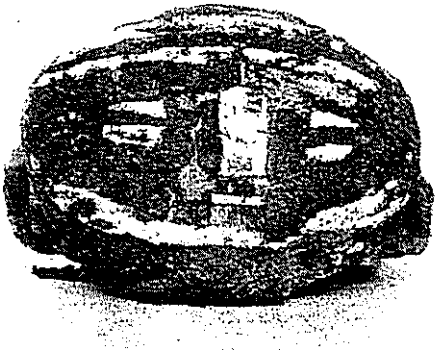


土版
(現長12.2cm)





▲角製偶（巾2.7cm）



◀同上当時の状態

第20図

（4） 貝牙製品

① 貝輪　ハマグリ製１点、貝種が不明であるが穿孔がり、繋いだものと考える。牙製品のものがある。

（5） 自然遺物

① 哺乳類　シカ　頭骨２、第一頚椎２、第二頚椎３、上腕骨Ｌ４・Ｒ４、橈骨Ｌ３・Ｒ４、尺骨Ｒ２、肩甲骨Ｌ４・Ｒ３、中手骨Ｌ５・Ｒ９、大腿骨Ｌ５・Ｒ３、脛骨Ｌ２・Ｒ１０、中足骨Ｌ７・Ｒ８、寛骨Ｌ２・Ｒ３、踵骨Ｌ１・Ｒ４、距骨Ｒ３、上顎骨Ｌ３・Ｒ３、下顎骨Ｌ１２・Ｒ５である。

ニホンジカ
上顎骨出土数表

	L	R	段階
	M_3 M_2 M_1 P^4 P^3 P^2 C 切歯骨 m^4 m^3 m^2 c	切歯骨 C P^2 P^3 P^4 c m^2 m^3 m^4 M_1 M_2 M_3	
R トレ		[m^2 m^3 m^4 M^1]	Ⅲ－2
	[P^2]		
		[M^2 M^3]	Ⅳ－3
	[M^3]	(M^1)	〃
	(M^2)	(M^2)	

ニホンジカ
下顎骨出土数表

	L	R	段階
	関節突起 下顎角 M_3 M_2 M_1 P_4 P_3 P_2 C I_3 I_2 I_1 切歯部 m_4 m_3 m_2 c i_3 i_2 i_1	切歯部 I_1 I_2 I_3 C P_2 P_3 P_4 i_1 i_2 i_1 c m_2 m_3 m_4 M_1 M_2 M_3 下顎角 関節突起	
R トレ	[M_1 m_4]		Ⅲ－2
	[M_1 m_4 m_3 m_2	○]	〃
	[M_2 M_1 m_4 ( )( )	○]	Ⅳ－1
	[M_1 m_4 ( )( )]	(P_2, P_3は未萌出) (P_4は萌出完了直後) [( ) m_2 ( )]	
	[○ M_3 M_2]		
	[M_2 M_1 P_4 P_3 P_2]		Ⅳ－3
	[M_3 M_2 M_1 P_4 P_3 P_2]		〃
	[○ M_3 M_2]		〃
		[( ) P_4 M_1 M_2 M_3 ○]	〃
		[○○]	
		[○○]	
	(M_2)	[○]	Ⅳ－1
	(M_2) (M_1)	[○]	Ⅳ－2
	(M_2)	[○]	〃
		[○ P_2 P_3 P_4 M_1 M_2 M_3 ○○○]	〃
		[○]	
	[○○]		

鹿角出土数表

分類 / トレンチ	A_1	A_2	A_3	A_4	B_1	B_3	B_3	C_1	C_2	D	E
	L R 分割	半截 4分割 小破片	半截	半截	半截 4分割	半截	半截	半截 4分割	半截 4分割	半截 4分割	
Nトレ	332	911	1		94	2	2	382	68	11	9
Rトレ	56	22	2	2	1031	7	5	248	2416	8	
Sトレ	48	5232	2	2	42	5	72	1610	1213	125	10

A類：角座～第1角叉部分（A_1－角座骨や頭骨を有するもの。A_2－落角。A_3－落角で第1枝を有するもの。）　A_4－落角で角幹部の長いもの。）

B類：第2・第3角叉部分（B_1－第1・第3角叉の部分だけが残るもの。B_2－第2・第3・角叉の両方が残るもｐの。B_3－叉1枝が残るもの。）

C類：角幹部分（C_1－長いもの。C_2－短いもの。）

D類：角尖部分

E類：分類不能の破片

イノシシ　上腕骨Ｌ１・Ｒ１、橈骨Ｌ１・Ｒ３、尺骨Ｌ１・Ｒ４、肩甲骨Ｒ２、大腿骨Ｌ４、脛骨Ｌ１・Ｒ２、寛骨Ｒ１、踵骨Ｌ１、距骨Ｒ１、上顎骨Ｒ２、下顎骨Ｌ７・Ｒ７である。人骨の出土がある。

イノシシ
上顎骨出土数表

	L	R	雌雄	段階
	M^3 M^2 M^1 P^4 P^3 P^2 P^1 C I^3 I^2 I^1 m^4 m^3 m^2 c i^3 i^2 i^1	I^1 I^2 I^3 C P^1 P^2 P^3 P^4 M^1 M^2 M^3 i^1 i^2 i^1 c m^2 m^3 m^4		
R トレ		[( )( ) P^2 P^2( )] [( )P^3 M^1 M^2]	♂	Ⅲ－3

イノシシ
下顎骨出土数表

	L	R	雌雄	段階
	関節突起 下顎角 M_3 M_2 M_1 P_4 P_3 P_2 P_1 C I_3 I_2 I_1 m_4 m_3 m_2 c i_3 i_2 i_1	I_1 I_2 I_3 C P_1 P_2 P_3 P_4 M_1 M_2 M_3 下顎角 関節突起 i_1 i_2 i_1 c m_2 m_3 m_4		
R トレ	[( )( )( )( )( ) ( ) [( )( )( )( ) [( )( )( )] [○ M_3( )] [M_3 M_2] (I_1) (i_2)	I_1 I_2 ( )( )] I_1( ) ( )] [( )( ) P_3 P_4 M_1] (M_3) [○○] (M_2) [( ) P_2 P_3]	♀ ♂ ♂	Ⅳ－2 〃 Ⅳ－3

② 鳥類　カイツブリ上腕骨Ｒ１、ウミウ上腕骨Ｌ１・Ｒ２、烏口骨Ｒ１、脛骨Ｌ２・Ｒ１、ヒメウ上腕骨Ｌ１、ウミスズミ上腕骨Ｌ１、カモ類上腕骨Ｌ４・Ｒ１８、橈骨Ｌ２・Ｒ２、尺骨Ｌ９・Ｒ２、烏口骨Ｌ２・Ｒ１、脛骨Ｌ１２・Ｒ８、ハクチョウ烏口骨Ｌ１である。

③ 魚類　スズキ歯骨Ｌ８・Ｒ１１、主蓋鰓骨Ｌ１９・Ｒ１４、マダイ歯骨Ｌ２・Ｒ２、上顎骨Ｌ６・Ｒ４、主蓋鰓骨Ｌ１、前額骨４、脊椎骨３、クロダイ上顎骨Ｒ１，マグロ脊椎骨３、サメ脊椎骨１である。

④ 両棲類　カメの脊椎骨がある。

[4] 出土遺物の考察

調査の整理で肝心な「記名」が、個々の遺物になされなかったことは残念である。したがって、層位について種々努力したが、明らかにしたのは第１混土層・第１貝層と１貝層か不明の遺物であった。

層位の明らかになった遺物、松島町史に記載した遺物で層位が明らかになった遺物、松島町史に記載したが最後まで層位の不明の遺物を検討した。

① 第２混土層と土層の遺物がないことである。

② 結局、第１混土層と第１貝層の遺物しか抽出できなかった。

第１混土層

遺物は繊維土器・大木９式・大木１０式・宮戸Ⅱ式・西の浜式併行・宮戸Ⅲａ式の各種の遺物が出土しているが、特に、張り瘤の土器宮戸Ⅲａ式が多いが、第１３図４４ー４５のシリット施文土器の時期宮戸Ⅲｂ

式の遺物が出土していることである。また、町史記載で層位明らかになった遺物、第１３図２２ー２８では宮戸Ⅲｂ式のシリット施文土器が多い。

第１貝層　大木９式・大木１０式・宮戸Ⅱ式・西の浜式併行・宮戸Ⅲａ式の各種の遺物を出土している。第１混土層との違いは宮戸Ⅲｂ式の遺物の出土がないことである。各種の土器が出土しているが、主体的には宮戸Ⅲａ式である。

第１貝層か不明　大木１０式・宮戸Ｉｂ式併行・宮戸Ⅱ式・西の浜式併行・宮戸Ⅲａ式の各種の遺物を出土している。不明と考えたが、第１貝層と同じ主体は宮戸Ⅲａ式であり、第１貝層と見ることが出来る。

③　第１混土層・第１貝層は壁面図を見る限り、それぞれ堆積は厚く５０㎝の数層の堆積があり、幅の広い遺物の処理で残念ながら、それ以上の追求が出来なかった。

④　１９６８(昭和43)斎藤良治「陸前地方縄文文化後期後半の土器編年について－宮戸島貝塚及び西の浜貝塚出土の土器を中心として」の論考で、第１混土層＝第３類土器、第１貝層＝第２類土器と層位と遺物でまとめられたことに始まる。後期後半の土器編年が明快にされた功績は大きなものである。しかし、記名ない遺物、細分されない遺物が残念である。

⑤　最後まで層位不明な遺物については、第3･4図､14~19図に松島町史から整理した。松島町史と変わりはないが、図１７、１～２７のシリット施文の宮戸Ⅲｂ式は第１混土層と見てさしつかえない。また、図１６、１２・１４と図１７、２３～２７の過渡的な遺物篦刻目施文の土器群をどう見るのかが問題となろう。それに、図１７、２８は宮戸Ⅲｂ式より新しい要素を持った遺物であり、第１混土層の上層の出土層と考えるがこれも不可能である。

⑥　土製品については、本貝塚出土唯一の遺物土版がある。上部が欠損して全体をが不明であるが、上部がせまく、下部の広い隅丸の長方形と推定される。土版は護符的な意味を持ったものとして考えられてる。土版は４個に割れて、それぞれ１～２ｍの間の第１層中より発見されされた。以上の出土状態から、なんらかの呪術的な意味を持ったものとみられる。

その他に土器片製円盤がある。用途が各種あって特定出来ない遺物である。

（2）骨角製品につては、刺突具の銛等の漁撈具が多い。スズキ・タイ類中心の漁撈活動がなされていた。特記すべきは、「角偶」の出土である。土偶と同じ用具と考えられるが、これも各種の意見のあることである。漆を塗り込め朱漆が施されたものであり、呪術に使用されたか、護符的であったかもしれない。調査後の保存が悪く、調査時の様相はない。朱漆ははげて僅かに、眉、目、鼻の位置が判断される状態である。西の浜貝塚には朱塗り骨角製品が多い。

（3） 自然遺物につては、自然遺物を中心の調査でなく、遺物も大きなものを採集したものであった。(注記)

[5] 終わりに

① 遺物整理の結果は、第１混土層と第１貝層の遺物が明らかにされたのみである。第２混土層・土層の遺物は無く明らかに出来なかった。第１混・第１貝は各種の遺物があり、主体となる遺物は張瘤施文の土器、シリット施文の宮戸Ⅲａ式から宮戸Ⅲｂ式である。特に、第１混にシリット施文が多いので、張瘤施文よりシリット施文が新しいことが理解された。残念なことに第１混は張瘤施文とシリット施文が混在しており、おそらく、Ｒ２の中ごろと判断されるが、壁面図を見ると数層があり、層位的に明確できなった。また、シリット施文の土器群も、上層と考えられるが不明であった。

結局、斎藤良治「陸前地方縄文文化後期後半の土器編年について」の第１混土層＝第３類土器、第１貝層＝第２類土器・第１類土器から一歩も出なかった。整理の段階で記名がなかったことと、調査も大きく層位をとらえて、遺物を採集したものと考えられる。したがって、層位による細分は不可能である。松島町史資料編１のＲトレンチの記載の通りである。

② 骨角製品は松島町史の１６６～１６８に記載の通りであるが、刺突具の銛中心であり、エイの尾刺を利用したものも存在し、スズキ・タイ類の刺突漁法が盛んであった。

土製品の土版・土偶と同じく、角偶も護符的なものである。全面厚く朱漆を塗ったもので、両耳から穴が開けられている。やはり、土偶のような機能を持ったものと考えられる。トレンチが不明だが、朱塗りの装身具らしい遺物も出土している。

参考文献

1939　松本彦七郎「松島町なる尚ほ若干の考古遺跡―1・2・3」 仙台郷土研究9-8・9・10

1959　加藤　孝「宮城県宮城郡鹽崎古代製塩遺跡」 考古学年報12

1960　加藤　孝「宮城県宮城郡西ノ浜遺跡」　考古学年報13

1968　斎藤良治「陸前地方縄文文化後期後半の土器編年について―宮戸台囲貝塚及び西ノ浜貝塚の土器を中心として」　仙台湾周辺の考古学的研究

(注記)　貝類の種類

アズマニシキ・アサリ・カリガネガイ・イタボガキ・マテガイ・オオノガイ・サルボウ・マガキ・シオフキ・ウバガイ・アマオフネ・アカニシ・レイシ・ウミニナ・サザエ・オオヒビガイ　計16種

この報告書作成は遺物整理者である後藤勝彦。山田ケイ、兼平宏子氏の図版作成に献身的尽力があった。

昭和３５年西の浜貝塚Ｓトレンチの調査

[I] まえがき

調査は昭和３５年(1960) ７月２９日から８月３日に、昭和３４年(1959)に第１次調査に次いで、第２次調査として実施された。宮戸島貝塚調査の後期土器の編年研究を目的にしたものである。貝塚の南北丘陵の東斜面、第１次調査のＮトレンチ上段の平坦部畑地に、南北２×８ｍ区の調査区を設定し、北からＩ～Ⅳ区とし、更に、Ⅳ区から東に２×２ｍのＶ区を増設して、調査を実施した。また、Ｉ区の北側に１×２ｍのＳＹ区のサブピットを設けた。

調査の成果については、『松島町史　資料編Ｉ』(後藤勝彦 1989)に記載してある。残念なことに、第１次調査のＲトレンチの土器資料に記名が無く、壁面図に層位の記名が無く、層位的に検討が出来なかったため、Ｒ区に合わせて、１１類に羅列的に土器分類したものであった。

今回、Ｓトレンチ単独の報告であり、層位的に検討を加えたいと考えた。調査状態は丘陵南北に調査区を設定したための調査混乱があった。西壁の貝層(下部層)が途中で消滅して、東壁に新しい貝層(上部層)の出現を読み取れない状態がある。松島町史編纂中でも困惑した。昭和４１年(1966)調査と同じ混乱があったのである。また、Ｓトレンチ出土の「瘤状小突起が器面上に施文される第４類土器前身を思わせ、また、口縁の突起に特徴がある。全般的に第３類土器群の影響が非常に強いもので、次期の第５類土器への過渡的形式として考えられる」として、第４類土器を「西の浜式」として、宮戸Ⅱ式から宮戸Ⅲ式の間に設定したが(後藤勝彦 1962)、 大部分の資料はＳトレンチ出土の資料である。

「Ⅱ」 貝層の堆積について　(図１)

堆積層は、北から南に緩やかに傾斜し、東にも傾斜し堆積している。堆積は複雑である。区毎に堆積関係を見てみよう。

ＳＩ

西壁から見ると、表土下に２０cmほどの貝層(上部層)があるが、上下に区分されるが、遺物では区分出来ない。上部の貝層の下層は、褐色混土貝層となり、下層は黒色土層となる。北壁は表土の下に２層に分かれた貝層(上部)が、ほぼ１ｍ傾斜して消滅し、西下部に２層に分かれた貝層(下部層)があり、褐色混土貝層、黒土層と複雑な堆積となる。東壁では、表土下に１０cm前後の黒色混土貝層があって、その下部に約５０cmほどの厚い混貝土層、下に２０cmの下部貝層があって、褐色混土貝層となり、黒土層となる。南寄りで、黒色混土貝層が切れ、上部貝層が出現する。南に堆積する貝層は、約６０cmほどの厚い貝層となって南に伸びるが、灰層等をはさんで区分されるようであるが明らかでない。下部貝層も途中で消滅するが、その先が明らかでない。

ＳⅡ

西壁は貝層(上部)は無く、表土下に褐色混土貝層となり、黒土層となる。東壁は表土の下に、厚い貝層であるが、灰層等を挟んで区分されそうであるが、ＳⅢの南端、ＳＶの接点で貝層が２分されそうであり、ＳⅡ～ＳⅢの厚い貝層は２分されると考えられる。下層は混貝土層、続いて、黒土層となる。

ＳⅢ

この地区は西壁・東壁共に、ＳⅡ区の状態と同様である。

ＳⅣ～ＳＶ

南壁から見ると、表土下に約４０cmの褐色混土貝層があって、Ｖ区から東に傾斜して、約１５cm～５０cmの黒色混土貝層、続いて、約２０cmの貝層(下層)があって、約１０cmの混貝土層となり、黒土層となる。Ｖ区の北壁は、表土下に褐色混土貝層があって、下に約２５cmの黒色混土貝層がある。下部は１０cm程の間層を持つ、５０cmもの厚い貝層となっている。下部に１０cm程の混貝土層となって、黒土層に移る。東壁は、表土下に分厚い褐色混土貝層があって、下に、途切れた貝層(上層)が堆積し、黒色混土貝層があって、下に貝層(下層)となる。しかも、中央から南北で様相が違う。特に、北側では間層を持つ貝層となり複雑である。

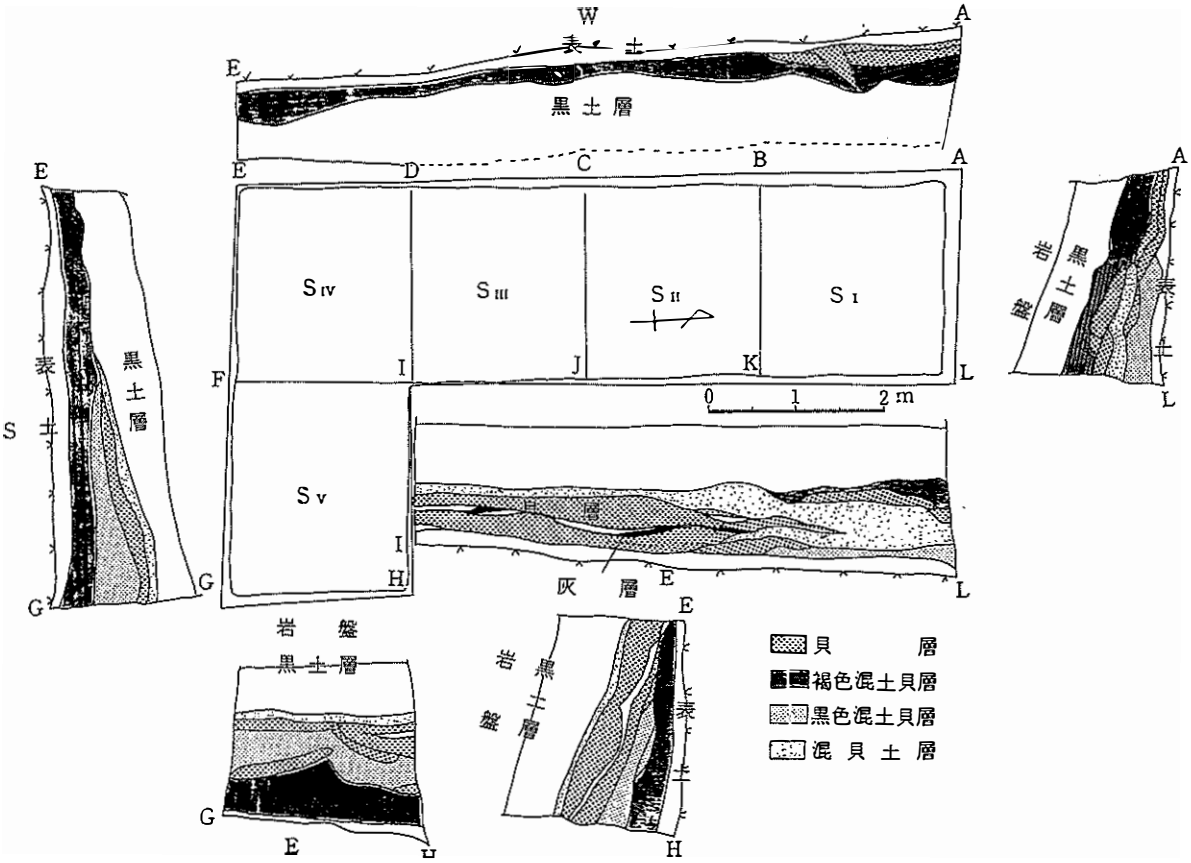


図1　Ｓトレンチ壁面図

[Ⅲ]　出土遺物

（1）　縄文土器　（図２～１５）

各区毎に説明することにする。出土土器は各地区で、下層出土の前期初頭の繊維土器群、中期大木１０式、主体は後期中葉から後葉の宮戸Ⅱａ・Ⅱｂ、西の浜式、宮戸Ⅲａ・Ⅲｂ式である。ＳⅢ区から南に傾斜したＳⅣ～Ｖ区に、晩期大洞Ｃ１、製塩土器が特徴的に出土する。

ＳＩ

記名された土器群では、東壁の厚い混貝土層が堆積している関係か、混貝土層の出土が多い。また、土器に記名されているが、地点の不明な層もある。

①　混貝層　第１類　晩期大洞ＢＣ、Ｂと注口部資料(大洞Cか)の４点がある。この資料は混貝層でも、黒色混土貝層に近い２本の貝層で挟まれた層周辺か、複雑な堆積を示している。調査中に１混として遺物を収納したと考えられ、この資料は混貝でも上層出土である。(図2-1~4)

② 混貝層　第２類　紐状の刺突列点（刻目）による入り組み文施文、平縁、波状の深鉢形、頚部で締まる深鉢形もある。宮戸Ⅲｂ式に併行するものである。(図2-6~12)また、図12-13・17は篦刻目施文のものである。

③ 混貝層　第３類　入り組み文を配し、入り組み部、入り組み内に瘤状の小突起を配した土器群である。器形は深鉢形で、口縁に小突起を持つものがある。宮戸Ⅲａ式に相当する。(図2-17・21~27)

④ 混貝層　第４類　大きな特徴は、口縁に大突起、その間に２分した中突起と小突起を配し、大突起は親指状に肥厚し、裏面が２分し、大突起下にやや大きい瘤状突起を配す。下部に弧状文が施文される。口縁外反し、頚部で締まる深鉢形である。体部文様は弧状文であり、磨消手法によって文様が展開する。縄文帯が襷状に組むもの、入り組的に施文され、また、縄文原体の回転方向の違えた羽状の施文が見られる。宮戸Ⅱ式から宮戸Ⅲ式への橋渡しの「西の浜式」に相当する。混貝層としては出土量が多い。(図2-29~45)

⑤ 混貝層　第５類　口縁大波状で口端に連続刻目の施文し、下部無文である。頚部で締まる器形となる。宮戸Ⅱｂ式に併行する。(図3-1)

⑥ 混貝層　第６類　口縁波状、平縁で口縁部分が丁寧な整形の無文帯である。無文下に、太いヨコ沈線が５本程度巡らされて、その間にＳ字状の施文で連結される。地文として羽状縄文が底部近くまで、施文されるものである。深鉢形と口縁外反し、頚部で締まる深鉢形がある。宮戸Ⅱａ式にあたる。(図3-2~7)

⑦ 混貝層　第７類　口縁に小突起を配し、口縁部に刺突列点文が配され、下部に隆起帯を巡らし、縄文が施文されるもので、土層に近い層出土である。中期大木１０式土器である。(図3-8)

⑧ 混貝層　第８類　羽状縄文施文の土器群である。後期の羽状縄文である。(図3-9~10

⑨ 混貝層　第９類　斜行縄文施文の土器群である。(図3-11~12)　・13~15)

⑩ 混貝層　第１０類　無文土器群である。(図3-16~22)

底部は無文が多く、高台付きも存在する。

① 混土貝層　第３類　混貝層③で説明したが、瘤状小突起を配した一群である。宮戸Ⅲａ式である。量は多くない。(図4-1~6)

② 混土貝層　第４類　混貝層④で説明した、西の浜式に相当する一群である。この時期の遺物は多い。(図4-8~13)　↓(図4-14~21・図5-1)

③ 混土貝層　第６類　混貝層⑥で説明した、宮戸Ⅱａ式に相当する一群である。

④ 混土貝層　第７類　混貝層⑦で説明した、中期大木１０式である。量は多くない。ＳⅠ区は第３類と第４類の土器群が主体になる土器と考えられる。　↑(図4-25・図5-2)

貝層出土の土器は僅か１点のみである。混貝層と混土貝層が主体となる。トレンチの西側は堆積層の堆積も浅く遺物の出土が少なかったと考えられる。

ＳⅡ

ＳⅡも土器記名数は多いが、どこなのか不明が多い。

① 貝層上　第１１類　僅か１点であるが混貝貝層上より出土している。薄手で器表面は荒れている。輪積痕が微かに認められる。製塩土器である。出土中心はⅣ・Ⅴ区である。(図6-1)　↓(図6-2~3)

② 貝層上　第２類　紐状の刺突列点文（刻目）の入り組文施文、口端に瘤状小突起。

③　貝層上　第１０類　器表面ヨコ整形の無文土器、平縁の深鉢形か。(図6-8)
貝層上では口縁に突起を配した、西の浜式に近い資料もある。底部は無文がある。

①　貝層中　第３類　瘤状小突起を配した土器群。(図6-2~9)
②　貝層中　第５類　頚部下に隆帯刻目状の刺突列点文、胴部に磨り消しによる文様構成。(図6-10)　↓(図6-11)
③　貝層中　第６類　平縁、口縁にヨコ沈線施文のもの、宮戸Ⅱａ式に相当する。
貝層中は瘤状小突起施文の土器群が中心である。口縁部無文帯で下に、刷毛目文のもの、第９類の斜行縄文、第１０類の無文土器、底部は平底、無文、高台付きも存在する。

①　貝層下　第３類　平縁で瘤状小突起施文の土器群。
貝層下に第８類の羽状縄文、第９類の斜行縄文、第１０類の無文土器がある。刷毛目文土器も見られる。貝層下は出土量は多くない。

①　混土層　第３類　瘤状小突起施文の土器群。(図6-1~7)
②　混土層　第４類　口縁に突起、しかも裏面２分され、突起下に小突起を配す。胴部文様は弧状の文様展開する。器形は口縁外反し、頚部で締まり胴部で張り出す器形と推測される。西の浜式に相当する。　(図6-8~17･図7-18~19)
③　混土層　第６類　平行線にＳ字状に連結する文様。(図7-20~23)
混土層は遺物の出土がやや多い。特に、１混の記名がある遺物が多い。しかし、どこを指すのか不明である。宮戸Ⅲ式が多く出土している。ＳＩでも１混の記名があり、東壁の黒色混土貝層下部に２本貝層で挟まれた層、ＳⅡでは灰層を挟んで層が区分される上層がそれに当たるのかも知れない。口縁無文で下に刷毛目状の土器、底部は平底で網代文がある。また、ＳⅡ出土が明らかであるが、層位の不明の土器群がある。口縁に裏面２分した中・小突起を配し、頚部上に刷毛目状の弧状文施文した資料が存在する。西の浜式である。土器片を利用した円盤状土器片がある。

①　土層　第７類　口縁無文、隆帯を巡らし、刺突列点文が施文され、下部に縦位縄文撚糸施文のもの、平縁の深鉢形である。(図7-1~3)

ＳⅡは貝層、混土層が出土遺物が多い。宮戸Ⅱから西の浜式、宮戸Ⅲ式が中心であり。土層は中期大木１０式と前期初頭の繊維土器である。混貝層は遺物の出土が少ない。図版に提示していないが、混貝層の上部に製塩土器片が２点あり。

ＳⅢ

①　貝層中　第３類　瘤状小突起を配する一群。(図8-1~8)
②　貝層中　第４類　口縁に突起、裏面２分、突起は親指状で、突起下に瘤状小突起を配すもの、西の浜式に近い土器も存在する。(図8-9~11)
③　貝層中　第９類　平縁の深鉢形。斜行縄文施文であるが、斜行縄文上を箆状工具かで、縦位に∩状の磨り消しがなされたものであり、非常に特殊な施文である。(図8-22~23)　貝層中には、刷毛目文施文の土器群が多い。やや新しい資料と考えられる、口縁無文、沈線を巡らし、下部に斜行縄文施文で平縁の深鉢形がある。底部は平底で無文、葉文がある。高台付きもある。

① 貝層下　第３類　瘤状小突起施文の土器群。(図8-1~2)
② 貝層下　第６類　上部無文で下にヨコ沈線施文のもの。
貝層下も宮戸Ⅱａ式からⅢａ・ｂ式、西の浜式、刷毛目文が多い。

① 混貝層　第３類　瘤状小突起施文の土器群。
② 混貝層　第４類　弧状文施文する一群。多量の出土がある。(図8-5･図9-3~14)↓(図9-
③ 混貝層　第６類　平行沈線にＳ字状文で連結するもの。平縁の鉢形である。　15~17)
④ 混貝層　第７類　波状口縁で無文、口縁下に隆帯巡らし、刺突列点文を配したもの混貝層には宮戸Ⅰｂ式よりやや新しい資料(図9-23)底部も平底無文が多い。出土遺物もかなり多く、特に、西の浜式が多い。土器記名に［混］と記名が多く、混土層か混貝層で整理が揺れ動いた。発掘時の記名は正確で有るべきである。刷毛目文、繊維土器の出土がある。
① 混土層　第４類　弧状文施文の一群。(図9-1~4)
底部は平底、網代文がある。また、上層部の褐色混土貝層に製塩土器が１点出土している。

① 土層　第４類　口縁に突起、弧状文施文の土器。(図10-1)
② 土層　第６類　平縁で口縁に羽状縄文帯、沈線巡らせて、下無文の土器群。(図10-2)
③ 土層　第１２類　結束羽状縄文、斜行縄文、綾繰文、結節文の施文された、前期初頭の繊維土器群。(図10-4~14)

ＳⅢ区になって、最下層の土層で繊維土器が多く出土する。昭和４１年(1966)の西の浜貝塚調査の第３貝層中心出土の土器群である。

ＳⅣ～ＳＶ　東西のトレンチであり、層位確認が容易であるが、ＳＩ～ＳⅢ区とは様子が異なる。ＳⅣ区から説明する。

① 混土貝層　第１類　浅鉢形、雲形文施文の土器群、平縁で羽状縄文施文の深鉢形の土器群で、晩期大洞Ｃ式である。(図11-12~22)
② 混土貝層　第１１類 器表面の荒れ、剥離、輪積痕のある土器群で製塩土器。(図11-1~11)
③ 混土貝層　第２類　紐状の刺突文と入り組文の土器群、宮戸Ⅲｂ式併行である。(図12-1)
④ 混土貝層　第３類　瘤状小突起施文の土器群。(図12-2~11)
⑤ 混土貝層　第４類　口縁に裏面２分した小突起を配し、器面には刷毛目状によって文様が施文される土器。西の浜式に併行する。(図12-12~14)
⑥ 混土貝層　第６類　口縁部無文で巴状の隆帯の突起をもつもの、平行沈線にＳ字状に連結した施文の土器、僅かに出土している。(図12-3~5)
⑦ 混土貝層　第７類　頚部に刺突された隆帯を巡らすもの、中期大木１０式併行。(図12-2)
褐色混土貝層下の黒色混土貝層は僅か存在するだけである。土器記名はＳⅡ区と同じように多数の層名が記載されているが、ＳⅣ区トレンチ北側の壁面図がないため、その実態は不明である。褐色混土貝層と黒色混土貝層には第２類以下第７類の土器群と羽状縄文、斜行縄文、繊維土器が出土しているが、晩期大洞Ｃ式土器片９点、製塩土器片７点が出土している。他の地区との状態と大きな変化がある。これは、ＳＶ区も同じ状態である。

①　貝層　第１類　晩期大洞Ｃ式の土器群。
②　貝層　第１１類　製塩土器３点。
③　貝層　第３類　宮戸Ⅲａ式、瘤状小突起施文土器群。
④　貝層　第６類　宮戸Ⅱａ式、
貝層下に製塩土器片が１点出土している。ＳⅣ区の貝層は貝層上・貝層中・貝層下に区分されているが、遺物量も少ないので、ＳＶ区の北壁に間層のある貝層が西に伸びるので、これらに関係した部分でないかと考えるが不明である。

①　混貝土層　第２類　宮戸Ⅲｂ式併行の土器群。
②　混貝土層　第３類　宮戸Ⅲａ式併行の土器群。
③　混貝土層　第４類　西の浜式併行の土器群。
④　混貝土層　第６類　宮戸Ⅱａ式併行の土器。

①　土層　第１２類　前期初頭の繊維土器群が主として出土する。(図12-1~9･5~13)
②　土層　第７類　中期大木１０式併行の土器　(図12-4)
③　土層　第６類　宮戸Ⅱａ式併行の土器。
④　土層　第４類　西の浜式併行の土器。
土層から製塩土器片２点出土、おそらく、南壁の状態が褐色混土貝層だけで下に堆積層が無いので、混土貝層の遺物が黒土層上部に混入したものと考えられる。

ＳＶ区は堆積層が多く、しかも、トレンチ南、北側で堆積が異なる。東壁では貝層が上下２層の堆積となり、北側の下部貝層は間層を持つが、真ん中で途切れる。南壁の貝層は、下部貝層である。北壁は間層を持った下部貝層が横たわる。上部貝層は東壁に途切れて一部見られるだけである。
①　混土貝層　第１類　晩期大洞Ｃ式併行の土器群。(図13-26~30)
②　混土貝層　第１１類　製塩土器群。(図13-1~25)
③　混土貝層　第２類　宮戸Ⅲｂ式併行の土器群。(図14-1~3)
④　混土貝層　第３類　宮戸Ⅲａ式併行の土器群。(図14-4~18)
⑤　混土貝層　第４類　西の浜式併行の土器。(図14-19~36)
⑥　混土貝層　第７類　中期大木１０式併行の土器群。
この他に、羽状縄文（晩）、斜行縄文、刷毛目文、無文土器の出土がある。

①　１貝層　第１類　晩期大洞Ｃ式併行の土器群。
②　１貝層　第１１類　製塩土器群。
③　１貝層　第２類　宮戸Ⅲｂ式併行の土器群。
④　１貝層　第３類　宮戸Ⅲａ式併行の土器群。
この他に羽状縄文（後・晩）、斜行縄文、中期大木１０式１点の出土がある
①　貝層上　第１類　晩期大洞Ｃ式併行の土器群。
②　貝層上　第１１類　製塩土器群。
③　貝層上　第２類　宮戸Ⅲｂ式併行の土器群。
④　貝層上　第３類　宮戸Ⅲａ式併行の土器群。
⑤　貝層上　第４類　西の浜式併行の土器群。
⑥　貝層上　第６類　宮戸Ⅱａ式併行の土器群。

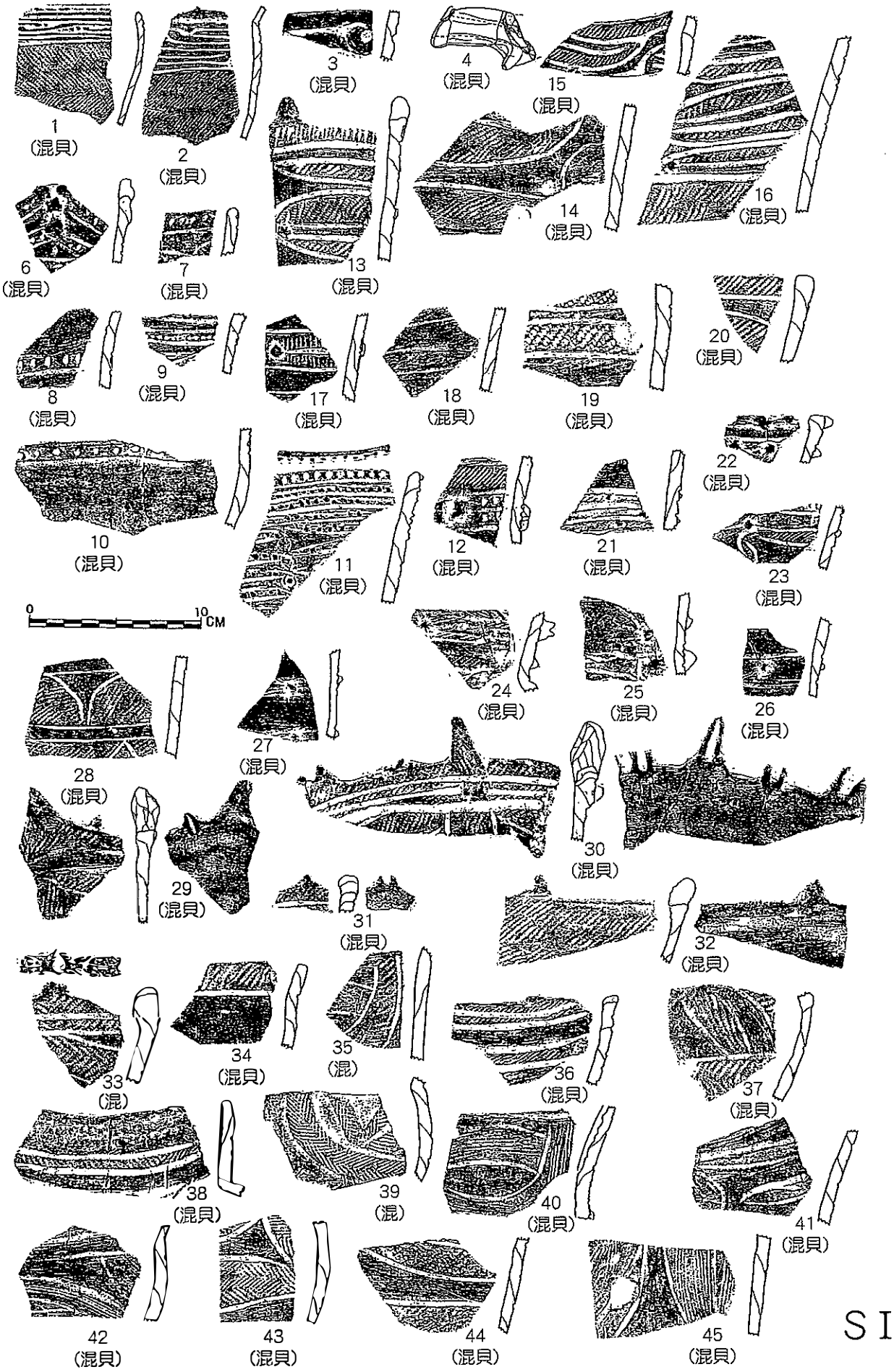
⑦　貝層上　第７類　中期大木１０式併行の土器群。
この他に、羽状縄文（後・晩）、斜行縄文、刷毛目文、無文土器の出土がある。
①　貝層　第１類　晩期大洞Ｃ式併行の土器群。
②　貝層　第１１類　製塩土器群。
③　貝層　第２類　宮戸Ⅲｂ式併行の土器群。
④　貝層　第３類　宮戸Ⅲａ式併行の土器群。
⑤　貝層　第４類　西の浜式併行の土器群。
⑥　貝層　第６類　宮戸Ⅱａ式併行の土器群。
⑦　貝層　第７類　中期大木１０式併行の土器群。
この他に、羽状縄文（後・晩）、斜行縄文、刷毛目文、無文土器の出土がある。

①　貝層下　第３類　宮戸Ⅲａ式併行の土器群。
②　貝層下　第４類　西の浜式併行の土器。
この他に、羽状縄文（後）、斜行縄文の出土あり。

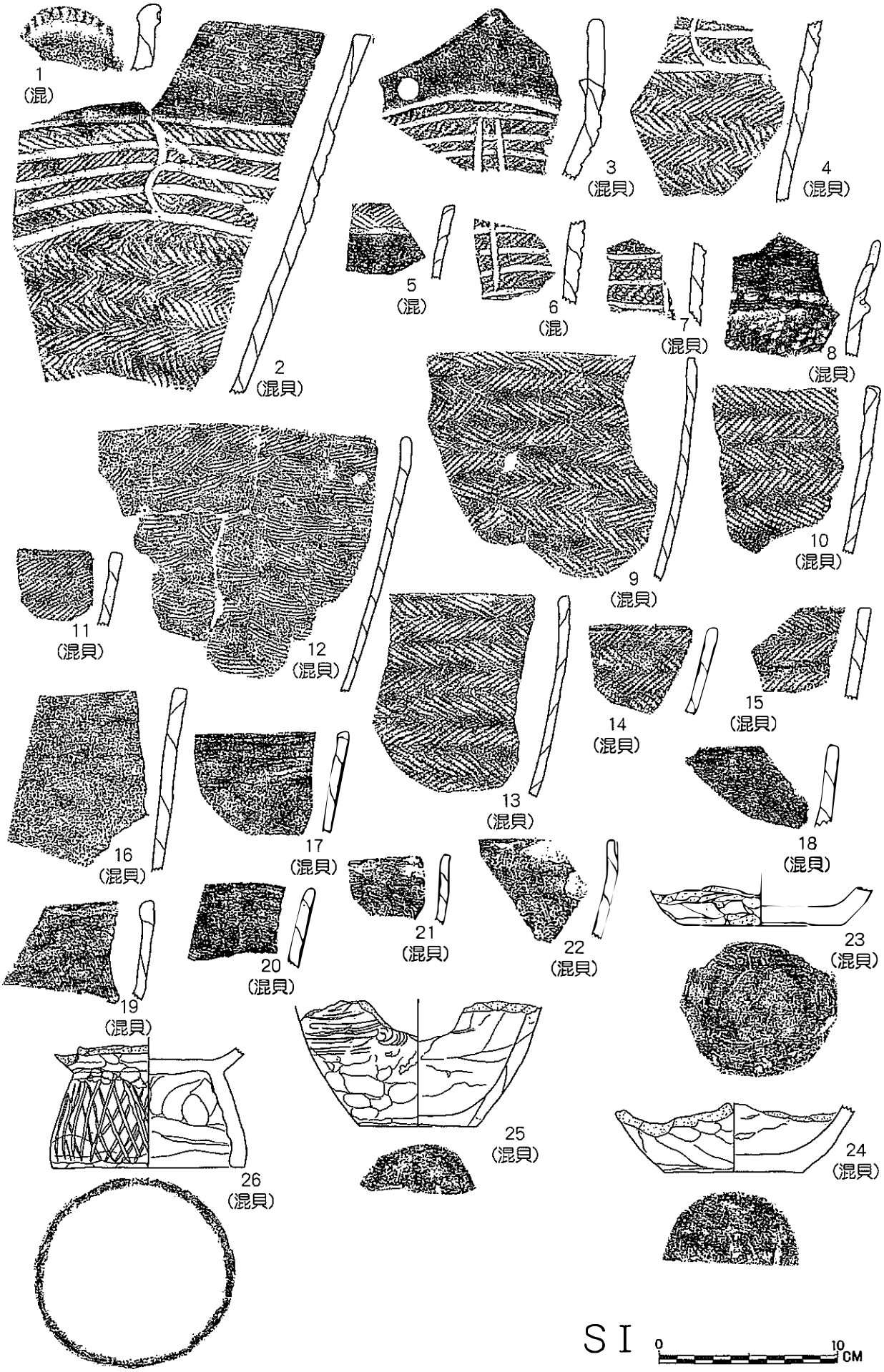
①　混貝土層　第２類　宮戸Ⅲｂ式併行の土器群。（図15-41~42）
②　混貝土層　第３類　宮戸Ⅲａ式併行の土器群。
③　混貝土層　第４類　西の浜式併行の土器。
④　混貝土層　第６類　宮戸Ⅱａ式併行の土器群
⑤　混貝土層　第７類　中期大木１０式併行の土器群。
この他に、羽状縄文（後）、斜行縄文の土器が出土している。また、上層からの混入と考えられる製塩土器片２点がある。

①　土層　第７類　中期大木１０式併行の土器。（図15-1~2）
②　土層　第１２類　前期初頭の繊維土器群。裏面無文の斜行縄文、羽状縄文、綾繰文等が施文。（図15-3~9）

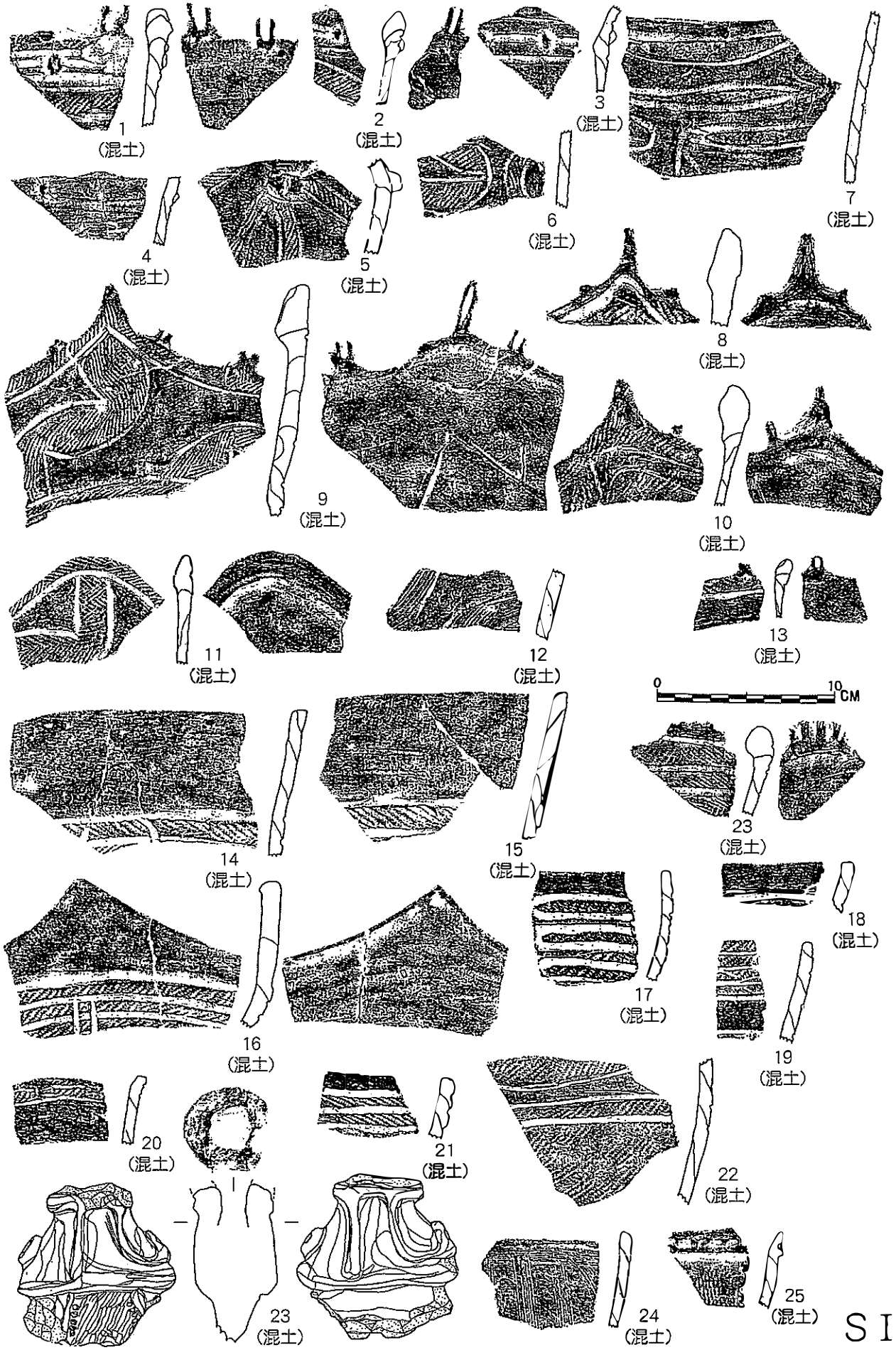
ＳⅣからＳⅤ区の状態は、ＳⅠからＳⅢ区の状態と大きな相違がある。表土から褐色混土層、黒色混土層、貝層まで、晩期大洞Ｃ式土器群、特に、製塩土器群の出土が多量であり、少なくても、ＳⅣからＳⅤ区は地形が、南に傾斜し、しかも東にも傾斜している。Ⅳ区よりも、Ⅴ区の混土貝層、１貝層、貝層上、貝層に晩期大洞Ｃ式土器、製塩土器の混入が多い。


1 (混貝)
2 (混貝)
3 (混貝)
4 (混貝)
15 (混貝)
13 (混貝)
14 (混貝)
16 (混貝)
6 (混貝)
7 (混貝)
8 (混貝)
9 (混貝)
17 (混貝)
18 (混貝)
19 (混貝)
20 (混貝)
10 (混貝)
11 (混貝)
12 (混貝)
21 (混貝)
22 (混貝)
23 (混貝)
0 10 CM
24 (混貝)
25 (混貝)
26 (混貝)
27 (混貝)
28 (混貝)
29 (混貝)
30 (混貝)
31 (混貝)
32 (混貝)
33 (混)
34 (混貝)
35 (混)
36 (混貝)
37 (混貝)
38 (混貝)
39 (混)
40 (混貝)
41 (混貝)
42 (混貝)
43 (混貝)
44 (混貝)
45 (混貝)
SI

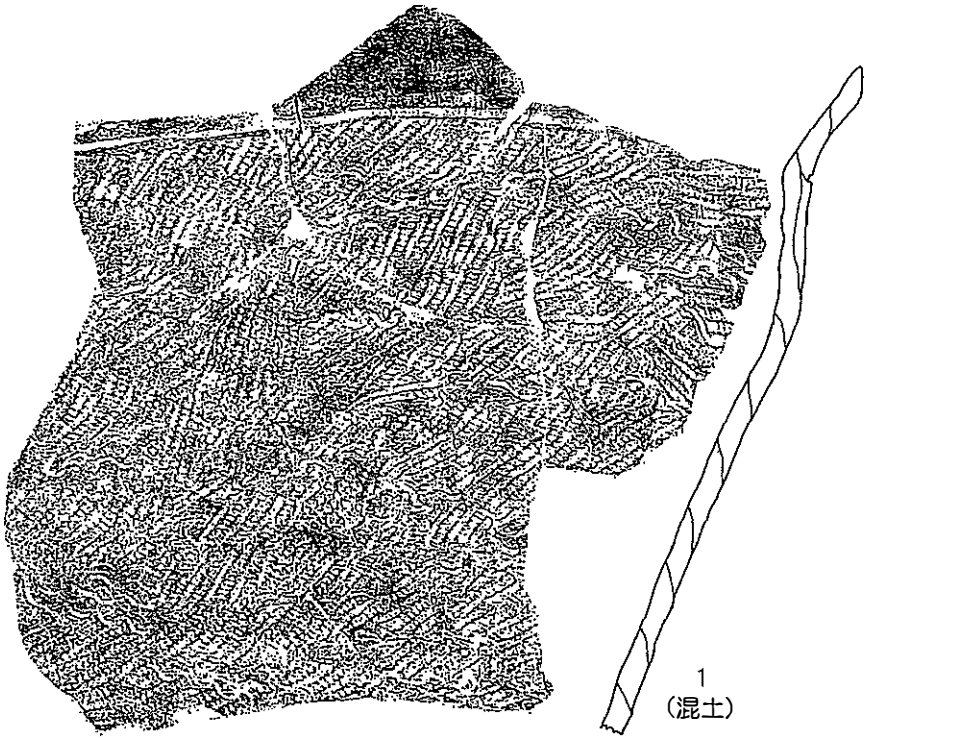
SI混貝　図2

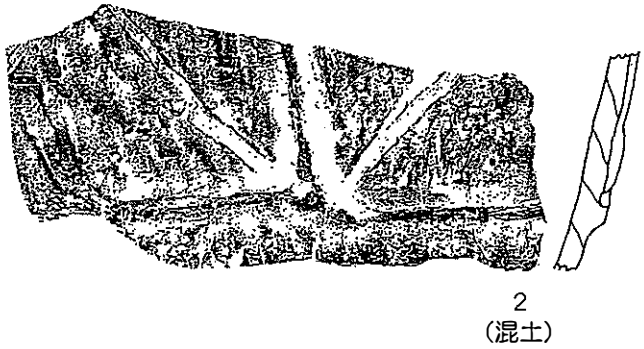

1
(混)
2
(混貝)
3
(混貝)
4
(混貝)
5
(混)
6
(混)
7
(混貝)
8
(混貝)
9
(混貝)
10
(混貝)
11
(混貝)
12
(混貝)
13
(混貝)
14
(混貝)
15
(混貝)
16
(混貝)
17
(混貝)
18
(混貝)
19
(混貝)
20
(混貝)
21
(混貝)
22
(混貝)
23
(混貝)
24
(混貝)
25
(混貝)
26
(混貝)
SI
0
10
CM

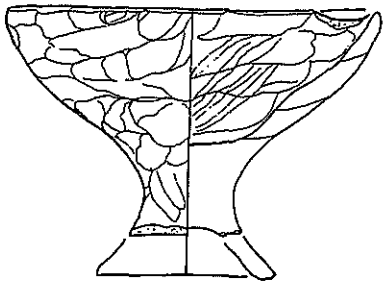
SI混貝　図3


1
(混土)
2
(混土)
3
(混土)
4
(混土)
5
(混土)
6
(混土)
7
(混土)
8
(混土)
9
(混土)
10
(混土)
11
(混土)
12
(混土)
13
(混土)
0
10
CM
14
(混土)
15
(混土)
23
(混土)
16
(混土)
17
(混土)
18
(混土)
19
(混土)
20
(混土)
21
(混土)
22
(混土)
23
(混土)
24
(混土)
25
(混土)
SI

SI混土　図4



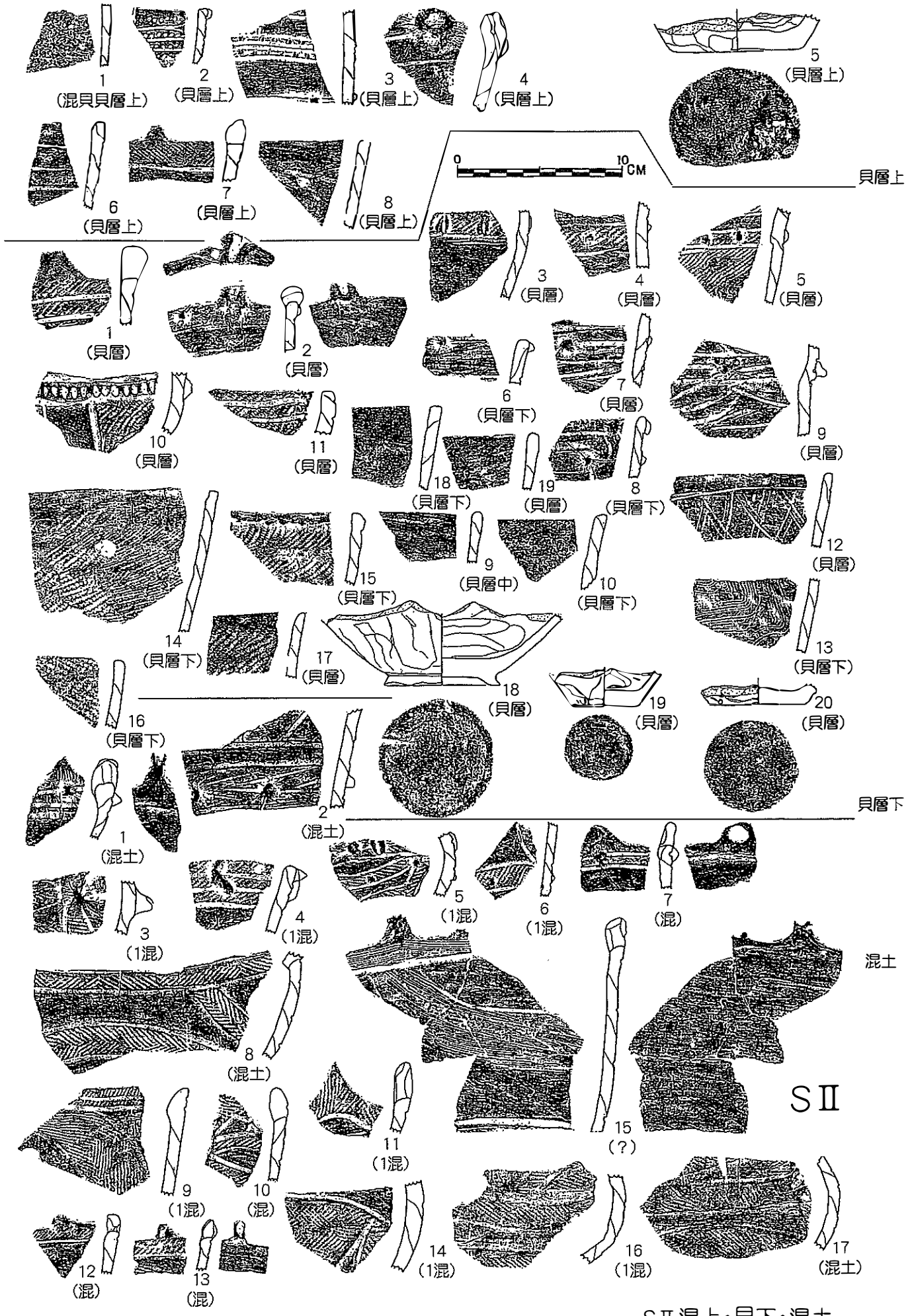




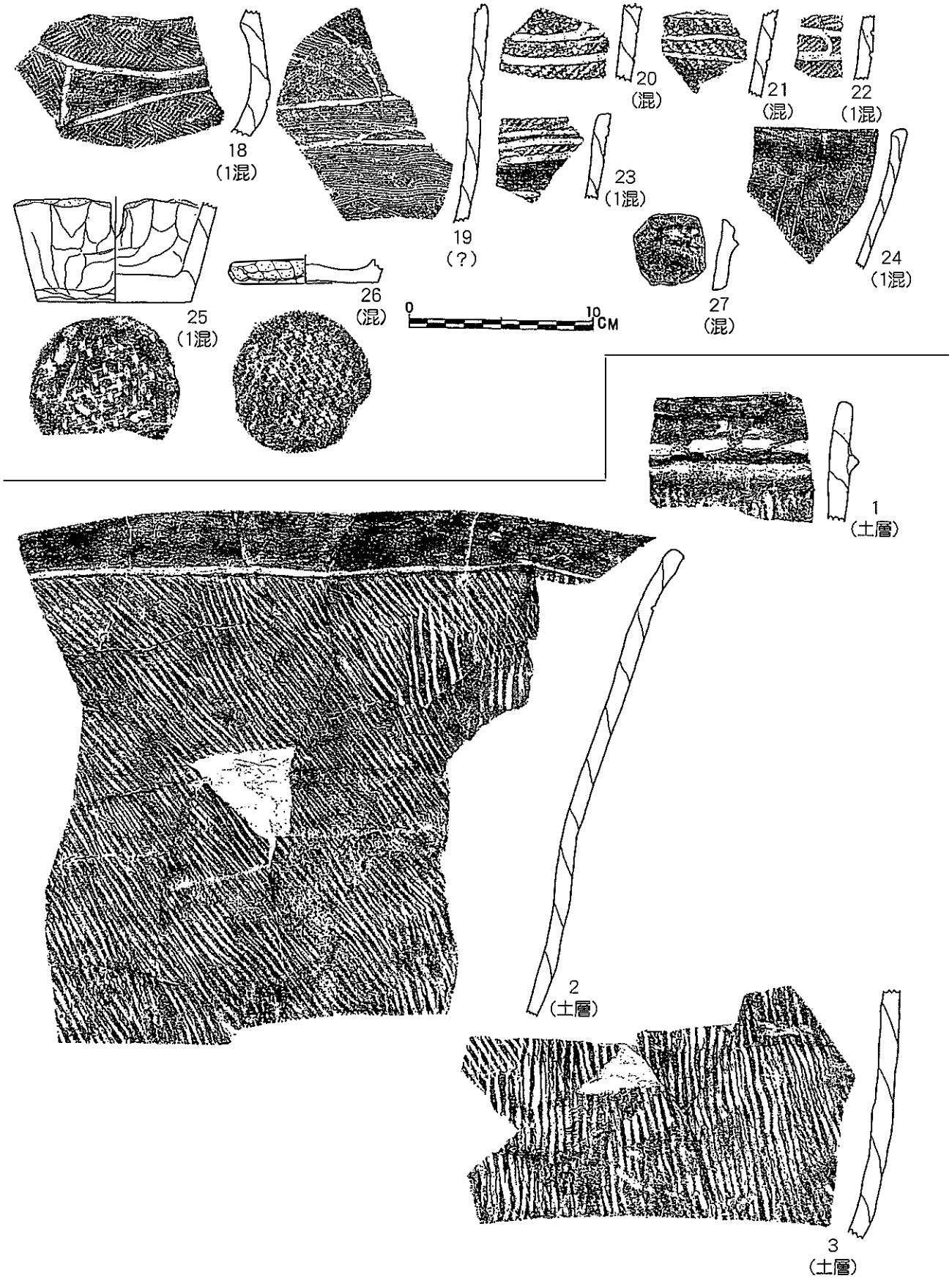
SI

0 10 CM

SI混土　図5

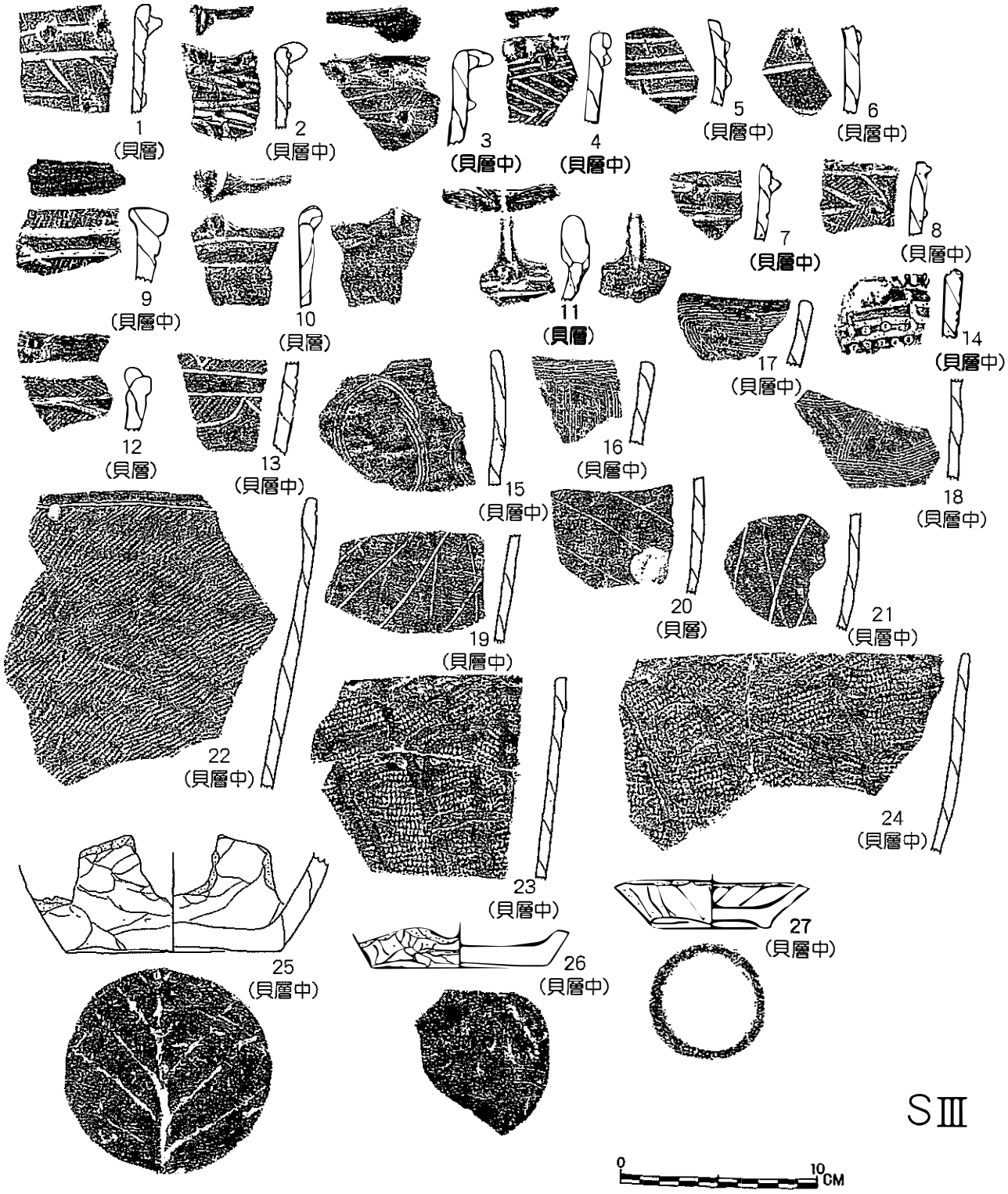


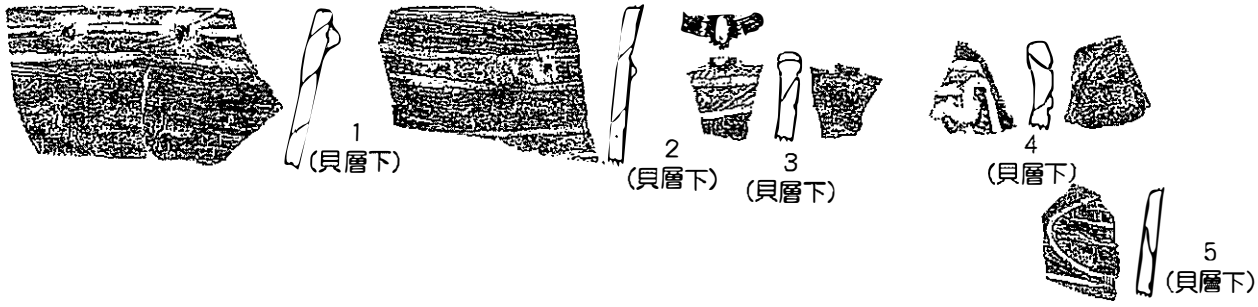
SⅡ混上・貝下・混土
貝中　図6



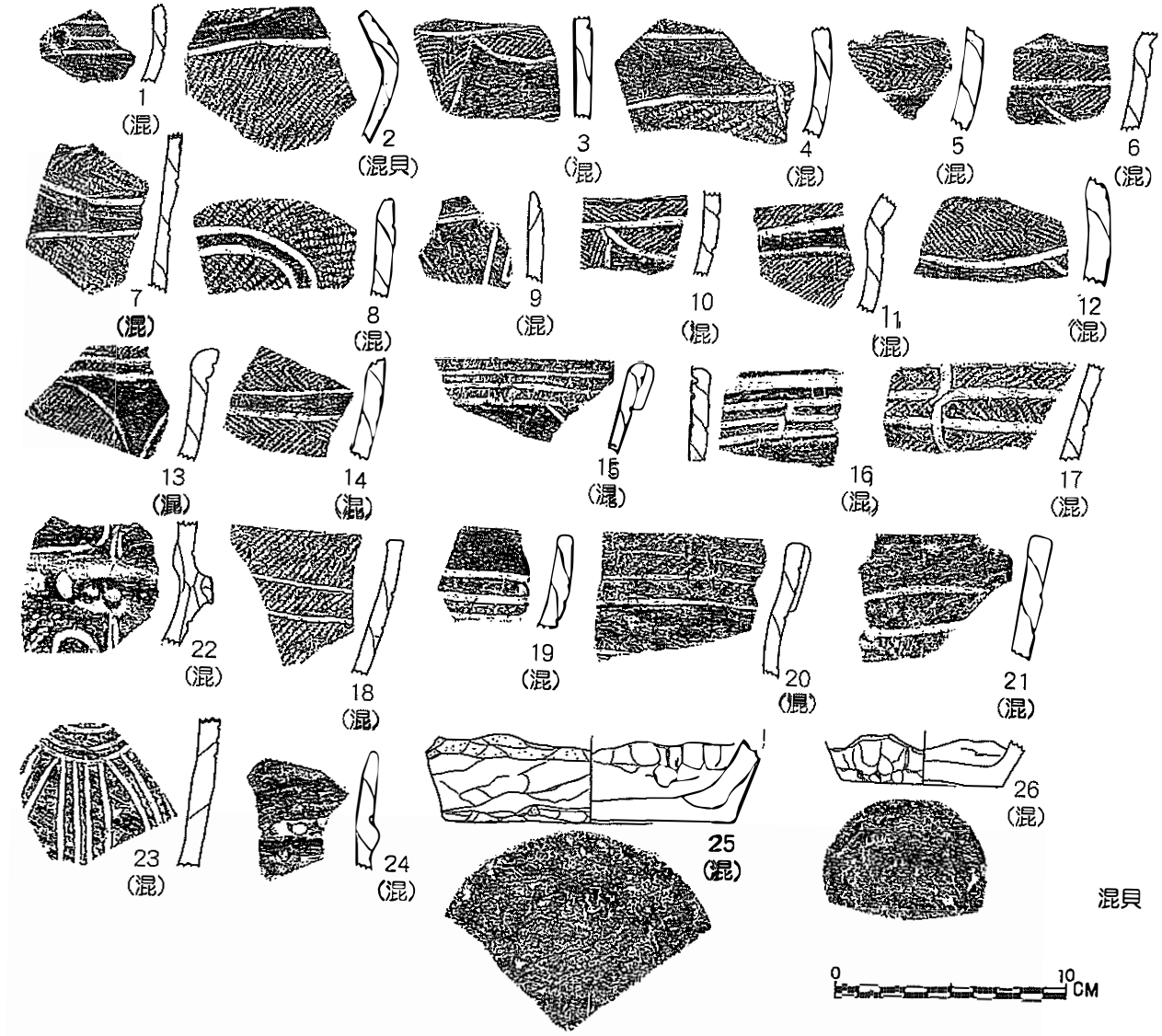
SⅡ

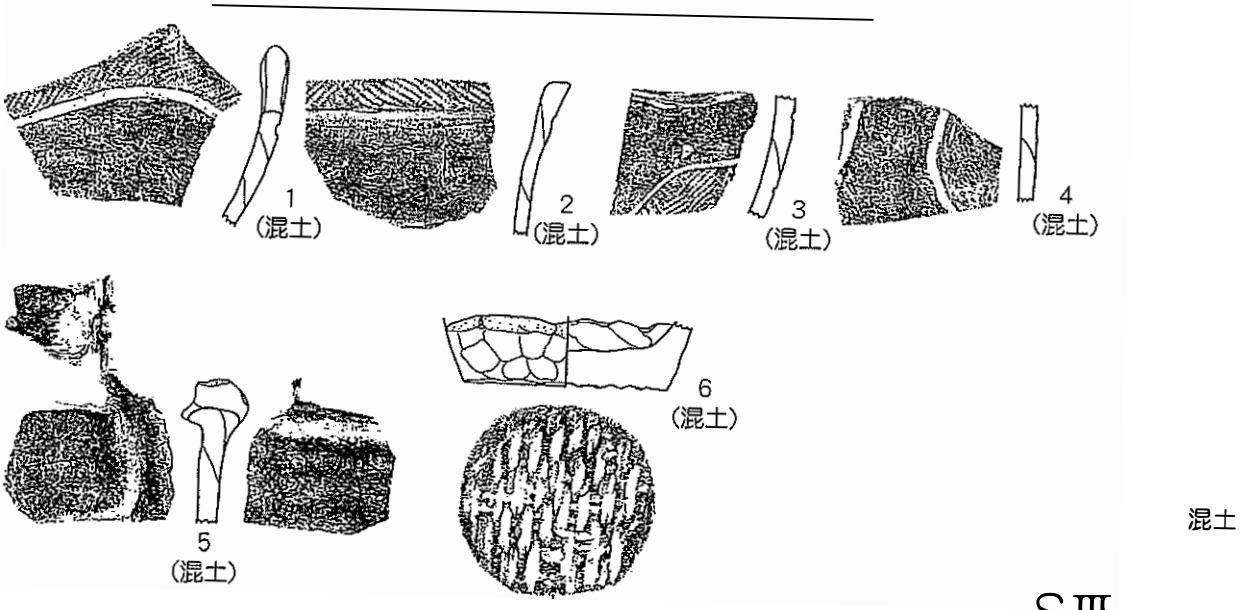
SⅡ混土・土層　図7


1
(貝層)
2
(貝層中)
3
(貝層中)
4
(貝層中)
5
(貝層中)
6
(貝層中)
7
(貝層中)
8
(貝層中)
9
(貝層中)
10
(貝層)
11
(貝層)
12
(貝層)
13
(貝層中)
14
(貝層中)
15
(貝層中)
16
(貝層中)
17
(貝層中)
18
(貝層中)
19
(貝層中)
20
(貝層)
21
(貝層中)
22
(貝層中)
23
(貝層中)
24
(貝層中)
25
(貝層中)
26
(貝層中)
27
(貝層中)
SⅢ
0
10
CM


1
(貝層下)
2
(貝層下)
3
(貝層下)
4
(貝層下)
5
(貝層下)

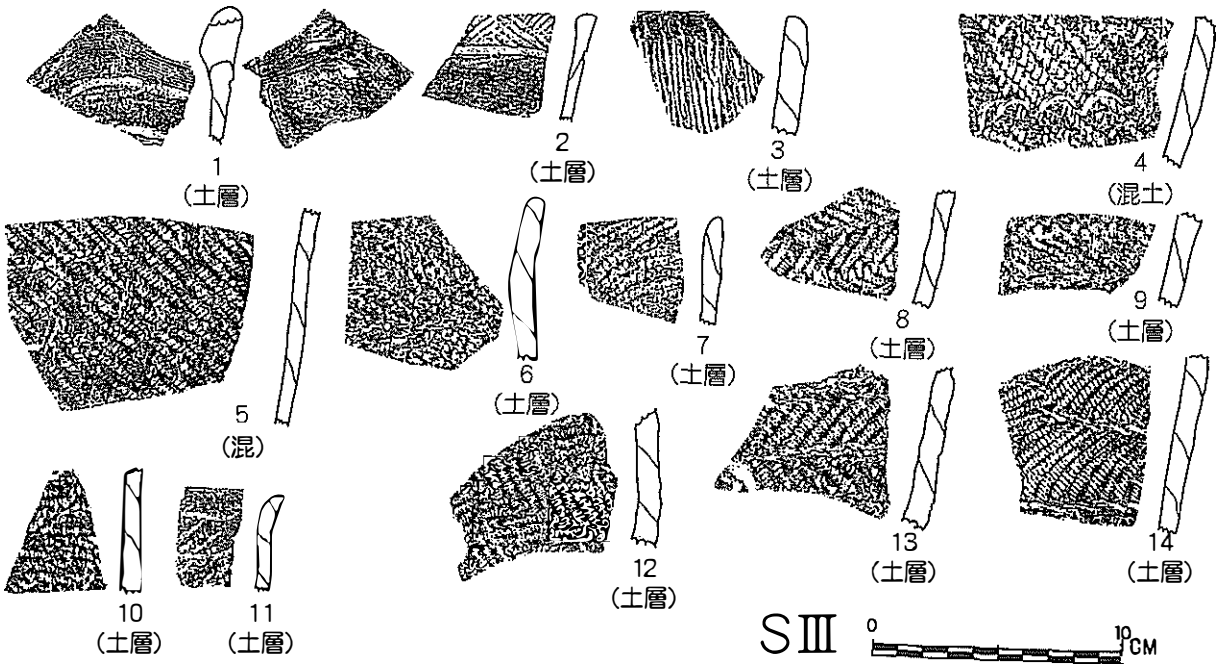
SⅢ貝層・貝層下　図8


1
(混)
2
(混貝)
3
(混)
4
(混)
5
(混)
6
(混)
7
(混)
8
(混)
9
(混)
10
(混)
11
(混)
12
(混)
13
(混)
14
(混)
15
(混)
16
(混)
17
(混)
22
(混)
18
(混)
19
(混)
20
(混)
21
(混)
23
(混)
24
(混)
25
(混)
26
(混)
混貝
0
10
CM

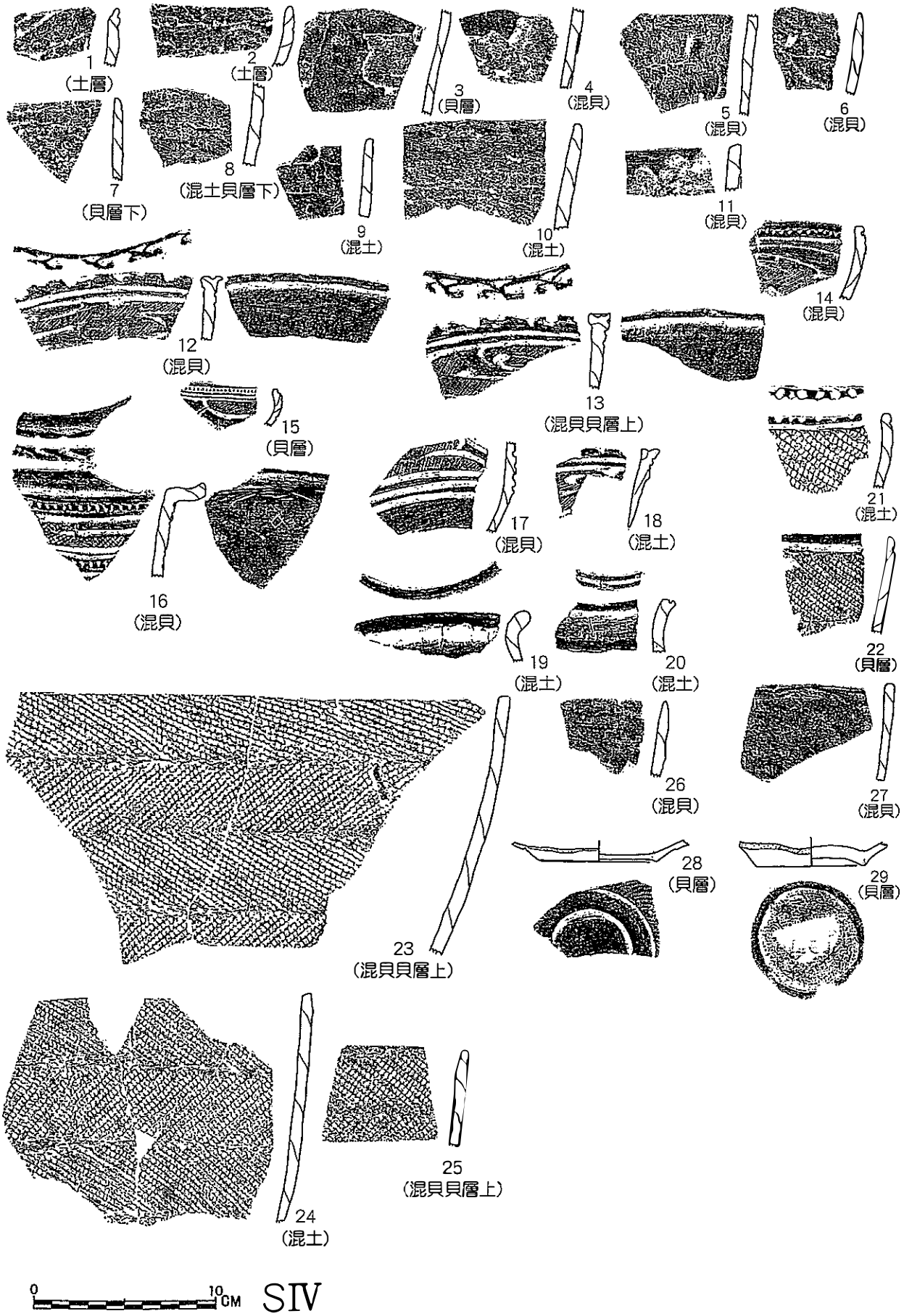

1
(混土)
2
(混土)
3
(混土)
4
(混土)
5
(混土)
6
(混土)
混土

SⅢ

SⅢ混貝・混土　図9

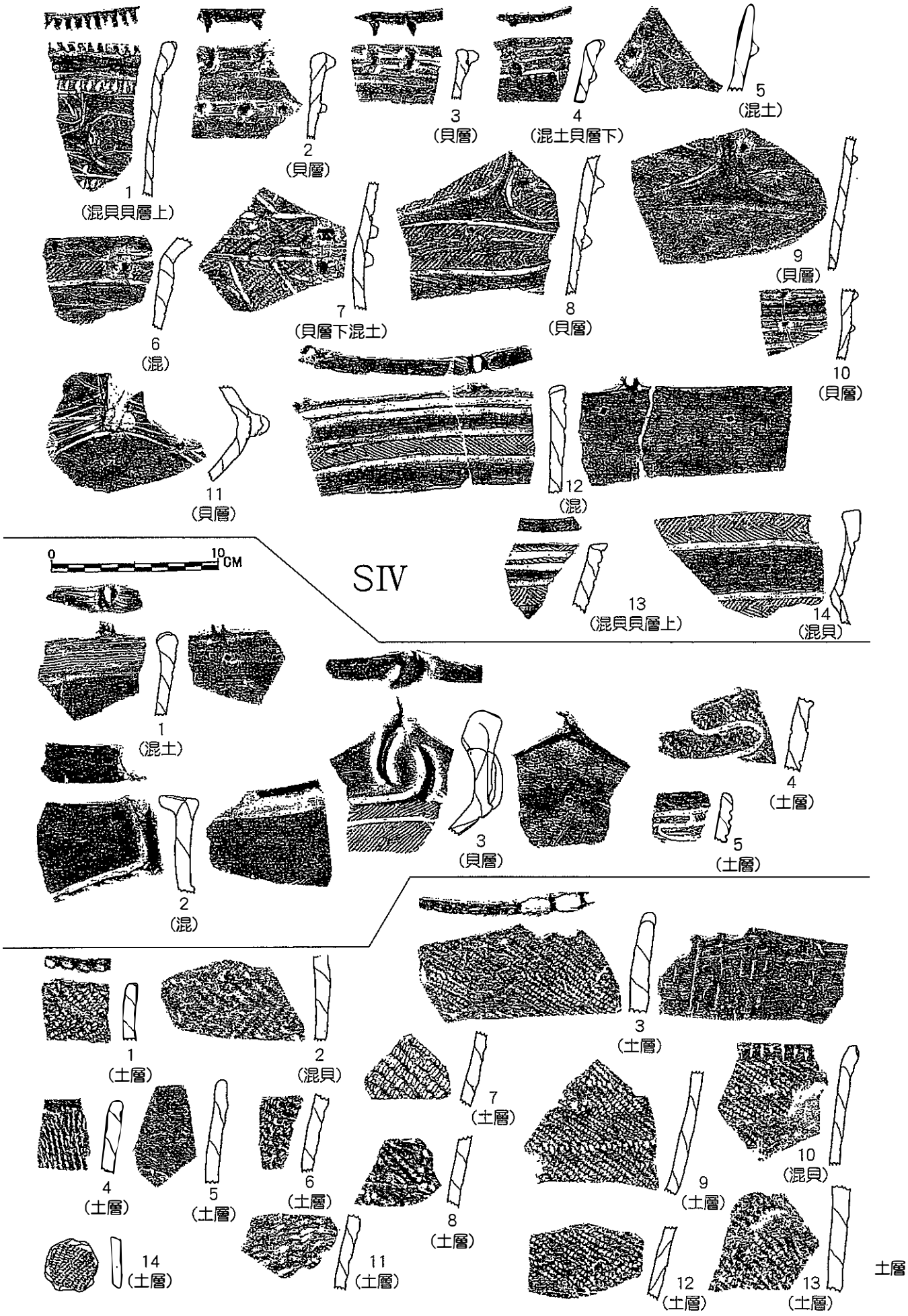


SⅢ土層(SⅡ～SⅢ)　図10

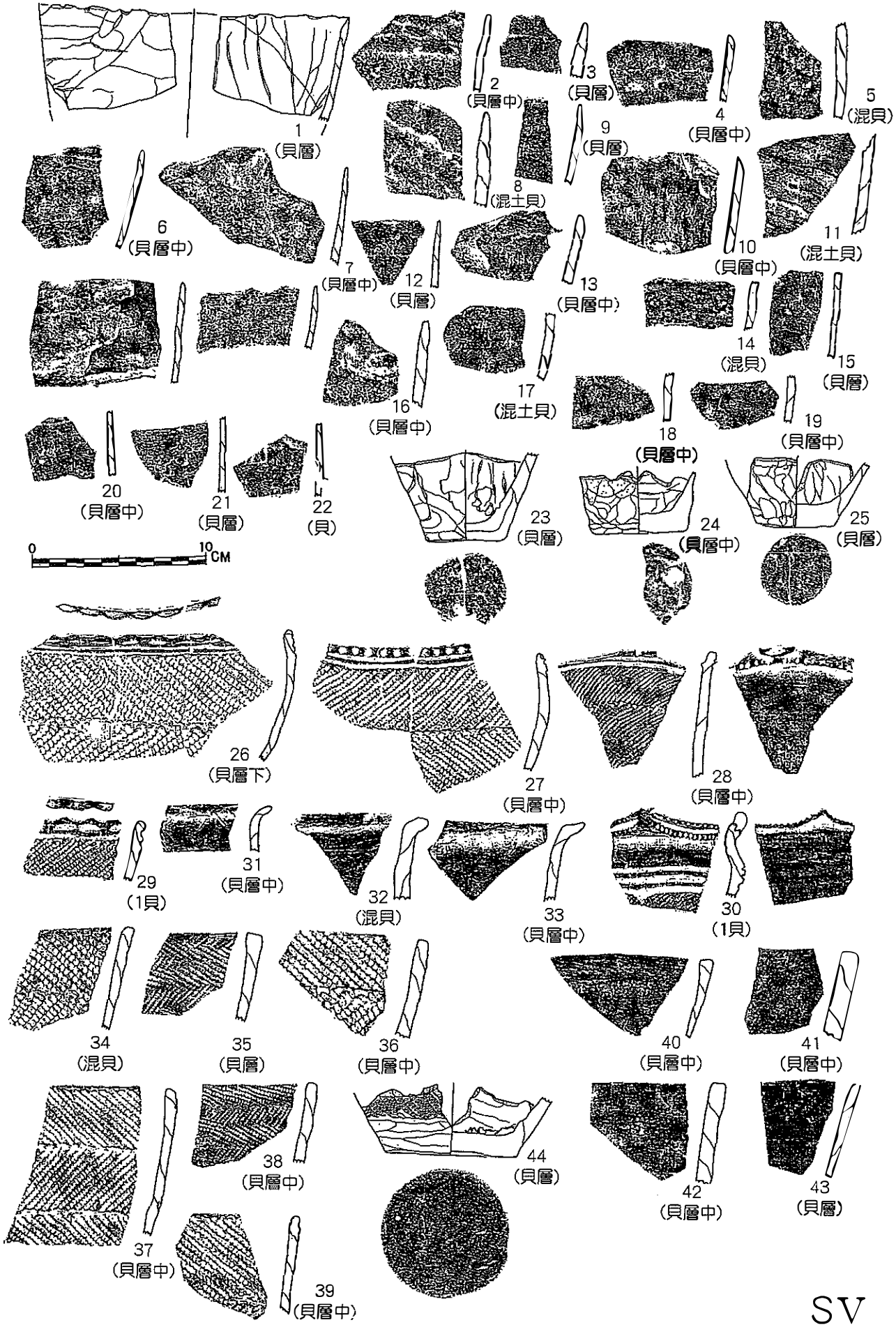

1
(土層)
2
(土層)
3
(貝層)
4
(混貝)
5
(混貝)
6
(混貝)
7
(貝層下)
8
(混土貝層下)
9
(混土)
10
(混土)
11
(混貝)
12
(混貝)
13
(混貝貝層上)
14
(混貝)
15
(貝層)
16
(混貝)
17
(混貝)
18
(混土)
19
(混土)
20
(混土)
21
(混土)
22
(貝層)
23
(混貝貝層上)
24
(混土)
25
(混貝貝層上)
26
(混貝)
27
(混貝)
28
(貝層)
29
(貝層)
0
10CM

SⅣ

SⅣ　図11

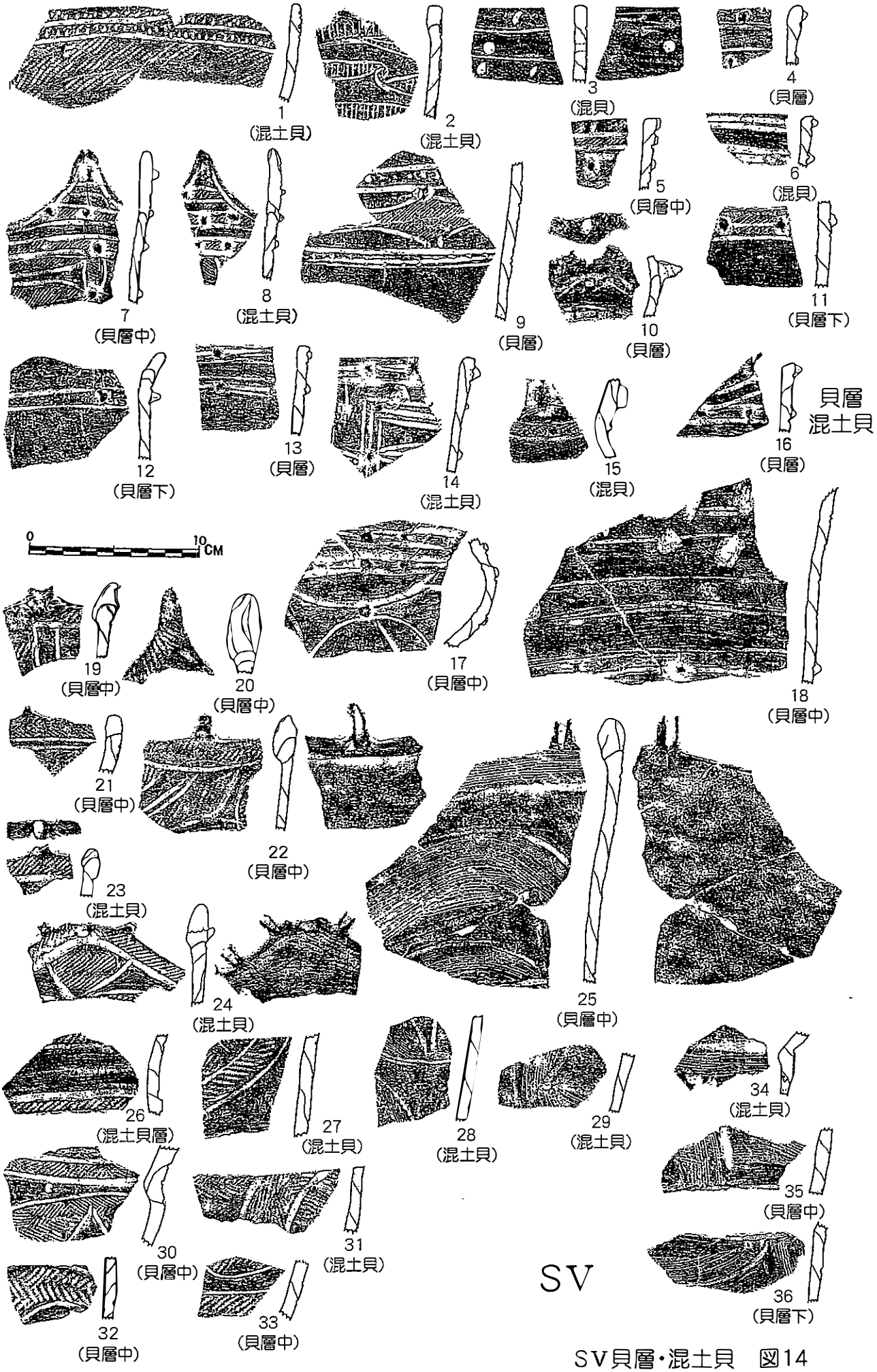


SIV混貝・混土・土層　図12

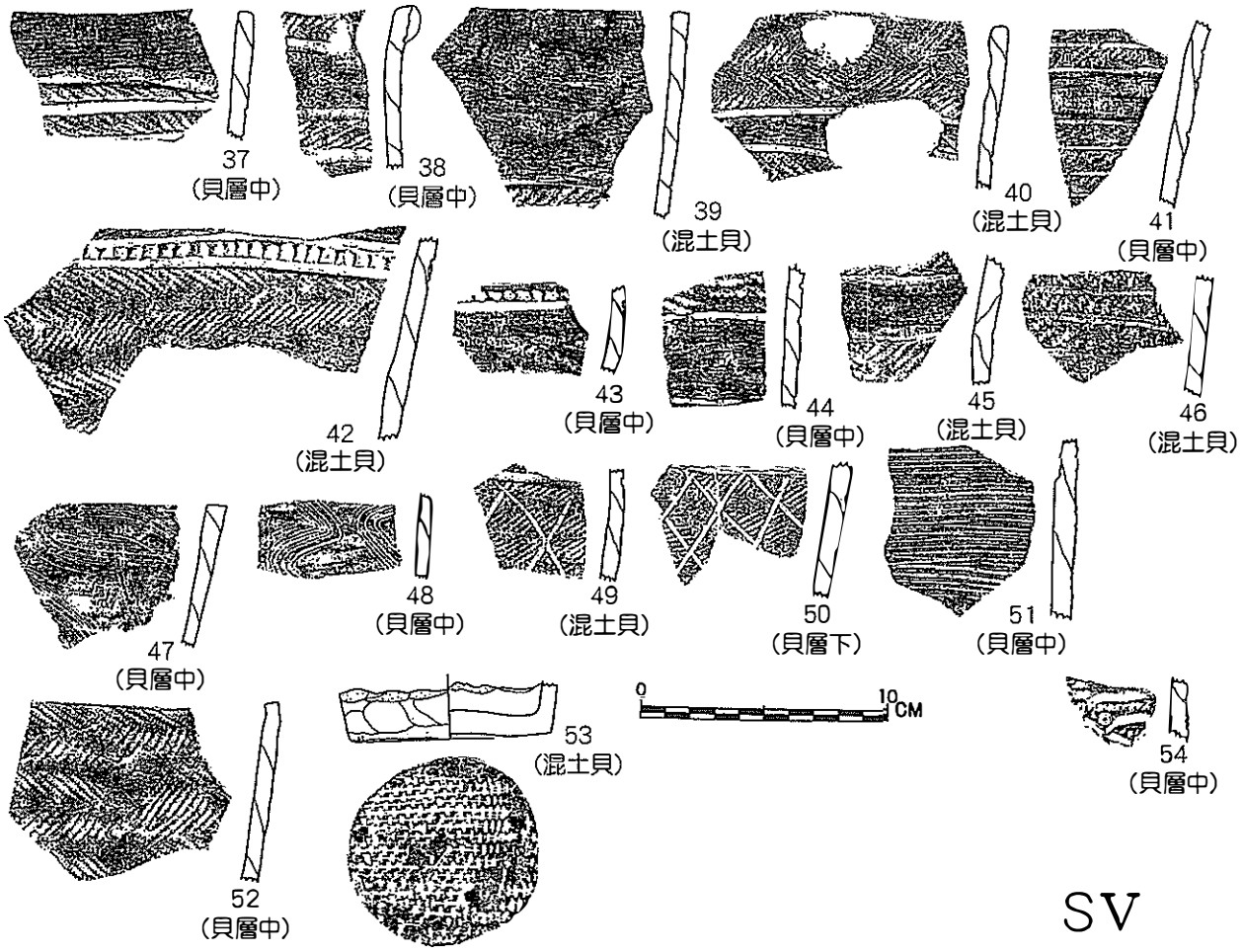

1
(貝層)
2
(貝層中)
3
(貝層)
4
(貝層中)
5
(混貝)
6
(貝層中)
7
(貝層中)
8
(混土貝)
9
(貝層)
10
(貝層中)
11
(混土貝)
12
(貝層)
13
(貝層中)
14
(混貝)
15
(貝層)
16
(貝層中)
17
(混土貝)
18
(貝層中)
19
(貝層中)
20
(貝層中)
21
(貝層)
22
(貝)
23
(貝層)
24
(貝層中)
25
(貝層)
0
10
CM
26
(貝層下)
27
(貝層中)
28
(貝層中)
29
(1貝)
31
(貝層中)
32
(混貝)
33
(貝層中)
30
(1貝)
34
(混貝)
35
(貝層)
36
(貝層中)
40
(貝層中)
41
(貝層中)
38
(貝層中)
44
(貝層)
42
(貝層中)
43
(貝層)
37
(貝層中)
39
(貝層中)

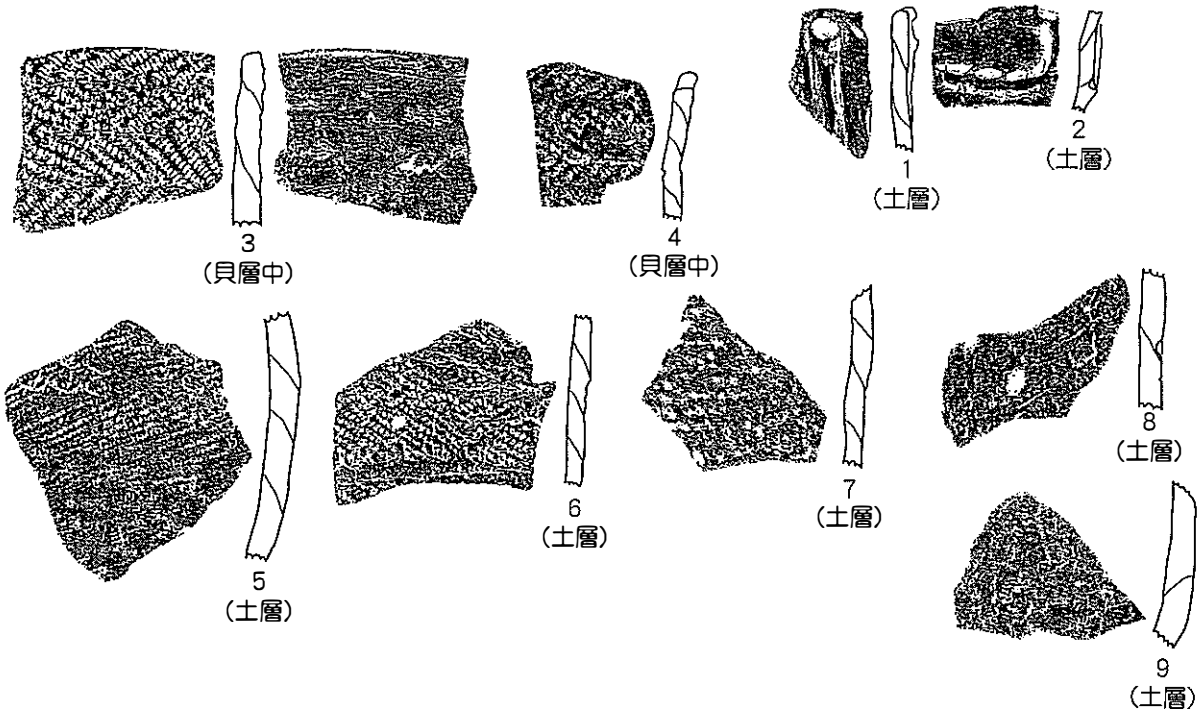
SV

SV貝層　図13


1
(混土貝)
2
(混土貝)
3
(混貝)
4
(貝層)
5
(貝層中)
6
(混貝)
7
(貝層中)
8
(混土貝)
9
(貝層)
10
(貝層)
11
(貝層下)
12
(貝層下)
13
(貝層)
14
(混土貝)
15
(混貝)
16
(貝層)
貝層
混土貝
0
10
CM
17
(貝層中)
18
(貝層中)
19
(貝層中)
20
(貝層中)
21
(貝層中)
22
(貝層中)
23
(混土貝)
24
(混土貝)
25
(貝層中)
26
(混土貝層)
27
(混土貝)
28
(混土貝)
29
(混土貝)
34
(混土貝)
30
(貝層中)
31
(混土貝)
35
(貝層中)
32
(貝層中)
33
(貝層中)
SV
36
(貝層下)

SV貝層・混土貝　図14


37
(貝層中)
38
(貝層中)
39
(混土貝)
40
(混土貝)
41
(貝層中)
42
(混土貝)
43
(貝層中)
44
(貝層中)
45
(混土貝)
46
(混土貝)
47
(貝層中)
48
(貝層中)
49
(混土貝)
50
(貝層下)
51
(貝層中)
53
(混土貝)
0
10
CM
54
(貝層中)
52
(貝層中)
SV


3
(貝層中)
4
(貝層中)
1
(土層)
2
(土層)
5
(土層)
6
(土層)
7
(土層)
8
(土層)
9
(土層)

SV混土貝・土層　図15

（２） 土製品

① 土偶片　残念ながら実測図の作製は出来なかった。松島町史資料編Ⅰ(1989)の２１８頁の上段に４点の土偶片が提示されている。左側が顔から胸部の現長４.５㎝の簡略された顔に２個の乳房を示したものである。右側は脚部、腕の部分である。

② 円板状土器片　これも町史２１２頁に８点が提示されている。ＳⅡとＳⅣ区（図７・１１）に各１点の資料を示した。用途不明の製品である。

（３） 石製品

石製品は磯崎の緑松会館の磯崎郷土資料館に貸与していた資料で、町史編纂のために返還されたものである。

① 石鏃　(図16-1~19)

再録した形態から大部分は、Ｄ類（凸基）１１点あり、ＳＩ４点、ＳⅡ２点、ＳⅣ２点、ＳＶ３点である。出土は各区にわたり、層位も混貝から貝層であり、後期の中葉以降である。Ｃ類（丸基）は３点、ＳⅣ１点、ＳＶ２点である。出土層位もＤ類と同じである。Ｅ類（棒状基）２点で、ＳⅢ区のみで、混貝・貝層出土である。Ａ類(凹基)は僅か２点であり、ＳⅣ・Ｖ区で貝層出土である。特に、(18)は側縁形態が２段であり、長さ４.３㎝、幅２.０～１.３㎝、厚さ０.５～０.３㎝の大形の鏃である。しかも、基部にアスファルトが付着したものである。

② 石匙　(図16-20~25)

縦形石匙だけであるが、５点の出土。上部に摘みを持ち、両側が丁寧な剥離によって刃部を形成する。(20)は長さ６.８㎝、幅２.１５㎝、厚さ０.９～０.４㎝、ＳＶ混貝土出土である。他に、ＳＶ貝層出土が３点、(22)長さ５.９㎝、幅２.４～１.０㎝、厚さ０.９～０.５６㎝、(23)長さ５.４㎝、幅３.２５㎝、厚さ１.０～０.４５㎝、もう１点は、未製品のようであるが、長さ４.５㎝、幅１.９㎝、厚さ０.３～０.２㎝である。

③ 石錐　(図16-25~27)

石錐は３点出土、ＳＩ、ＳⅡ、ＳⅢの混貝、貝層出土である(25)は現長４.８㎝、幅２.５㎝、厚さ１.２～０.５㎝、下部に錐状の突起を持つものである。(27)は長さ３.７㎝、幅１.５～０.４㎝、厚さ１.０～０.３６㎝のもので、細い錐部分は２.１㎝である。ＳⅢ混貝、(26)は破片で錐部分のみである。現長３.７㎝、幅０.７㎝、厚さ０.５㎝で、ＳⅡ貝層出土。

この他に不定形の剥片も多数出土している。

（４） 骨角牙貝製品　(図17)

漁撈具等の骨角製品についても、全部収録したものではない。松島町史資料編Ⅰの２１３頁から２１７頁に収録した骨角製品を参照して下さい。離頭銛(後期以降のもの)、燕尾形離頭 銛５点が提示されている。釣針４点、内、釣針形態で非常に数の少ない軸鈎が２点提示されている。刺突具では組合せ固定銛、小型の鏃状刺突具が７点示されている。ノ字形の固定銛も１点収録されている。

① 釣針　(図17-1~2)

(1) は破片であるが、釣針形態分類の軸鈎。現長６.０㎝、幅１.２㎝、厚さ０.７５～０.５２㎝である。ＳＶ貝層上出土。(2)は上部欠損、下部の曲がり部分のもの、ＳⅡ貝層出土。現長３.０㎝、幅２.２５㎝、厚さ０.６㎝である。

② 刺突具類等 (図17-3~10・図18)

(3)は完形品で鏃形、長さ８.３㎝、幅１.０～０.３５㎝、厚さ０.５～０.４㎝で 、ＳＩ混貝出土。

(4)下部欠損、現長６.２㎝、幅１.１～０.５㎝、厚さ０.６～０.４㎝。ＳⅣ貝層中。

(5)下端欠損、細身のもの。現長７.６㎝、幅０.６㎝、厚さ０.３㎝でＳⅡ貝層出土である。

(6)は上端欠損、現長７.０㎝、幅１.２２～０.７㎝、厚さ０.８～０.６５㎝でＳＶ貝層出土。

(7)上部欠損、形態不明、現長９.７㎝、幅１.２ ㎝、厚さ０.９㎝でＳ区であるが層位不明。

(8)は上部少々欠、下部が細く削がれて整形されている。獣類の中手か中足骨利用のものである。現長１５.０㎝、幅１.６５㎝、厚さ０.８～０.４㎝で、ＳＩ混貝出土。

(9)は魚骨使用(ﾏｸﾞﾛ)のもの、上部欠と下端少少欠損、現長８.５㎝、幅０.５５～０.３４㎝、厚さ０.４㎝で、ＳＩ混貝出土。

(10)は下部左側欠損、左側縁に鋸歯状あり、アカエイの尾刺と考えられる。長さ６.２㎝、幅０.９４～０.５㎝、厚さ０.３５～０.２６㎝、ＳＶ黒土出土。

(11)は上部欠損、箆状工具である。現長１１.９㎝、幅２.１㎝、厚さ１.４㎝、ＳＶ貝層上出土。下部に使用痕あり。

(12)は上部右側欠損、釣針の未製品で、中央部に孔が開けられ、製作工程を示すものである。長さ８.０㎝、幅３.０㎝、厚さ０.６～０.４㎝、ＳＩ出土層位不明である。

(13)は浮袋の口で、長さ１.８㎝、幅１.４㎝、厚さ０.３㎝、ＳＩ混貝出土。

(14)は牙製品である。上部に索孔の痕跡あり、現長３.１㎝、幅２.２㎝、厚さ０.４～０.２㎝、ＳⅣ混貝出土。

(15)イルカの歯で上部索孔され垂飾品である。長さ３.０㎝、幅０.８㎝、厚さ０.９㎝、ＳＶ１貝出土。

(16)も同じ、長さ２.７㎝、幅０.７㎝、厚さ０.４㎝、出土も(15)と同じである。

(17)は鹿角使用の腰飾りである。長さ４.９㎝、幅５.９㎝、厚さ４.３㎝、鹿角の根幹部を利用し、ヨコに０.８㎝の索孔して垂飾にしている。

２１７頁最上段の腰飾りは町史編纂中の整理中に行方不明になっている。

(18・19)はサルボウの貝輪である。(18)はＳＩ混土出土、(19)はＳＶ貝層出土。

（5） 自然遺物について

① 哺乳類　特に出土量の多い哺乳動物はシカであり、続くのはイノシシである。

シカ　　部位骨の出土が多い。第一頚椎１、後頭骨１、肩甲骨Ｌ５、Ｒ７、上腕骨Ｌ２、Ｒ５、脛骨Ｌ３、Ｒ１、中手骨Ｌ１０、Ｒ７、尺骨Ｒ３，寛骨Ｌ８、Ｒ３、大腿骨Ｌ３、橈骨上端Ｌ５、Ｒ２、下端Ｌ６、Ｒ５、中足骨Ｌ１、Ｒ１、距骨Ｌ６、Ｒ２がある。鹿角は落角５、頭骨付き９、鹿角先端部１１、鹿角を割ったもの１４がある。また、鹿角の切断痕のあるもの１５がある。

シカの年令、捕獲時期を示す上顎骨なく、下顎骨Ｌ１２、Ｒ１３がある。

下顎骨Ｌ

層位	P^1	P^2	P^3	M^1	M^2	M^3	段階
SI-混貝	0	0	0	0	0	0	Ⅳ-2
SI-混貝				( )	0	0	Ⅳ-3
SⅡ-貝層上	0	0	0	0	0	0	Ⅳ-2
SⅡ-貝	0	0	0	( )			Ⅳ-2
SⅡ-混土	0	( )					Ⅳ-1?
SⅢ-貝層中			( )	0	0	0	Ⅳ-2
SⅢ-貝	0	0	0	0	( )		Ⅳ-3
SⅢ-貝層中	( )	0	( )				Ⅳ-2
SⅢ-貝層中	0	0	( )				Ⅳ-1
SⅤ-貝層上	0	0	0	0	0	0	Ⅳ-2
SⅤ-貝層上				( )	0	0	Ⅳ-2
SⅤ-貝層上	0	0	0	0	( )		Ⅳ-3

下顎骨Ｒ

層位	M^3	M^2	M^1	P^3	P^2	P^1	段階
SI-混	0	0	0	0	0	( )	Ⅳ-3
SI-混貝				( )	0	0	Ⅳ-3
SⅡ-貝上	未	0	0	0	0	0	Ⅳ-1
SⅡ-貝層中			(未)	(m)	(m)	(m)	Ⅱ-1?
SⅡ-貝				( )	0	( )	Ⅳ-3
SⅡ-貝層上	( )						Ⅳ-3?
SⅡ-貝層	未	( )					Ⅲ-3
SⅡ-混	0	0	0	0	0	( )	Ⅳ-3
SⅤ-貝層上	0	0	0	0	0	0	Ⅳ-2
SⅤ-貝層上		未	0	m	m	m	Ⅱ-3
SⅤ-貝層上	( )	0	0	0	0	0	Ⅳ-4
S －	( )	0	0				Ⅳ-3
S －			0	0			Ⅳ-3

下顎骨の歯の萌出によって、遺体の年令推定が行なわれる。表の右側に段階を表示してあるが、ほどんとが、成獣であり、それもⅣ－３、Ⅳ－２の段階であり、生後２年前後の遺体である。下顎骨ＲにⅡ段階の幼体出土、生後６ケ月以降の遺体である。これから、シカの猟期を考えられる(1974 遊佐邸)。

イノシシ　　シカと比較して、遺体の出土は少ない。肩甲骨Ｌ３、中足骨Ｌ１、橈骨Ｌ１、Ｒ１程度である。上顎骨Ｌ１が出土している。

上顎骨Ｌ

層位	P^1	P^2	P^3	P^4	M^1	M^2	M^3	段階
SⅡ-混	( )	0	0	0	0	0	0	Ⅳ-3

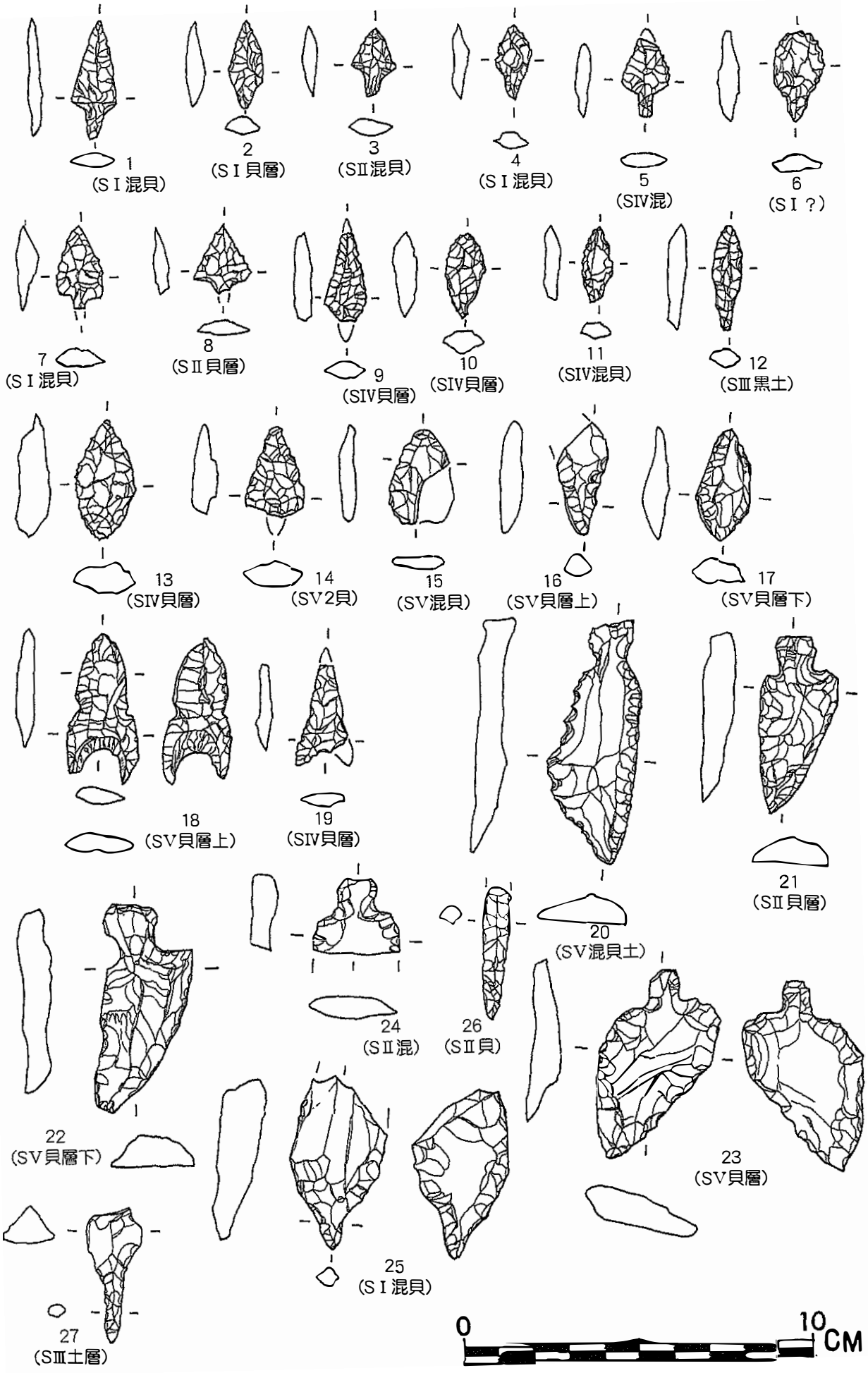
歯の萌出からⅣ段階の生後２年以降の成獣である。

クジラの遺存骨あり。　イルカ　歯出土。ヒト　散乱状態の出土が、ＳＩに５ケ所、ＳⅡに５ヶ所、ＳⅣに２ヶ所、ＳＶに７ヶ所ある。また、地区層位不明が６ヶ所あり、全体に２５ヶ所である。特に、頭骨出土がＳＶに多い。カワウソ　大腿骨Ｒ１出土。

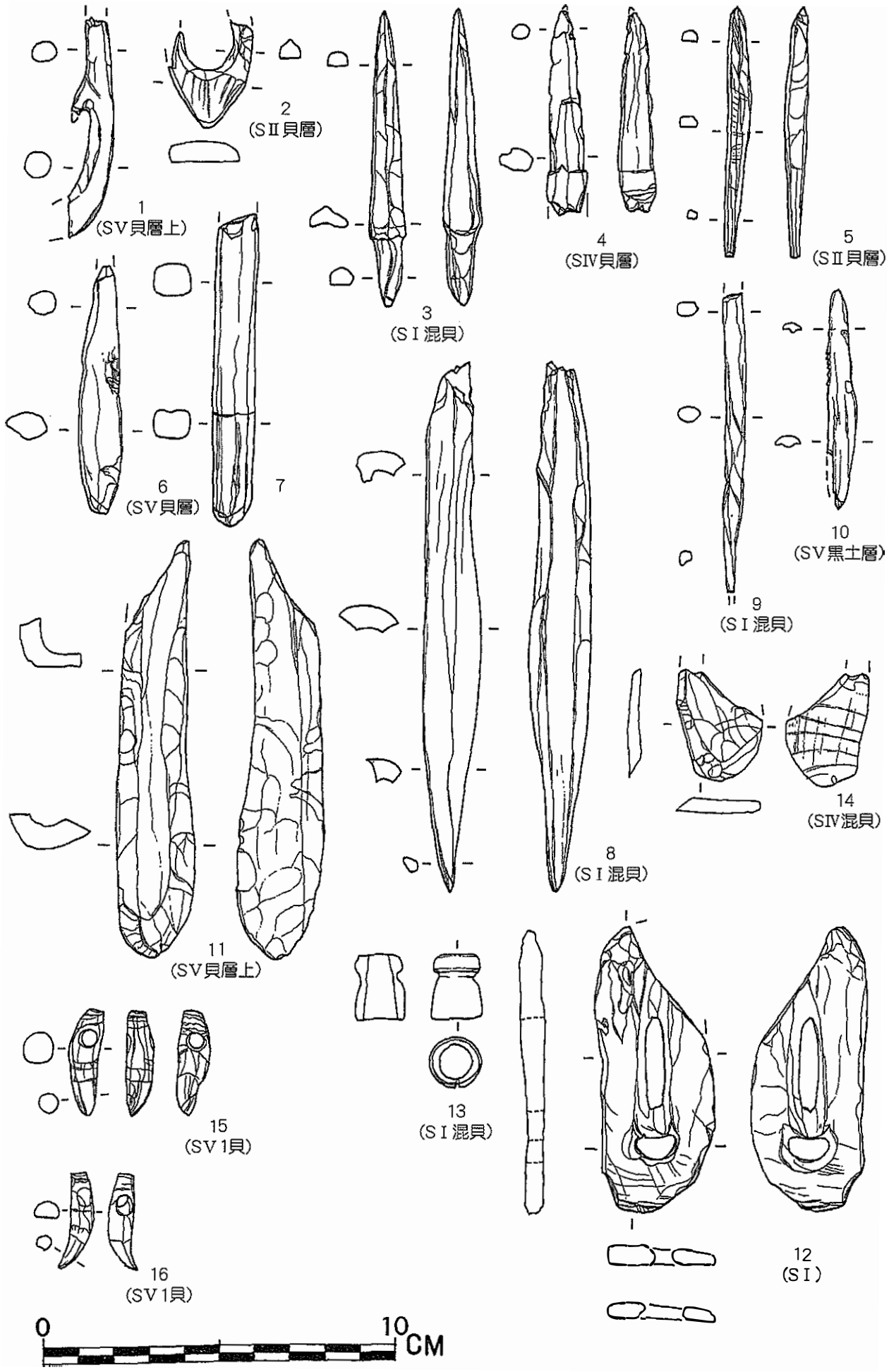
② 鳥類　カモ中心であり、種類も多くない。

カモ　　上腕骨Ｌ２、Ｒ６、肩甲骨Ｌ１、Ｒ１、脛骨Ｌ３、Ｒ２、烏口骨Ｒ１、尺骨１、橈骨１、中手骨Ｌ１である。

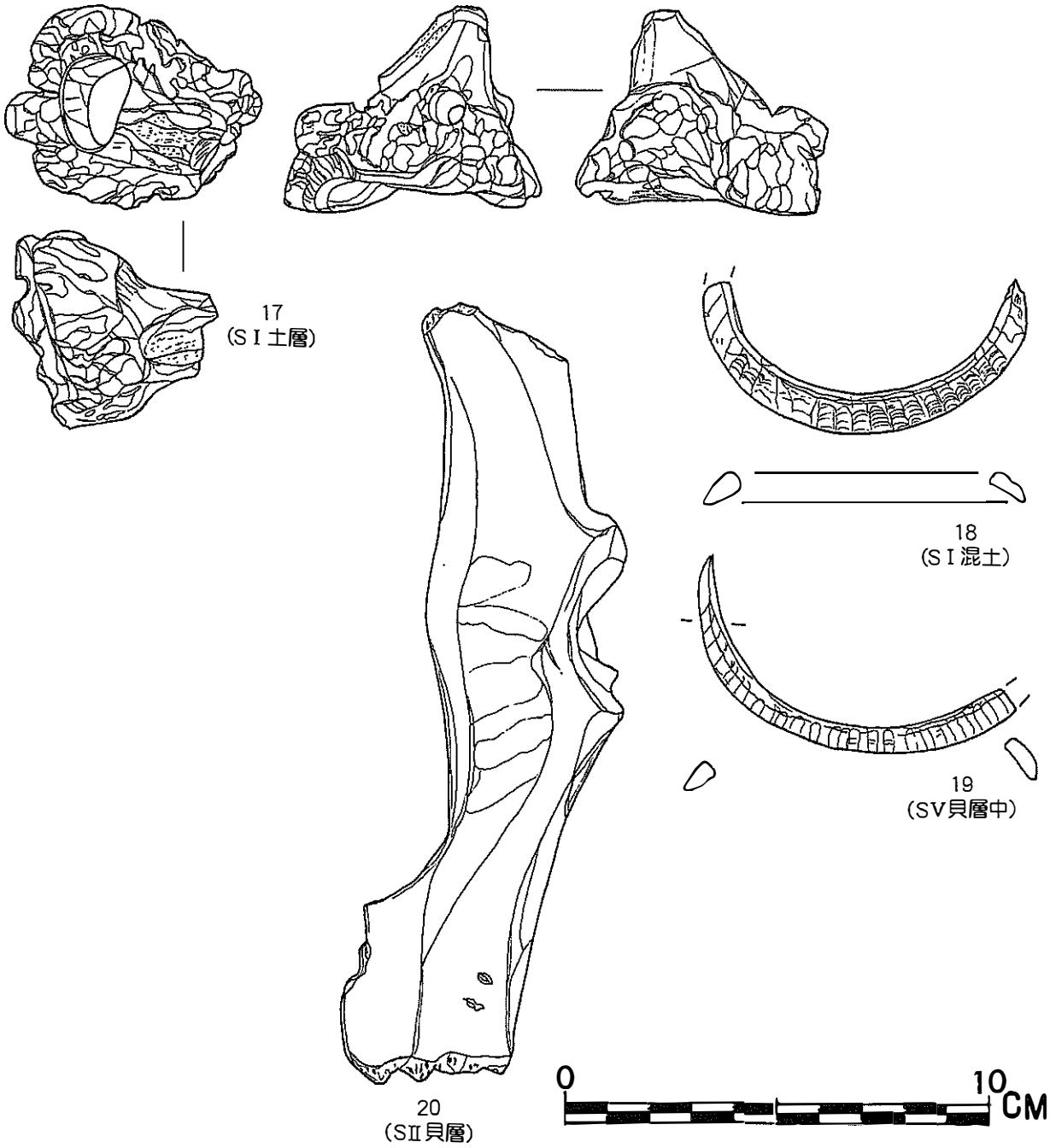
ヒシクイ　　烏口骨Ｌ１点だけである。
アホウドリ？　　上腕骨Ｌ２点。　　オオハム　橈骨Ｒ１，尺骨Ｒ１の出土。
ミズナギトリ　　尺骨、脛骨、中手骨、橈骨各１点の出土。
タンチョウツル　　尺骨ＳＶ貝層上出土。
③　魚類　マダイ・クロダイ・スズキ中心の出土で、種類は多くない。
マグロ　　歯骨ＬＲ各１点、脊椎骨は少なくて８点のみの出土。
マダイ　　上顎骨Ｌ５、Ｒ６である。長さ４cm前後、高さも４cm前後が多い。下顎骨Ｌ４、Ｒ４、測定値は上顎骨と同じ傾向である。前頭骨２点、脊椎骨２点がある。
クロダイ　　上顎骨Ｌ４、Ｒ３、下顎骨Ｌ５、Ｒ６の出土である。計測値は長さ・高共に５cm前後が多い。
スズキ　　下顎骨Ｌ１９、Ｒ２０である。破損品が多く長さ計測値のもの２点で６cm以上である。鰓蓋骨Ｌ３１、Ｒ３４がある、破損品が多く完全品少ない。咬み痕、押圧痕跡のある遺体５点存在する。歯骨Ｌ１９、Ｒ１８
ボラ　　歯骨Ｒ１点出土している。　　ブリ　脊椎骨３出土。
コウイカ　骨の出土見られる。
④　貝類　　採集された貝類を見ると二枚貝の種類が多い。
アサリ、マテガイ、イガイ、オオノガイ、ハマグリ、チョウセンハマグリ、サルボウ、カリガネエガイ、アワビ、シオフキ，ホタテガイ、アズマニシキ、カキ、オキシジミ、　ウミニナ、レイシ、クボガイ、アカニシ、ツメタガイ　（19類）


1
(SⅠ混貝)
2
(SⅠ貝層)
3
(SⅡ混貝)
4
(SⅠ混貝)
5
(SⅣ混)
6
(SⅠ?)
7
(SⅠ混貝)
8
(SⅡ貝層)
9
(SⅣ貝層)
10
(SⅣ貝層)
11
(SⅣ混貝)
12
(SⅢ黒土)
13
(SⅣ貝層)
14
(SⅤ2貝)
15
(SⅤ混貝)
16
(SⅤ貝層上)
17
(SⅤ貝層下)
18
(SⅤ貝層上)
19
(SⅣ貝層)
20
(SⅤ混貝土)
21
(SⅡ貝層)
22
(SⅤ貝層下)
23
(SⅤ貝層)
24
(SⅡ混)
25
(SⅠ混貝)
26
(SⅡ貝)
27
(SⅢ土層)
0
10
CM

S　図16


1
(SV貝層上)
2
(SⅡ貝層)
3
(SⅠ混貝)
4
(SⅣ貝層)
5
(SⅡ貝層)
6
(SV貝層)
7
8
(SⅠ混貝)
9
(SⅠ混貝)
10
(SV黒土層)
11
(SV貝層上)
12
(SⅠ)
13
(SⅠ混貝)
14
(SⅣ混貝)
15
(SV1貝)
16
(SV1貝)
0
10CM

S　図17



S　図18

［Ⅳ］ 出土遺物の考察

（１） 縄文土器について

松島町史編纂時に西の浜貝塚の遺物整理を実施した。昭和３４年調査は同時に３ヶ所の調査が行なわれた。第１区（ＡＢＣＤ区）、第２区（Ｎ区）、第３区（Ｒ区）である。
加藤孝先生中心に、それぞれに責任者を置いての調査である。整理は進んでいて逐次報告をしたいと考えている。最悪の場合は松島町史の考古資料編で勘弁してもらわなければと思う。
今回は昭和３５年に第２次調査Ｓ区である。筆者はこの調査に主体的に関わっていない。大学に遺物だけ保管され、資料のほとんどはないといった状態である。

層位について、各層とも遺物が混在している。確実に認められる層は下層の混貝土層から黒土層（土層）だけである。特に、ＳＶ区で褐色混土貝層・黒色混土貝層・貝層(下顎層)まで、晩期大洞Ｃ式それに伴う製塩土器が混在し、撹乱が甚だしいことである。

ＳＩ～Ⅲ区では、多少の混乱がある。それは、台地斜面に平行した調査区設定の弊害によるものである。昭和４１年調査の西の浜貝塚調査と同じ過ちをした。それは２ｍのトレンチのため、斜面での変化、貝層が途中で切れ、新に下層に新貝層の出現等について対応出来ない状態があった。しかし、ＳＩの東壁の厚い混貝層では第３類の瘤状小突起の一群から西の浜式が量的に多く、ついで、宮戸Ⅱａ式が出土し、一応層位的に把握出来るのである。

Ｓ区は前年度調査のＮ区の西側の丘陵平坦部の調査区である。Ｎ区の斜面上にあたり、Ｎ区より上部の斜面であり、Ｓ区は斜面上部のため、上層の多少の宮戸Ⅱ式と出土量の多い西の浜式ついで、宮戸Ⅲａｂ式への変遷を確実に捉えられている。

晩期大洞Ｃ式と製塩土器については、ＳⅣ～Ｖ区に多量の出土であり、特定する層は不明である。南壁の貝層(下顎層)まで晩期土器群・製塩土器群が混在するので、ＳⅣ～Ｖ区から南部、東部周辺での製塩生産の工房跡が想定される。

製塩土器は器表面に火熱による剥離痕、荒れた肌を示し、土器整形時の輪積痕跡が残り、器裏面はやや整形が丁寧で、平滑である。口縁は直立かやや外反、薄く先端部でなお薄く、土面は整形なくそのままである。細片が多い。底部は図１３－２３～２５のように、底径は５～６cmの小形平底で、沈線等による施文がある。図１３－１の口縁部との関係で高さ２０cm前後の深鉢形が考えられる(鹿藤彦 2001)。 昭和３４年調査第１区(A･B･C･D)は 、縄文晩期大洞Ｃ１～２期に製塩土器に関連するものであり、東北歴史資料館調査の里浜西畑地区の製塩土器群と併行するものであることが明らかになった。資料館が昭和５４年から調査する約３０年前に縄文晩期の製塩跡の調査が実施されていたことになる。

しかし、その成果は講義履修の学生のため、責任ある整理の体制が出来なかったこと、それに、遺物が文様のない細片だけであったことも、整理が後回しとなった。また、指導教官の製塩土器の編年観の誤謬もあった。元宮城教育大学学長の米寿記念のために整理するまで調査の成果が埋もれていたことになる。調査成果の公開は早く実施しないとと痛感させられた。筆者も多くの資料を抱えており、公開すべく努力している。

［西の浜式］について

陸前地方の後期縄文土器の編年研究を始めたのは、昭和２７年(1952)の調査以後の事である。当時、全国的に縄文土器編年表を作製しておられた、山内清男博士の編年表の陸前項目に、相当する形式が存在するが、命名形式がなく空白であった。宮戸島貝塚の調査が本格的に始まるのは昭和２７年からである。

若気のいたり、力量も考えずに縄文後期の編年研究を始めることになる。

① １９５６「宮城県宮戸島里浜台囲貝塚の研究」宮城県の地理と歴史１集

昭和２７年の調査整理を通して、出土土器を層位的に３つに区分し、初めて(１)第３層土器、関東の後期縄文土器堀ノ内式に併行とし、一型式と考えたが後に細分されると考えた。(２)第２層土器、これも関東での加曾利Ｂの諸形式にあたるとし、これも後に二型式に細分される。(３)第１層土器、関東での安行Ｉ式に併行するものとした。この調査によって、陸前地方の縄文土器後期の諸形式が手がかりをえた。

②　１９５７「陸前宮戸島里浜台囲貝塚の土器編年について」塩釜市教委「教育論文」第２集

(１)第３層土器を宮戸Ｉａ・ｂ式、２第２層土器を宮戸Ⅱａ・ｂ式、３第１層土器を宮戸Ⅲａ・ｂ式の編年学的型式序列が考えられる、関東での後期土器型式に比定され、併行関係にあることを示した。

この成果後１９６０年金剛寺貝塚の整理報告がなされ新しい編年研究の成果が示される。

③　１９６２「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について」考古学雑誌第４８巻１号　昭和２７年以来、台囲地区のＢ・Ｃ・Ｇ・Ｔ・Ｌ区の調査が進められ、また、松島町西の浜貝塚、女川町浦宿貝塚、名取市金剛寺貝塚等の調査から新知見があり、再度台囲貝塚出土の土器を再吟味を実施した。５つの層位を基に６類に分類した。(１)第１類土器、稜帯施文と線刻主体の土器群と細分される。宮戸Ｉ式である。(２)第２類土器、前谷地宝ケ峯式に相当し、関東での加曾利Ｂ式の諸型式に併行する。宮戸Ⅱａ・ｂ式である。(３)第３類土器、初めて西の浜貝塚調査の成果が示される。昭和３５年(1960)調査のＳトレンチの資料を示し第３類土器として提示する。「大きな特徴は、瘤状突起が器表面上に施文される第４類土器の前身を思わせる。また、口縁の突起に特徴がある。全般的にいって第２類土器の刻目文施文の土器群の影響が非常に強いものであり、次期の瘤状小突起の第４類土器への過渡期の型式として考えられる」として、［西の浜式］(第3類土器) と呼ぶことにすると新形式名が初めて提示される。(４)第４類土器、瘤状小突起施文土器群で宮戸Ⅲａ式。(５)第５類土器、瘤状小突起は消滅し、磨消縄文による入組が盛行する。宮戸Ⅲｂ式にあたる。(６)第６類土器、大洞Ｂ式の併行。として、宮戸Ｉａ・ｂ式、宮戸Ⅱａ・ｂ式、西の浜式から宮戸Ⅲａ・ｂ式を経て、晩期大洞Ｂ式へと編年序列の発展が考えられた。

このように、後期編年に西の浜式を提示したが、粗製土器との組合せについて不明な点があった。

④　１９６８「陸前地方縄文文化後期後半の土器編年について－宮戸台囲貝塚及び西ノ浜貝塚出土の土器を中心として－」仙台湾周辺の考古学的研究

斎藤良治氏により後期後半の編年が検討され、筆者の西の浜式、宮戸Ⅲａ式、宮戸Ⅲｂ式に相当することを述べている。西の浜貝塚Ｒトレンチは３層位が確認され、また、３分類された。第１類土器（西の浜式）の特徴を示している。

(1)　口縁部が内側に肥厚し、やや内湾している感じがする。大波状口縁の尖端は指で粘土をつまみ上げるような感じがする特徴的な突起を持っている。断面は体部よりも口縁部に急に厚く肥大しているのが特徴である。(1、4、5、6、7、11、15)

(2)　大波状口縁になっている土器(1、2、3、6、7、11)があり、口縁先端が鋭角になっていて、口唇の刻目の入った突起を持つ土器がある。(1、3、4、11)

(3)　平縁の土器もあるが、口縁部の断面は内側に肥大していて、内側に稜線を持っている。更に口唇部に小突起を持っている土器もある。(9、12~15)

(4)　文様帯の中に疣状の小突起を有する土器(1､7､8)がある。しかし、すべての土器に認められるわけではない。
(5)　文様は大部分が磨消縄文である。この磨消縄文帯の中の縄文が羽状になっていたり、縄文原体が短く、縄文の走向方向の違う土器が多い。
(6)　文様が磨消縄文でなく、刷毛目を施してこれを〝磨消し刷毛目文〟の土器(12~15)がある。この文様を持つ土器は磨消縄文を持つ土器より少ない。

と特徴を示している。また、第１貝層、第２混土層から、第２類土器と第１類土器が出土したが、調査中は区別出来ず、第１類土器は第２類土器との層位関係は不明であると述べている。後藤邦文より特徴を明確にしている。

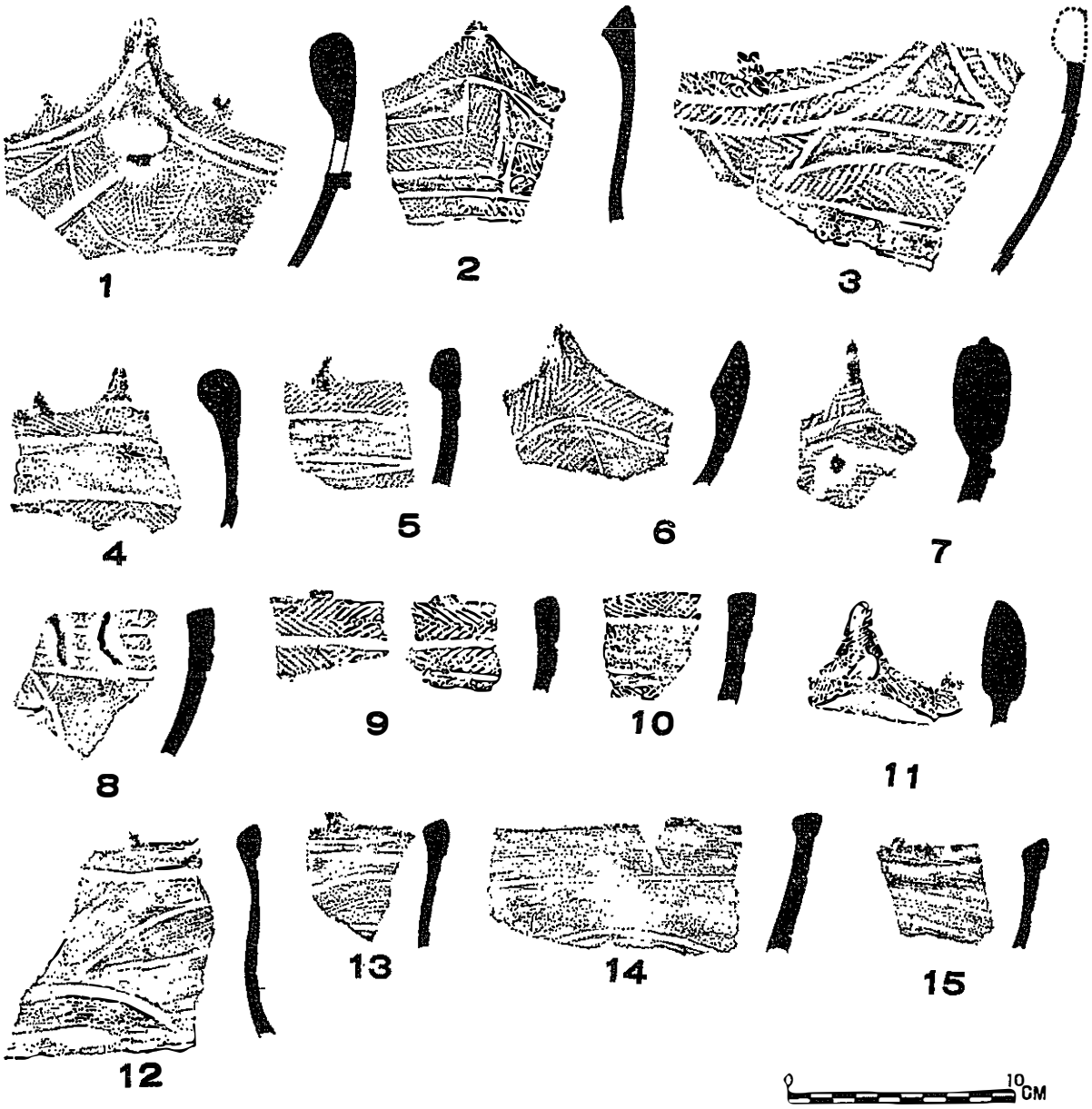


図19

１９６８年考古学雑誌に提示した西の浜式（第３類土器）は、Ｓトレンチの土器である。今回はＳⅠ～ＳⅢ区の出土遺物を中心に西の浜式の内容に迫って見たい。

①　ＳⅠの混貝土層が厚いためか、遺物の出土が多く、また下層の混土貝層も出土遺物が多い。そこで、遺物を層位順に配列してみた。

混貝土層では、平縁口縁で口縁部に大・中・小の上部２分され、大突起の裏面が２分され、それも内側に肥厚する親指状の突起が施され、大突起下に小突起が施文され、しかも、口縁下にヨコ沈線を巡らして区画し、下部に弧線文や弧状の縄文帯が施文されるものである。小破片であるために器形を知る資料がないが、頚部で段落のある深鉢形と推定される。７は口縁で強い屈折したもので、広口の壷形土器になるのか。体部文様は弧状の縄文の施文で磨消手法が使用されている。縄文帯には斜行縄文、短い羽状縄文で充填されている。短い羽状縄文は宮戸Ⅱ式の影響と考えられる。弧状文には刷毛目文で充填されたものがあるが、量は少ない。

混土貝層では、平縁に小突起のものが存在するが量が少ない。大波状の口縁に大・中・小の上部２分の突起が配され、大突起の裏面も長く２分され、しかも、内側に肥厚する親指状の特徴的な突起が施され、口縁に沈線による区画帯を巡らして区画する。混貝土層の平縁と同じである。区画から頚部の段落まで、磨消手法で大突起中心に弧状の縄文帯が施文される。また特徴として、器表面の口縁区画帯に対応して、裏面にもやや幅広い段落の伴った区画帯が巡る。口縁下に小突起を配したもの、胴部の屈折部に２分した大突起を配したものもある。弧状の縄文帯には混貝土層と同じように、斜行縄文、短い羽状縄文が充填される。刷毛目文施文は少ない。

図２０－２はＳⅠの混土貝層出土である。器高２１㎝、口径２３.１㎝、底径５㎝　上げ底風３㎝上げで小さく、不安定である。口縁に上部２分した突起８個、胴部屈折部下に大形突起４個が配される。口縁下に段落がある深鉢形である。ヨコに沈線が巡り、１段毎にタテ・ヨコ・ナナメの刷毛目文が充填され、その間の空間は丁寧な整形がなされてる。器形を知る唯一のものである。今回の整理で図を作製した。

②　ＳⅡになると量が激減する。層は貝層と混土貝層である。平縁で口縁に２分した小突起のものが多い。小形の波状口縁のものがある。口縁下、体部文様は、弧線、弧状の縄文帯が磨消手法で描かれ、斜行縄文、短い羽状縄文が充填されることは同じである。図２１－６は口縁に突起で小突起を配す。突起裏面に凹部がある。口縁やや外反した浅鉢形になると考えられる。１５以下はＳⅡの層位不明のもの、刷毛目文による施文である。

③　ＳⅢも量が少なく、ＳⅠ～Ⅱと同じ傾向である。層位は貝層、貝層下、混貝土層、混土貝層、土層から出土がある。

④　ＳⅣ～Ⅴは撹乱が多く、下層の混土貝層以下だけである。ＳⅠ～Ⅲの資料の参考と考える。

⑤　粗製土器については、短い羽状縄文施文で連続性が無く段落のある土器群(図13-9、10、13~15)。斜行縄文施文土器群(図3-11~12)。刷毛目文（櫛歯状）施文土器群(図8-15~18)。斜行格子目文施文土器群(図8-19~21、図15-48~49)等が考えられるが、これらの施文は後期全体と幅が広く、これがと西の浜式のものと断定できない。ただ、丸森町清水遺跡出土の土器群に刷

毛目状施文の土器群の存在から、松島町史１２８頁のＲトレンチの刷毛目文土器が西の浜式の粗製土器の一つに考えられると思う。小破片のために器形は、深鉢形（Ｂ・Ｆ形）と浅鉢形が認知されているのみである。

昭和３４・３５年(1959･1960) Ｎ・Ｒ・Ｓの調査資料には限界がある。

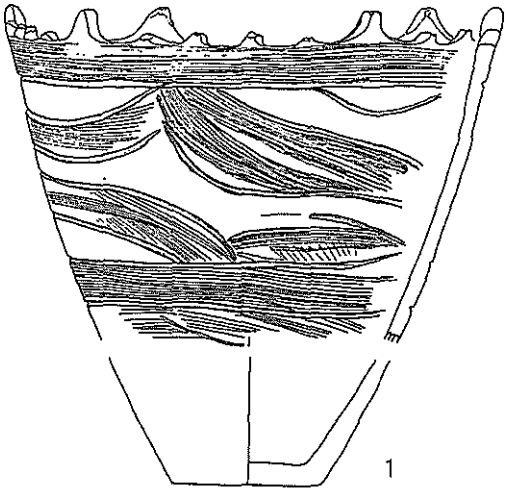
⑥　参考までにＮ・Ｒトレンチの資料を提示した。Ｎは出土量極端に少ない。完形品で波状口縁で口縁部文様下に、斜行縄文充填の弧線文、頸部文様帯があって、縄文施文に格子目沈線文の土器である。後続する宮戸Ⅲａ式に多用される要素で西の浜式でも新しいものでないかと見ている(關根達人 1993)。

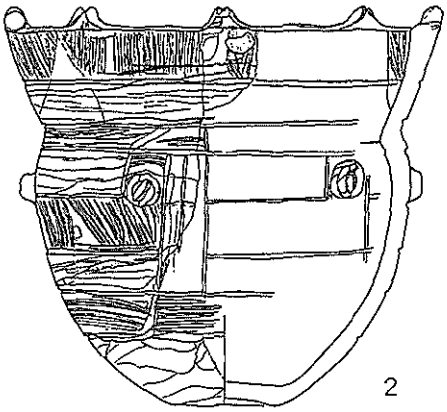
Ｒは松島町史からからの転載である。斎藤良治氏が提示した第１類土器の拓影にない資料がある。弧状の縄文充填した縄文帯の胴部拓影である。筆者が提示した西の浜式も特徴的なＳの口縁部だけであって、全体を見ていなかったことを示している

昭和５４年(1979)に気仙沼バイパス工事による田柄貝塚の調査が実施され、第Ⅶ層(最下部層)から、第Ⅳ群土器として西の浜式に相当する土器群が、多量に検出された。第Ⅳ群土器に前後する土器群も多く含まれて、層位関係が明確でない点もあるが、しかし、器形は深鉢形が２類型に大別される(B･F類)。鉢形、浅鉢形、壷形、注口、香炉形などが明らかになった(県教委 1986)。

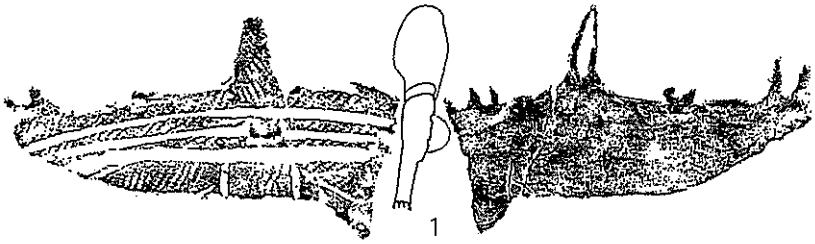
西の浜式が大きく展開するのは、田柄貝塚の調査の成果と「瘤付き土器の編年を整備」するために、「西ノ浜式」とその周辺」(關根達人 1993) として、県内はもとより東北全体に調査研究を展開し、西の浜式と考えられる土器群が分布することが明らかにしたことである。

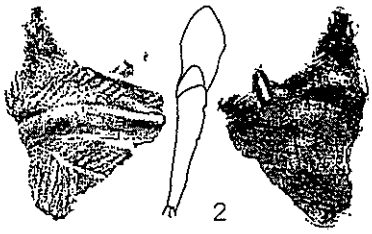
また、昭和４５年(1970)の古い調査、淡水産貝塚石越町富崎貝塚の報告がまとめられた。小破片で撹乱の多い調査で、土器項目で１０類土器として西の浜式類似の土器群を提示している(小井川和夫 2003)

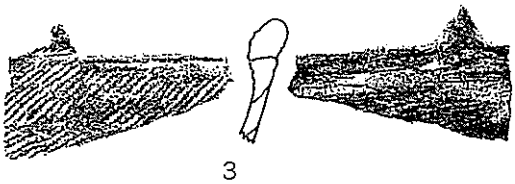


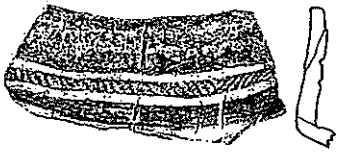


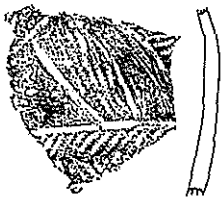
SI-混土

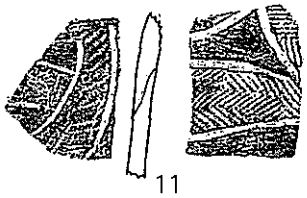


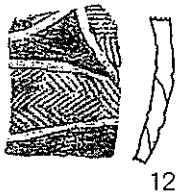


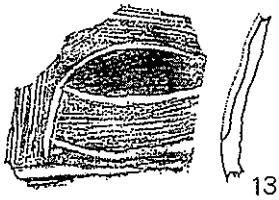


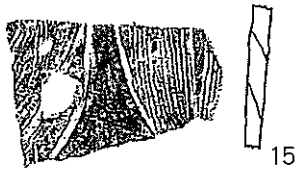




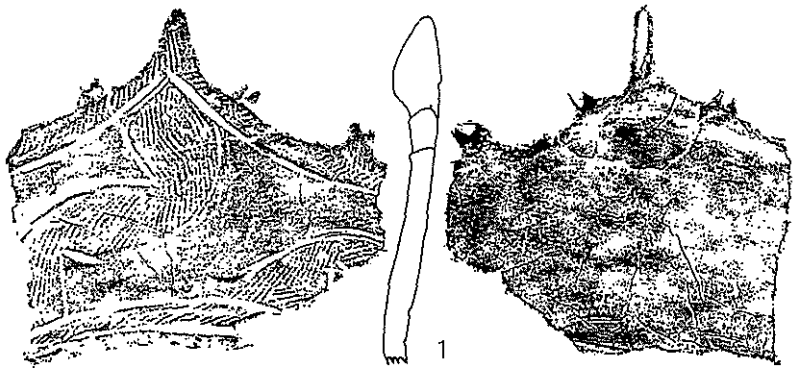


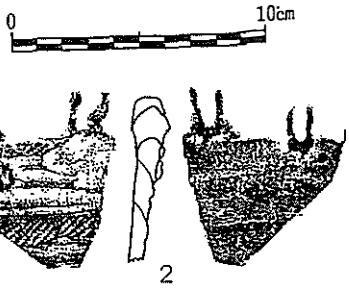






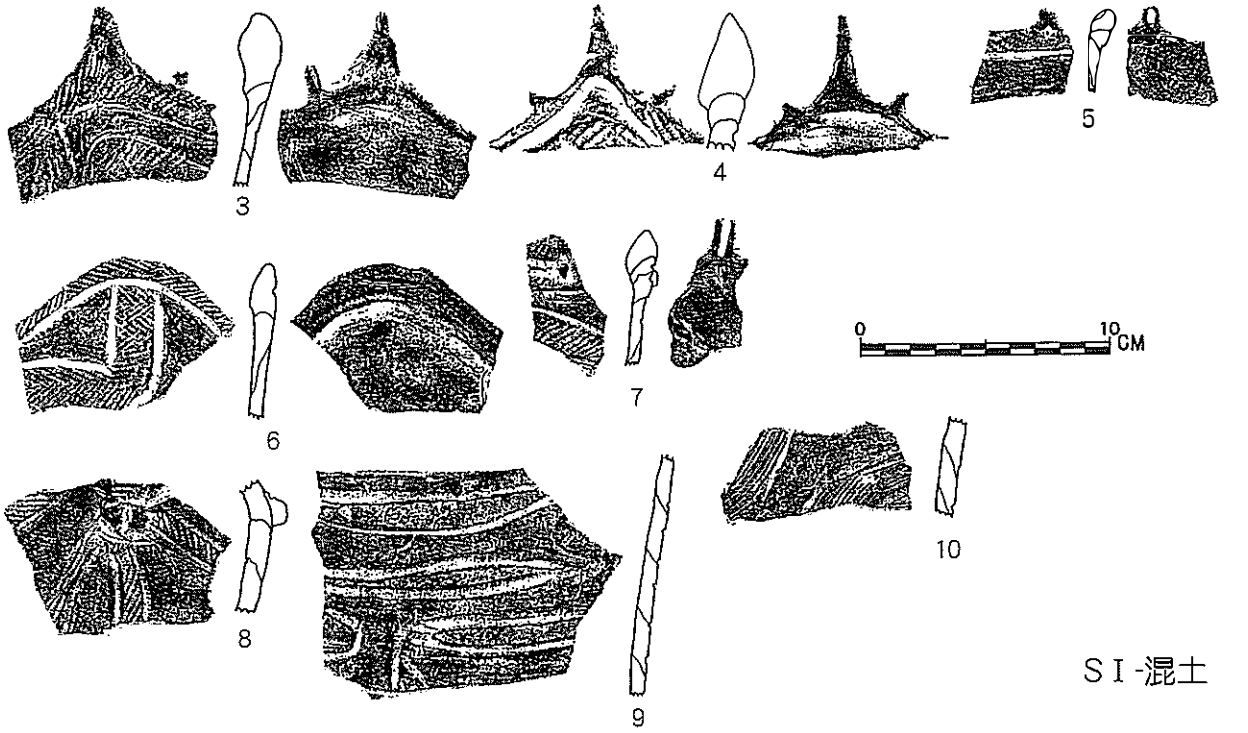
混貝





SI　混土

図20


3
4
5
6
7
0
10
CM
8
9
10
SI-混土

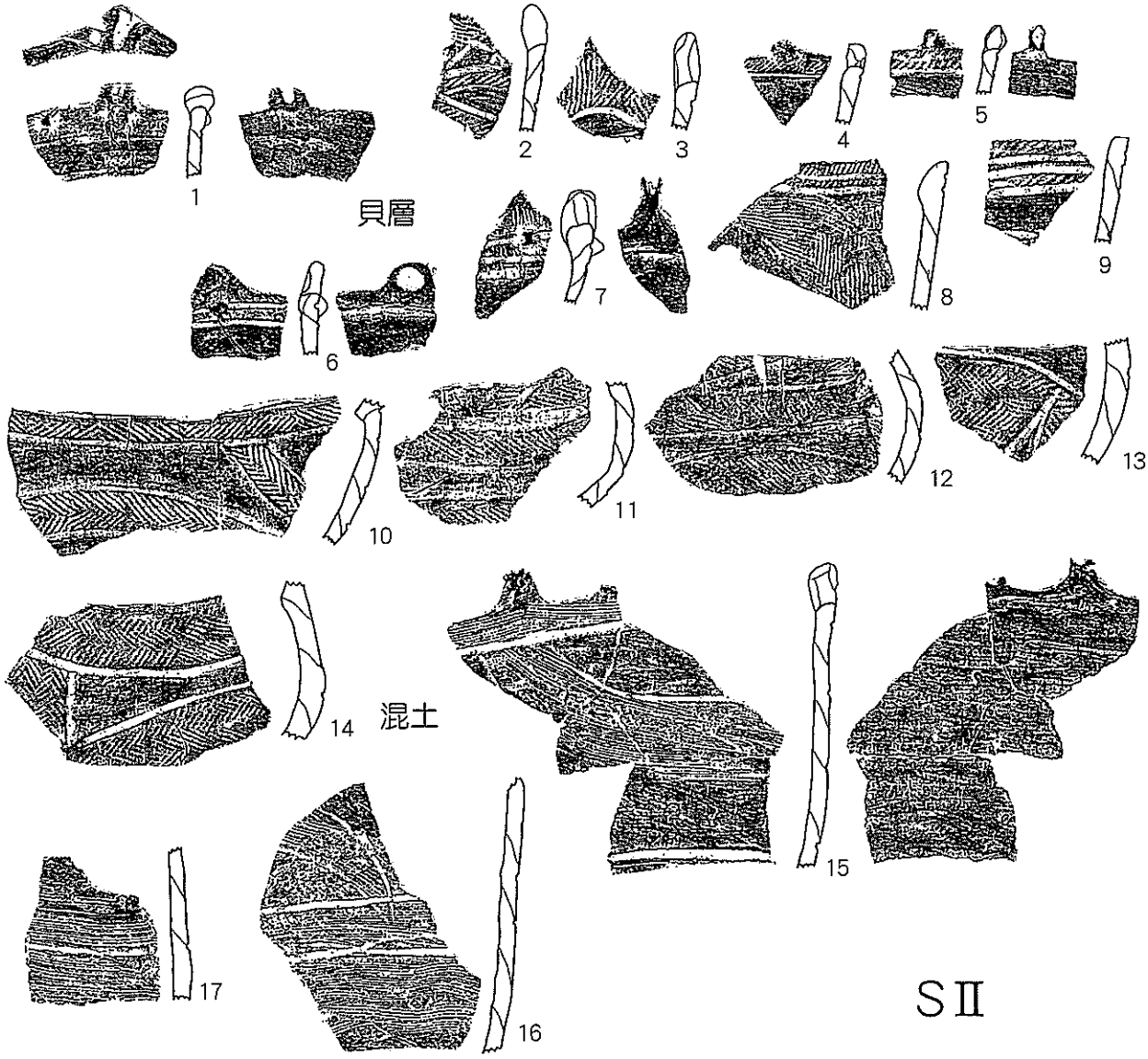

1
2
3
4
5
貝層
6
7
8
9
10
11
12
13
14
混土
15
16
17
SII

図21

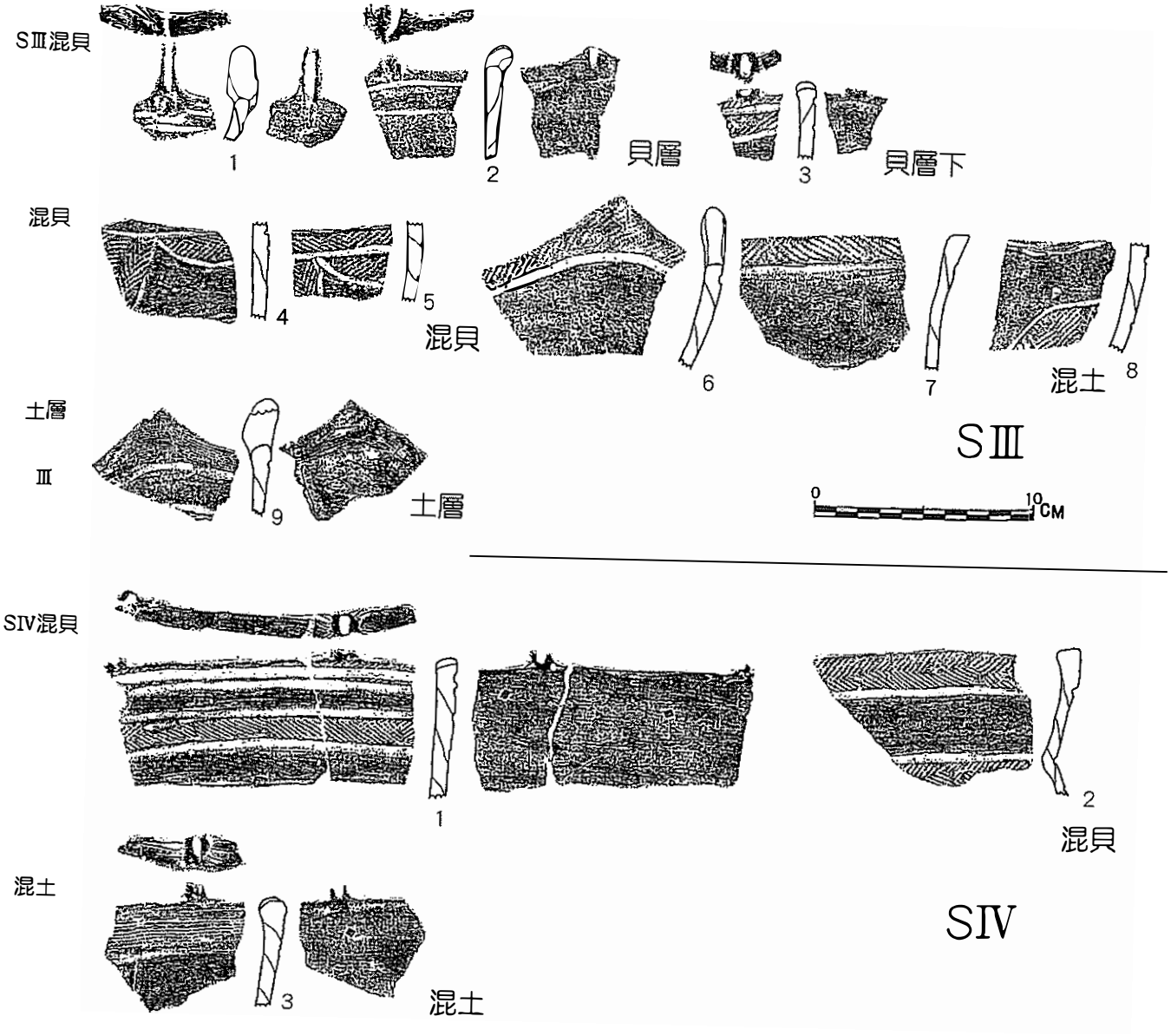
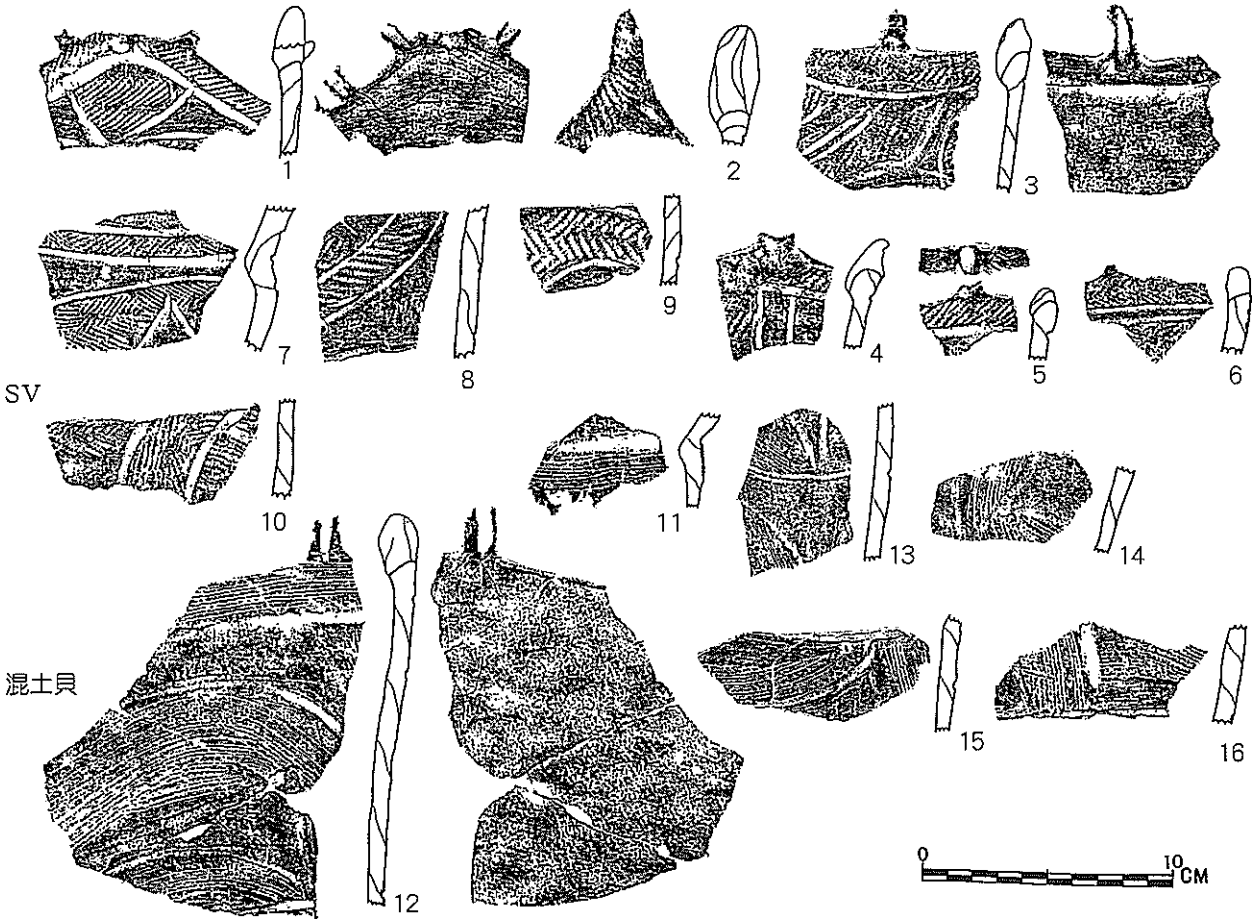

SⅢ混貝
1
2
貝層
3
貝層下
混貝
4
5
混貝
6
7
混土
8
土層
Ⅲ
9
土層
SⅢ
0
10CM
SⅣ混貝
1
2
混貝
混土
3
混土
SⅣ

図22



SV混土貝・貝層　図23

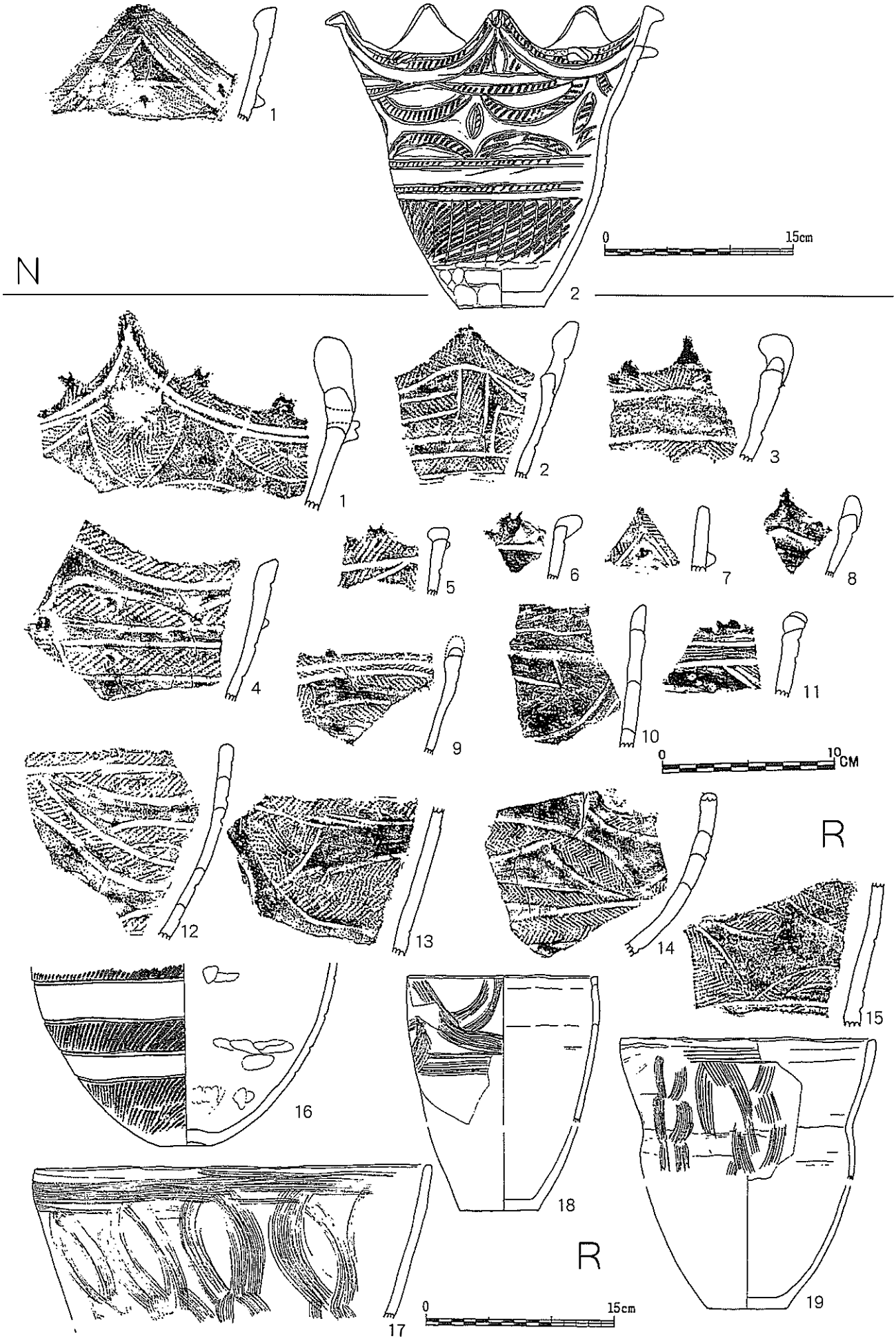


図24

［V］ ま と め

Ｓトレンチの調査は、調査区の設定のために混乱があった調査であった。遺物の処理も混乱があり、資料に層位が記名されていても図面に無いものが多かった。考古学講義受講生中心の調査でもあり、荒っぽかったようである。

層位については、ＳＩ～Ⅲ区は遺物量も多く、状態は使えるものと判断した。ＳⅣ・Ｖは下部貝層まで、撹乱状態であり、最下層の混土貝層と土層については良好と考えた。

西の浜貝塚としては、西の浜式についての資料は一番多い。残念ながら小破片が多く資料として限界がある事を痛感した。

1956　後藤勝彦　「宮城県宮戸島里浜台囲貝塚の研究」 宮城県の地理と歴史　1集

1957　同　上　「陸前宮戸島里浜台囲貝塚の土器編年について」 塩釜市教委 「教育論文」第2集

1962　同　上　「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について－陸前地方後期縄文式文化の編年的研究－」 考古学雑誌48巻1号

1968　斎藤良治　「陸前地方縄文文化後期後半の土器編年について－宮戸台囲貝塚及び西ノ浜貝塚出土の土器を中心に－」 仙台湾周辺の考古学的研究

1974　遊佐五郎　「狩猟活動の季節性について－シカ、イノシシの遺存骨による猟期の推定－」 宮城史学3

1986　宮 教 委　「田柄貝塚1－遺構・土器」 宮城県文化財調査報告書第111集

1989　松 島 町　「松島町史　資料編1－松島町の主要遺跡　2西の浜貝塚」 松島町史編纂委員会

1993　関野達人　「西ノ浜式とその周辺」 歴史第81輯

2003　小井川和夫　「富崎貝塚－北上川中流域の淡水産貝塚の研究－」 石巻市文化財調査報告書第1集

ＳＹグリット

ＳＹグリットはＮＩの北側に設けられた調査区であり、どのような事情で設けられたかは今となっては明らかでない。調査区の壁面図もない。土器の記名はＳＹであり、それ以上の追求が出来ない。資料提示だけである。土器の様相は、ＳＩ区の様相と同じ傾向である。前期初頭の時期、大木１０式・宮戸Ⅱ式・西の浜式・宮戸Ⅲａ・ｂ式がある。ＳⅣ・Ｖ区のような晩期製塩土器による撹乱がない。
（図２５～２７）

この報告書の作成は、遺物整理者である後藤勝彦。図版については山田ケイ・兼平宏子・新野のり子の各氏の協力があった。

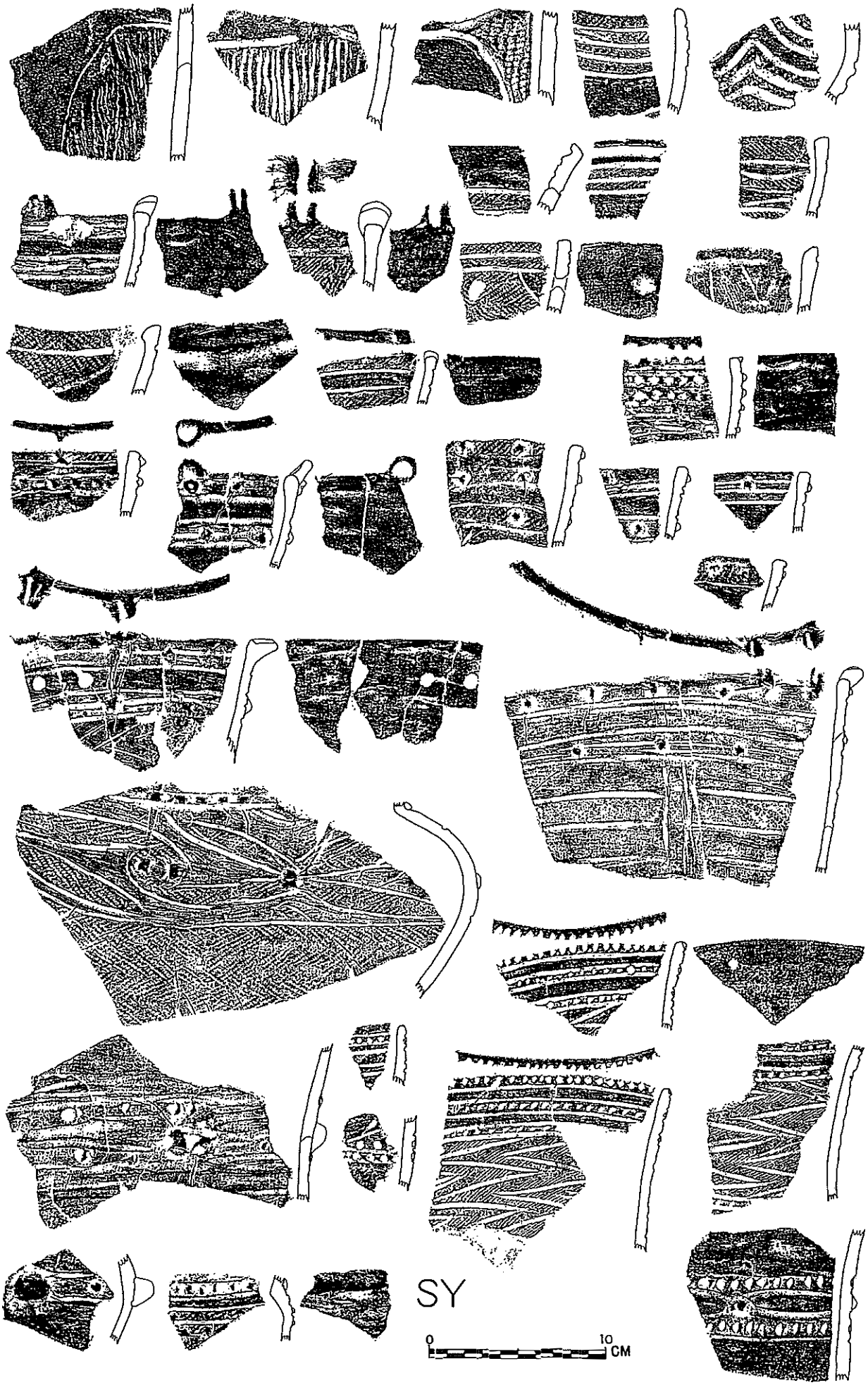


図25

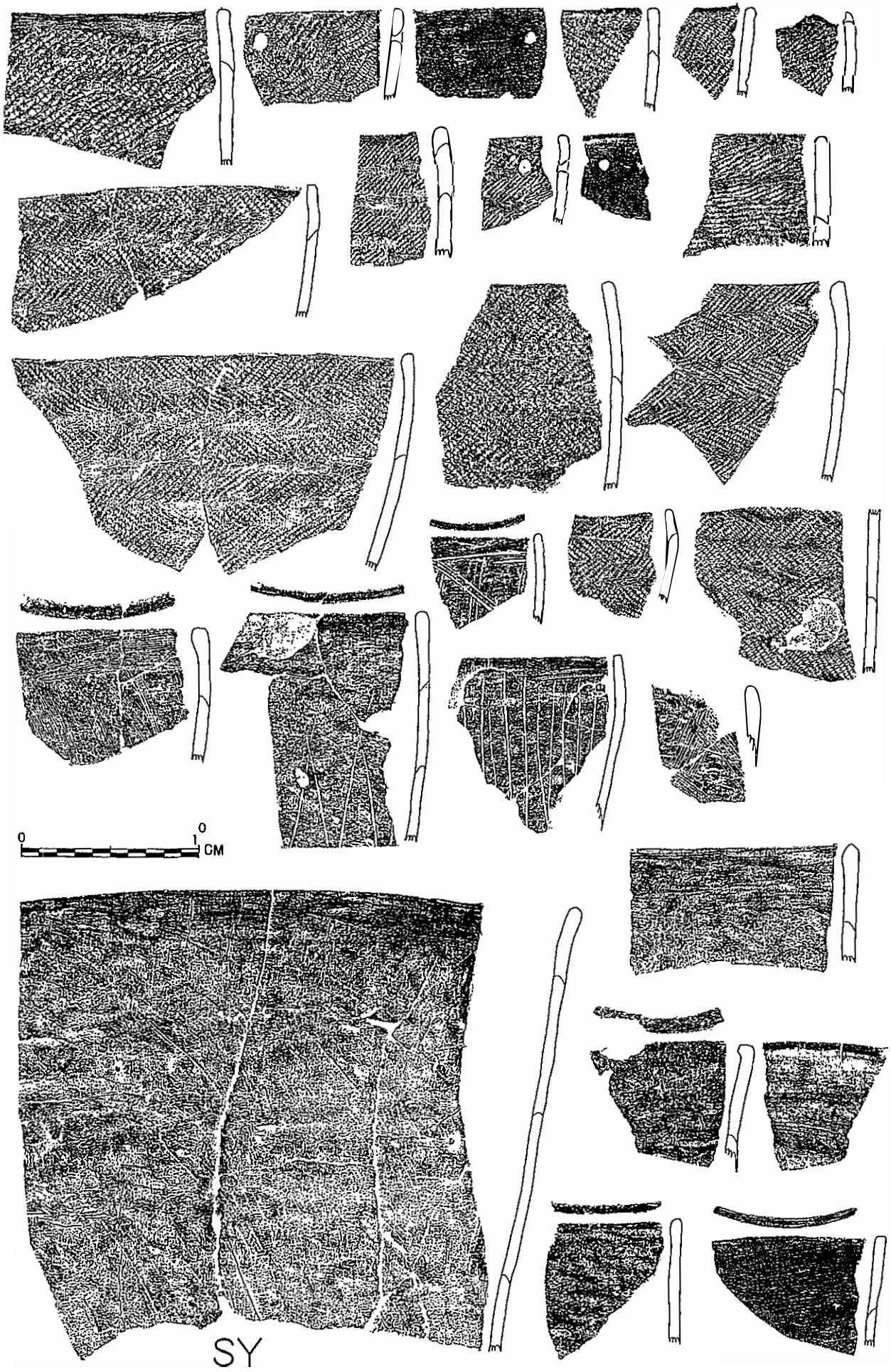
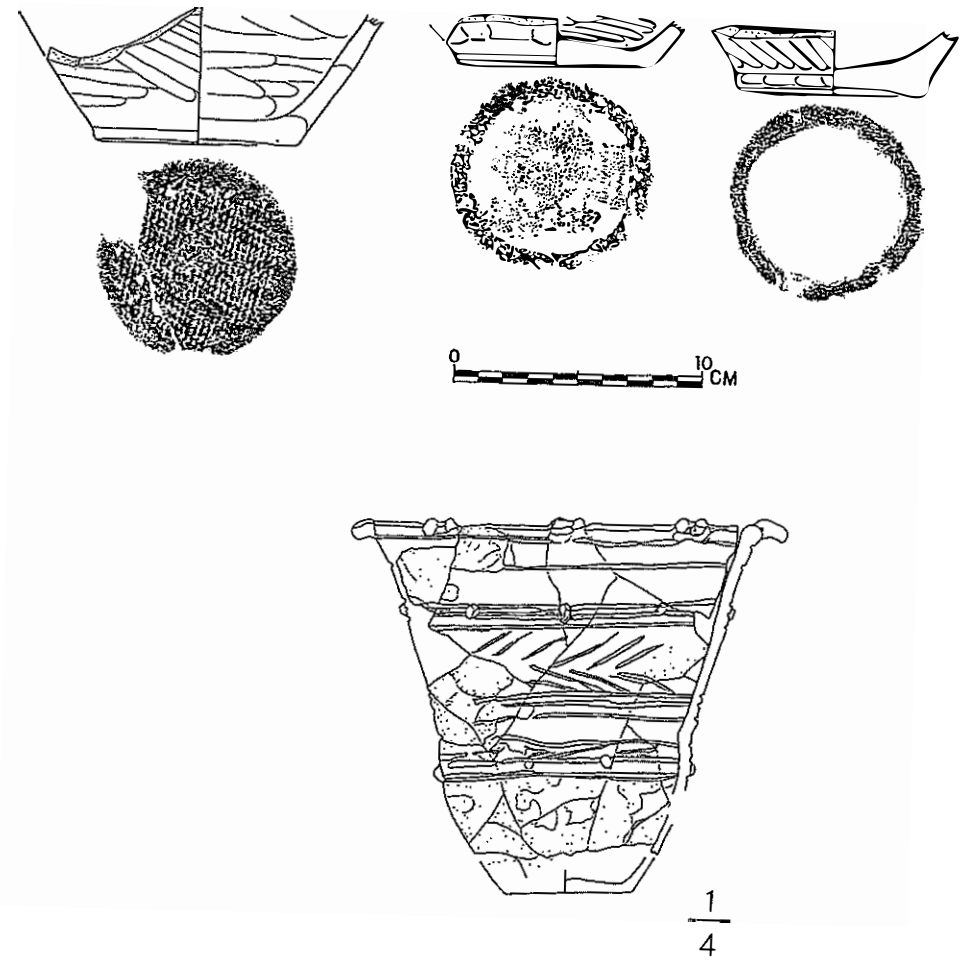


図26



SY

図27

報告書抄録

ふりがな	にしのはまかいづか　あーる・えすとれんちのちょうさ（しょうわ３４ねん・しょうわ３５ねん）
書　　名	西の浜貝塚　Ｒ・Ｓトレンチの調査(昭和３４年・昭和３５年)
副　書　名	
シリーズ名	松島町文化財調査報告書
シリーズ番号	第３集
編著者名	後藤　勝彦
編集機関	宮城県宮城郡松島町教育委員会
所　在　地	〒981-0215　宮城県宮城郡松島町高城字町10番地
発行年月日	西暦2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
国史跡 西の浜貝塚	みやぎけん 宮城県 みやぎぐん 宮城郡 まつしままち 松島町 いそざき 磯崎字 にしのはま 西の浜	17	2	38度22分53秒	141度4分56秒	1959. 07. 29 ～ 1959. 08. 03	１６㎡	編年学的研究
				38度22分53秒	141度4分56秒	1960. 07. 29 ～ 1960. 08. 03	２０㎡	編年学的研究

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西の浜貝塚	貝塚 製塩	縄文前～晩・弥生・古墳・平安	特になし	縄文土器、土製品、骨角製品、貝牙製品、自然遺物	Ｒトレンチ
西の浜貝塚	貝塚 製塩	縄文前～晩・弥生・古墳・平安	特になし	縄文土器、土製品、石製品、骨角貝牙製品、自然遺物	Ｓトレンチ

要　約	西の浜貝塚の昭和34年に調査されたＲトレンチ、昭和35年に調査されたＳトレンチの調査報告書である。縄文土器、土製品、石製品、骨角製品、貝牙製品、自然遺物等が出土している。